

平安京左京八条三坊九町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一〇―六

平安京左京八条三坊九町跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条三坊九町跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、ビル建設に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 22 年 9 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条三坊九町跡・東本願寺前古墓群
- 2 調査所在地 京都市下京区七条通烏丸西入東境町 171、173、173- 1、173-2、175
- 3 委 託 者 株式会社ヨドバシカメラ 代表取締役 藤沢昭和
- 4 調査期間 2010年5月10日～2010年7月9日
- 5 調査面積 264 m²
- 6 調査担当者 山本雅和
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「島原」・「五条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 山本雅和
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 調査・遺物整理にあたっては、下記の方々からご教示をいただいた。
五十川伸矢、大村拓生、木立雅朗、北野信彦、南部裕樹、西山良平、丸山真史（敬称略 50音順）



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	2
(1) 遺跡の位置と環境	2
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	8
(3) 第1面の遺構	11
(4) 第2面の遺構	13
(5) 第3面の遺構	18
(6) 第4面の遺構	22
4. 遺 物	26
(1) 遺物の概要	26
(2) 土器類	26
(3) 瓦類	39
(4) 土製品	40
(5) 石製品	45
(6) 金属製品	46
(7) 木製品	48
(8) その他の出土遺物	48
5. ま と め	49
(1) 遺構の変遷	49
(2) 土坑 80 出土の石灰について	53

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	北西部西壁断面（南東から）
		2	南壁断面（北から）
図版 2	遺 構	1	中央部・南部第1面（北から）
		2	北西部第1面（南東から）

- 3 土坑 72 (東から)
- 図版 3 遺構 1 中央部・南部第 2 面 (北から)
2 七条大路路面・南側溝 (東から)
- 図版 4 遺構 1 土坑 80 半裁断面 (北から)
2 土坑 115 遺物出土状況 (北から)
3 井戸 84 (北西から)
4 井戸 125 (北から)
- 図版 5 遺構 1 井戸 81 (北西から)
2 井戸 95 (北から)
3 井戸 78 (東から)
4 井戸 116 (西から)
- 図版 6 遺構 1 中央部・南部第 3 面 (北から)
2 北西部第 3 - 2 面 (南から)
3 七条大路路面 (東から)
- 図版 7 遺構 1 土坑 262 遺物出土状況 (南西から)
2 土坑 290・土坑 301 (北北東から)
3 井戸 202 (北東から)
4 井戸 192 (西から)
- 図版 8 遺構 1 中央部・南部第 4 面 (北から)
2 北西部第 4 面 (南から)
3 七条大路路面断面 (南から)
- 図版 9 遺構 1 井戸 415 (西から)
2 井戸 420 (北から)
3 井戸 362 (南から)
4 井戸 383 (北から)
- 図版 10 遺物 1 土坑 115 出土土器
2 井戸 125 出土土器
- 図版 11 遺物 1 瓦
2 土製品
- 図版 12 遺物 1 石製品
2 金属製品

挿 図 目 次

図 1	調査地位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 500)	1
図 3	調査前状況 (北から)	2
図 4	作業状況 (北東から)	2
図 5	周辺調査位置図 (1 : 5,000)	3
図 6	北西部北壁断面図 (1 : 50)	7
図 7	西壁断面図 (1 : 50)	8
図 8	南壁断面図 (1 : 50)	9
図 9	第 1 面平面図 (1 : 150)	10
図 10	第 2 面平面図 (1 : 150)	12
図 11	溝 155・溝 150 断面図 (1 : 20)	13
図 12	井戸 81・井戸 84・井戸 95・井戸 125 実測図 (1 : 40)	14
図 13	井戸 78・土坑 80 実測図 (1 : 40)	16
図 14	土坑 115 実測図 (1 : 20)	17
図 15	第 3 面平面図 (1 : 150)	19
図 16	井戸 192・井戸 202 実測図 (1 : 40)	20
図 17	土坑 290 実測図 (1 : 20)	21
図 18	第 4 面平面図 (1 : 150)	23
図 19	井戸 383・井戸 400・井戸 415・井戸 420 実測図 (1 : 40)	24
図 20	土器実測図 1 (1 : 4)	27
図 21	土器実測図 2 (1 : 4)	28
図 22	土器実測図 3 (1 : 4)	30
図 23	土器実測図 4 (1 : 4)	32
図 24	土器実測図 5 (1 : 4)	34
図 25	土器実測図 6 (1 : 8)	36
図 26	土器実測図 7 (1 : 8)	38
図 27	瓦拓影・実測図 (1 : 4)	40
図 28	土製品実測図 1 (1 : 2)	41
図 29	土製品実測図 2 (1 : 2)	42
図 30	土製品実測図 3 (1 : 4)	43
図 31	土製品拓影・実測図 4 (1 : 4)	44

図 32	石製品実測図（1：2）	45
図 33	金属製品実測図（1：2）	47
図 34	遺構変遷図 1（平安時代から鎌倉時代前半）	50
図 35	遺構変遷図 2（鎌倉時代後半から江戸時代）	51
図 36	石灰サンプルブロック	53
図 37	石灰サンプルブロック細部	53
図 38	石灰顕微鏡写真 1	53
図 39	石灰顕微鏡写真 2	53

表 目 次

表 1	周辺調査概要表	4
表 2	遺構概要表	9
表 3	遺物概要表	26

平安京左京八条三坊九町跡

1. 調査経過

今回の調査は、(仮称) 京都ヨドバシビル建設工事に伴う発掘調査である。(仮称) 京都ヨドバシビル建設工事にあたっては、2009年10月から12月にかけて1次調査として発掘調査を実施しており、今回の調査は2次調査となる(図1)。

調査地は平安京左京八条三坊九町および東本願寺前古墓群にあっており、周辺の調査でも多数の遺構が見つかることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「文化財保護課」という)が試掘調査を実施したところ、室町時代の遺物包含層や鎌倉時代の多量の土師器皿を含む土坑が検出された。これを受けて文化財保護課から埋蔵文化財発掘調査の指導が行われ、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施するはこびとなった。

調査区は文化財保護課の指導に基づき、既存の地下室・建物基礎を避けて、東西約15m・南北約14mの方形の北西側に東西約4m・南北約14mの細長い部分を取り付く形で設定した。調査面積は約264㎡である(図2)。

調査は2010年5月10日より開始し、盛土・江戸時代中期以降の包含層を約0.6～1.2mの深さまで機械掘削したのち4面に分けて実施した。各遺構面では遺構検出・遺構登録ののち遺構掘削・遺物採集を行い、遺跡の状況が明らかになった段階で写真撮影・遺構実測を実施し、7月9日に

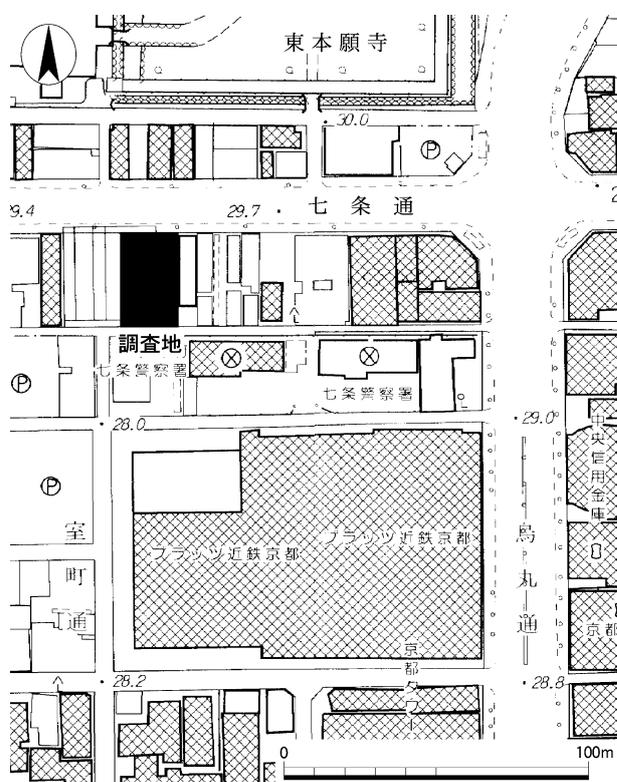


図1 調査地位置図 (1 : 2,500)

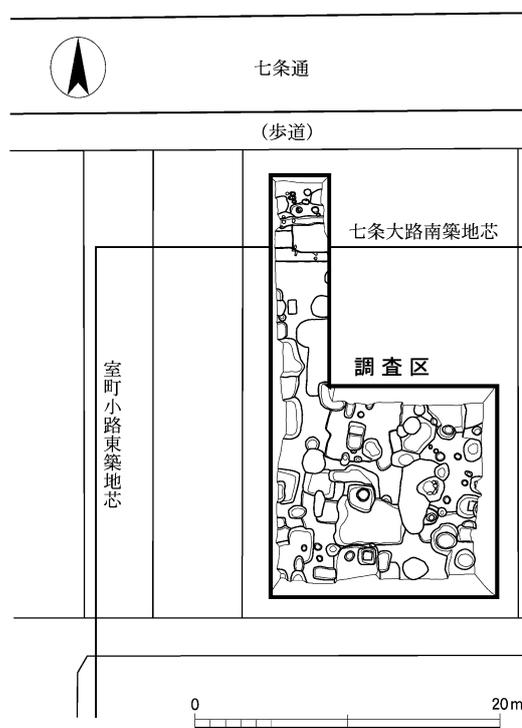


図2 調査区配置図 (1 : 500)

すべての現場作業を終了した。なお、機械掘削土・調査に伴う人力掘削土は大部分を場外へ搬出し、一部は調査地内に積み上げて処理した（図3・4）。

2. 遺 跡

（1）遺跡の位置と環境

調査地は京都盆地東部に位置し、地勢的には東側を南流する鴨川によって形成された扇状地上に立地している。そのため調査地周辺は北東から南西に向かってわずかに傾斜する地形となる。

調査地は『京都市遺跡地図』では平安京左京八条三坊九町北西角近くおよび東本願寺前古墓群中央部にあっており、¹⁾ 周辺の歴史的状況は次のように概観することができる。²⁾

平安京左京八条三坊九町については、鎌倉時代前半には北部に平宗親の私領があり、のちに源友永や清原為国に譲渡されたことを記した文書が残されている。また、調査地北側の左京七条三坊十二町には平安時代中期に藤原実季の邸宅、南東側の左京八条三坊十五町には平安時代末期に藤原為保の邸宅、東側の左京八条三坊十六町には平安時代末期に藤原家経の邸宅が所在したと推定されている。

調査地西側の七条大路と町尻小路の交差点付近は、平安時代後期からの商業・手工業生産の中心地の一つである七条町として知られている。さらに調査地南側一帯は平安時代後期から鎌倉時代前半にかけて、左京八条三坊十三町にあった八条院暲子の邸宅を中心として周囲に御倉町・院町などの付属施設が営まれた。暲子没後は皇族に伝領されたのち、鎌倉時代後半に後宇多天皇により東寺に寄進され東寺領となった。東寺では居住者から年貢・地子を徴収するための検地帳を数回にわたり作成しており、記載から「金屋」・「塗師」・「蒔繪」などの職業に携わる人々が暮らしていたことがわかる。

東本願寺前古墓群は、おおよそ北は花屋町通、東は東洞院通、南はJ R 京都駅ビル、西は新町通に囲まれた南北約 800 m・東西約 450 mの範囲に拡がる鎌倉時代から室町時代にかけての古墓群である。



図3 調査前状況（北から）



図4 作業状況（北東から）

(2) 周辺の調査

調査地周辺ではこれまでに多数の調査を実施している。調査成果の概要については図5・表1にまとめた。

平安時代前期から中期の遺構は、八条三坊十六町北西部の調査（図5－39・40）では、七条大路路面と南側溝を検出した。八条三坊九町東部中央で実施した1次調査（図5－48）では、平安時代前期から中期の池跡を検出したことから、九町に貴族の邸宅が所在したことが明らかとなった。しかし、これらより南側では、自然流路や湿地を各所で検出しており、調査地周辺に関わる平安時代中期以前の文献史料があまり残されていないことと合わせると、平安時代後期になるまでは、必ずしも居住に適した場所ではなかったことが推定できる。

鎌倉時代を中心に平安時代後期から室町時代前期にかけては、遺跡が最も活況を呈する時期である。七条大路はもとより、塩小路・八条坊門小路・室町小路などの街路が整備され、検出遺構が大幅に増加する。調査地近隣の状況を見ると、北東側の左京七条三坊十三町（図5－47）では、平安時代後期から鎌倉時代後半の井戸・土坑などを検出した。南西側の左京八条三坊七町（図5－28～31）では、平安時代中期から後期の井戸・土坑、鎌倉時代前半の井戸・溝・土坑・柱穴、

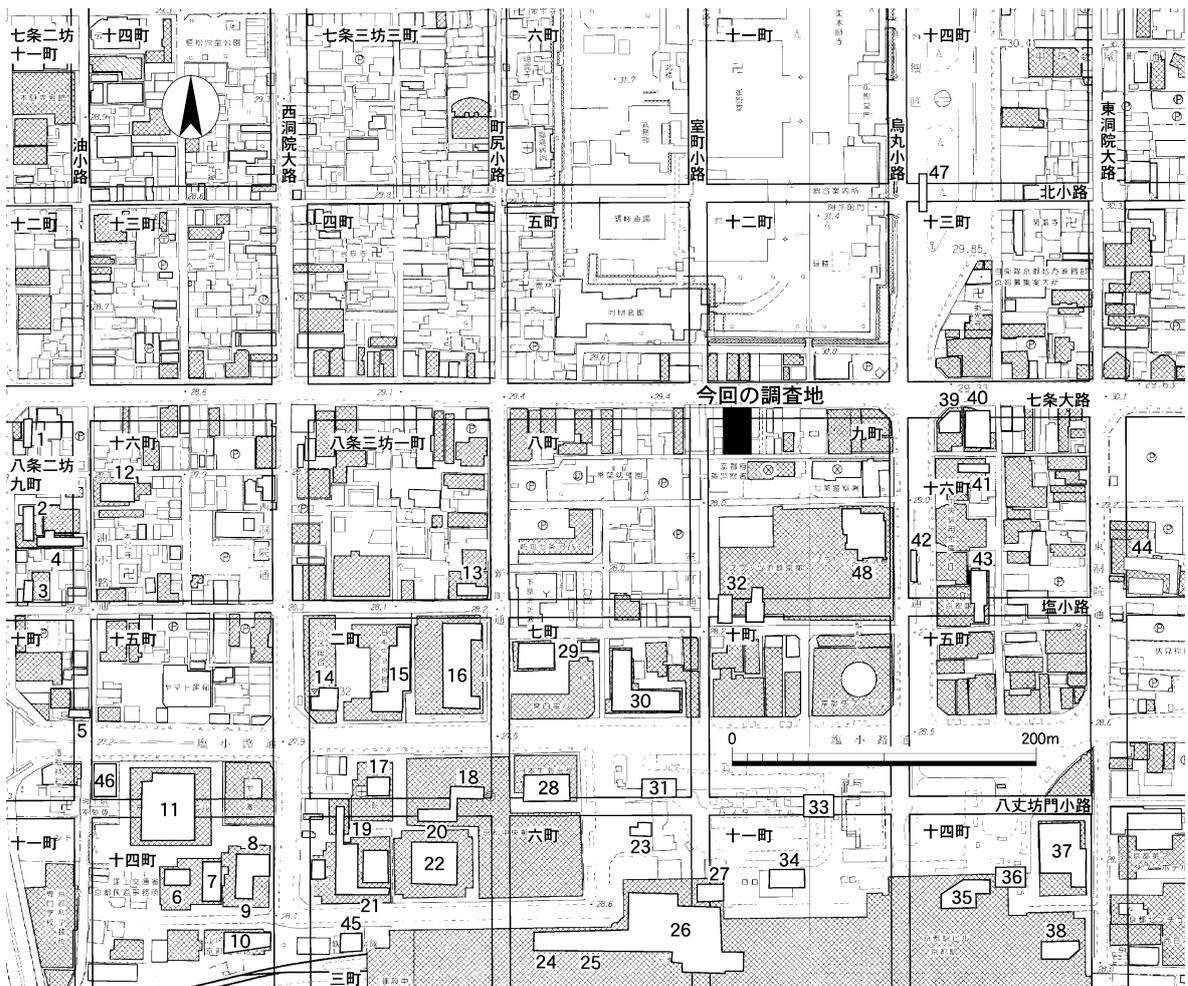


図5 周辺調査位置図（1：5,000）

表1 周辺調査概要表

番号	条坊・町	調査概要	文献
1	八条二坊九町	平安中期以降の井戸・土坑・柱穴	「平安京左京七条二坊・八条二坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
2	八条二坊九町	平安中期以降の通路・井戸・土坑・柱穴	「平安京左京七条二坊・八条二坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
3	八条二坊九町	平安中期～後期の通路、平安時代中期以降の井戸・土坑・柱穴	「平安京左京七条二坊・八条二坊」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989
4	八条二坊九町・油小路	平安～江戸の油小路路面・西側溝、平安の土坑・柱穴、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴	「平安京左京八条二坊」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
5	八条二坊十町・油小路	平安～室町の油小路路面・西側溝、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・柵・柱穴、室町の溝・土坑・炉、室町の鋳型・埴埴出土	「平安京左京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報 昭和57年度』京都市文化観光局 1983 「左京八条二坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984
6	八条二坊十四町	平安後期の建物、鎌倉の土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴・木棺墓、室町の鋳型・埴埴・金属滓出土	「平安京左京八条二坊1」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
7	八条二坊十四町	平安前期の溝・土坑、平安後期の溝、鎌倉の井戸、室町の土坑・木棺墓・犬墓、鋳型・埴埴出土	「平安京左京八条二坊」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002
8	八条二坊十四町	平安前期の池状遺構、平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柵・柱穴・木棺墓、鎌倉の鋳型・埴埴・輪羽口出土	「平安京左京八条二坊1」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
9	八条二坊十四町	平安後期の溝、鎌倉～室町の井戸・土坑、鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土	「平安京左京八条二坊2」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
10	八条二坊十四町	平安前期の土坑、平安後期～鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町前半の井戸・土坑・柱穴、鎌倉の鋳型・輪羽口出土	「平安京左京八条三坊」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1997
11	八条二坊十四町・十五町・八条坊門小路	平安後期～室町初頭の八条坊門小路路面・両側溝、平安後期の井戸・溝、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴・炉・埋喪・木棺墓、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土	「平安京左京八条二坊2」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
12	八条二坊十六町	平安の井戸・溝・土坑・池状遺構、鎌倉～室町の井戸・土坑・柱穴、鎌倉の埴埴出土	「平安京左京八条二坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991
13	八条三坊一町	古墳～平安の流路、平安後期の建物・井戸、鎌倉前半の建物・土坑、鎌倉後半～室町の井戸・土坑・埋喪・墓、鋳型・埴埴出土	『京都第3タワーホテル新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査平安京左京八条三坊跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
14	八条三坊二町・西洞院大路	江戸の西洞院川	未刊行
15	八条三坊二町	平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴・埋喪・木棺墓・土壇墓、鎌倉の鋳型出土	『平安京左京八条三坊二町-第2次調査-』古代学協会 1985
16	八条三坊二町	平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の墓、平安中期～鎌倉の鋳型・埴埴・輪羽口出土	『平安京左京八条三坊二町』古代学協会 1983
17	八条三坊二町	詳細不明	未刊行
18	八条三坊二町・八条坊門小路	平安後期の八条坊門小路北側溝・井戸	「平安京・左京八条三坊跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1978
19	八条三坊三町・八条坊門小路	平安後期の土坑、鎌倉～室町前半の井戸・土坑・柱穴、室町後半以降の耕作溝、鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土	「平安京左京八条三坊2」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
20	八条三坊三町・八条坊門小路	詳細不明	未刊行
21	八条三坊三町	平安前期の土坑・溝、平安後期の土坑、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴・埋喪、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口出土	「平安京左京八条三坊1」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999
22	八条三坊三町	平安中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴、室町の建物・井戸・溝・土坑・柱穴、桃山～江戸の耕作溝、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口出土	「平安京左京八条三坊1」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
23	八条三坊六町・八条坊門小路	平安後期～室町の八条坊門小路路面・北側溝、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土	「平安京左京八条三坊1」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
24	八条三坊六町	平安後期～鎌倉の土坑、室町の溝	「左京八条三坊」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984
25	八条三坊六町	鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の鋳型・埴埴出土	「平安京左京八条三坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996

番号	条坊・町	調査概要	文献
26	八条三坊六町・十一町・室町小路	平安中期～後期の流路・井戸、平安後期～室町前半の室町小路路面・両側溝、鎌倉～室町前半の建物・竪穴状遺構・井戸・溝・土坑・柱穴・炉、室町後半の耕作溝、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土	『平安京左京八条三坊2』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
27	八条三坊六町・十一町・室町小路	室町小路路面・両側溝、室町の井戸	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査-』(株)京都ステーションセンター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
28	八条三坊七町・八条坊門小路	奈良～平安中期の井戸、鎌倉～室町の八条坊門小路北側溝、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・土坑・柱穴・炉・墓	『平安京左京八条三坊』『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988
29	八条三坊七町	平安中期～後期の井戸・土坑、鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町の井戸・溝・土坑・柱穴・埋甕・土壇墓・銭貨埋納土坑、鎌倉～室町の鋳型・砥石・金属滓出土	『平安京左京八条三坊七町』京都文化財団 1988
30	八条三坊七町	平安前期～中期の流路・井戸・土坑、平安後期～鎌倉前半の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉後半～室町の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の鋳型出土	『平安京左京八条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982
31	八条三坊七町	平安前期～中期の流路、平安後期～鎌倉の井戸・土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の鋳型出土	『平安京左京八条三坊1』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
32	八条三坊九町・十町・塩小路	平安後期～室町の塩小路路面・両側溝・井戸・土坑・柱穴、平安後期～室町の鋳型・埴埴出土	『平安京左京八条三坊九・十町-七条町の調査-』古代文化調査会 2007
33	八条三坊九町・十町・八条坊門小路	平安の八条坊門小路路面と両側溝	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査-』(株)京都ステーションセンター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
34	八条三坊十一町	詳細不明	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査-』(株)京都ステーションセンター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
35	八条三坊十四町	平安前期以前の湿地、平安後期～鎌倉の土坑、室町前半の井戸・溝・土坑	「No.69」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982
36	八条三坊十四町	平安の包含層、鎌倉末～室町の溝・柱穴	『平安京左京八条三坊-京都駅前地下街建設に伴う発掘調査-』(株)京都ステーションセンター・(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980
37	八条三坊十四町	平安中期以前の湿地、平安後期～鎌倉の溝、鎌倉後半～室町前半の建物・井戸・土坑・柱穴・竪穴状遺構・埋甕、室町の漆器椀・皿多量出土	『平安京左京八条三坊2』『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998
38	八条三坊十四町	平安中期以前の湿地、鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴・竪穴状遺構、室町の井戸・土坑・柱穴、鎌倉の草履状木製品出土	『平安京左京八条三坊2』『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996
39	八条三坊十六町・七条大路	平安前期～鎌倉の七条大路路面・南側溝、平安～江戸の井戸・溝・土坑・柱穴	『平安京左京八条三坊1』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994
40	八条三坊十六町・七条大路	古墳の流路、平安中期～鎌倉の七条大路路面・南側溝、平安中期～後期の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉～室町の鋳型・埴埴・輪羽口出土	『平安京左京八条三坊2』『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994
41	八条三坊十六町	平安の井戸・溝・土坑・柱穴、平安末～室町の建物・井戸・溝・土坑	『平安京左京八条三坊』『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1989
42	八条三坊十六町	平安中期の包含層、後期の井戸・土坑、鎌倉～室町前半の溝・土坑・柱穴	「No.74」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982
43	八条三坊十六町・塩小路	平安前期～後期の湿地、平安後期の塩小路路面と側溝、鎌倉～室町の建物・井戸・溝・土坑、室町の輪羽口・金属滓出土	『平安京左京八条三坊十五町・十六町』-京都銀行京都駅前支店新築工事に伴う調査-古代文化調査会 2005
44	八条四坊一町	平安の井戸・溝・土坑、鎌倉の井戸・溝・土坑・柱穴、室町の井戸・溝・土坑・柱穴、江戸の墓跡、平安前期の漆紙文書片出土	『平安京跡発掘調査報告 左京八条四坊一町』関西文化財調査会 2004
45	八条三坊三町	平安中期の流路、鎌倉～室町の井戸・溝・土坑・柱穴、室町の鏡の鋳型・埴埴・輪羽口・金属滓出土	『平安京左京八条三坊三町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005
46	八条二坊十五町	平安前期の流路、平安中期の園池、平安後期～室町の井戸・土坑・柱穴・炉、平安後期の鋳型、室町の埴埴出土	『平安京左京八条三坊十五町』株式会社日開コンサルタント 2007
47	七条三坊十三町・北小路	平安後期から鎌倉後半の井戸・土坑・柱穴、室町の土坑	「No.73」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1982
48	八条三坊九町	平安前期から中期の池・井戸、鎌倉の建物、平安後期から室町の井戸・土坑・柱穴	『平安京左京八条三坊九町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2010

鎌倉時代後半から室町時代の井戸・溝・土坑・柱穴・埋甕・銭貨埋納土坑・土壙墓などを検出した。東側の左京八条三坊十六町（図5－39～43）では、平安時代中期から後期の井戸・溝・土坑・柱穴、鎌倉時代から室町時代の井戸・溝・土坑・柱穴などを検出した。南側の塩小路の調査（図5－32）では、平安時代後期から室町時代の塩小路路面・両側溝に加えて、井戸・土坑・柱穴などを検出した。また、九町で実施した1次調査（図5－48）では、鎌倉時代の大型建物、平安時代後期から室町時代の井戸・土坑・柱穴などを検出した。

これらの調査では、平安時代から室町時代の多量の土器類のほか、瓦類・土製品・石製品・金属製品などが出土している。特に平安時代後期から室町時代前期にかけては鋳型・坩堝・取瓶・鞆羽口などが多く出土しており、鋳造生産を中心とする手工業に関わる遺物が大きな特徴となっている。

東本願寺古墓群については、地下鉄烏丸線建設工事に伴う発掘調査などにより、これまでに200基以上の墓跡を検出した。墓の形態には蔵骨器を用いるもの、河原石を積み上げたもの、多量の土師器を埋納したものなどがある。また、八条二坊十四町（図5－6・7・8・11）、八条三坊一町（図5－13）・二町（図5－15・16）・七町（図5－29）で木棺墓や土壙墓を検出した。

室町時代中期以降になると、七条大路南側の広い範囲で耕作土と耕作溝を認めていることから、耕作地化が進んだことがわかる。耕作地としての利用は近代になってからの開発がおよぶまで継続した。

3. 遺 構

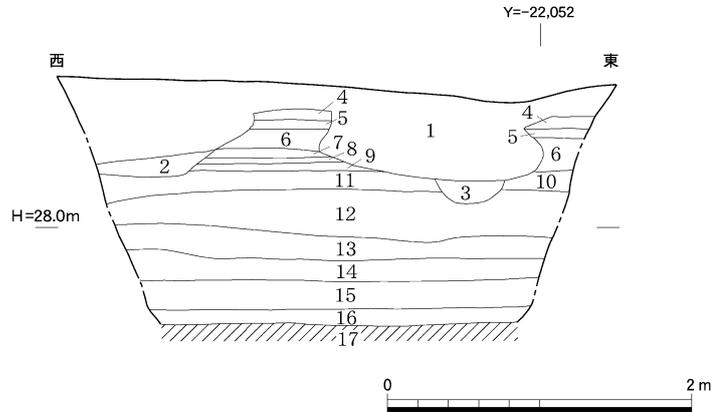
(1) 基本層序 (図版1・2、図6～8)

調査地全域には約 20～30 cmの厚さの表土・近代盛土が拡がり、一部では盛土が地表下約 70 cmにまで及ぶ。この下層は約 40～80 cmの厚さの江戸時代中期から後期の整地層・包含層である暗褐色砂泥・黒褐色砂泥などである。一部では蛤御門の変にともなう大火の焼けた瓦などを処理した土坑が地表下約 120 cmにまで及ぶ。

これらの下層は約 10～20 cmの厚さの江戸時代前期の整地層であるにぶい黄褐色砂泥・黒褐色砂泥などである。ただし、調査区北西部北端は江戸時代中期の整地層下面是七条大路路面となる。また、東部は江戸時代中期から後期の包含層により攪乱され、江戸時代前期の整地層は残っていない。江戸時代前期の遺構面は全体的に北から南に向かって緩やかに傾斜する。

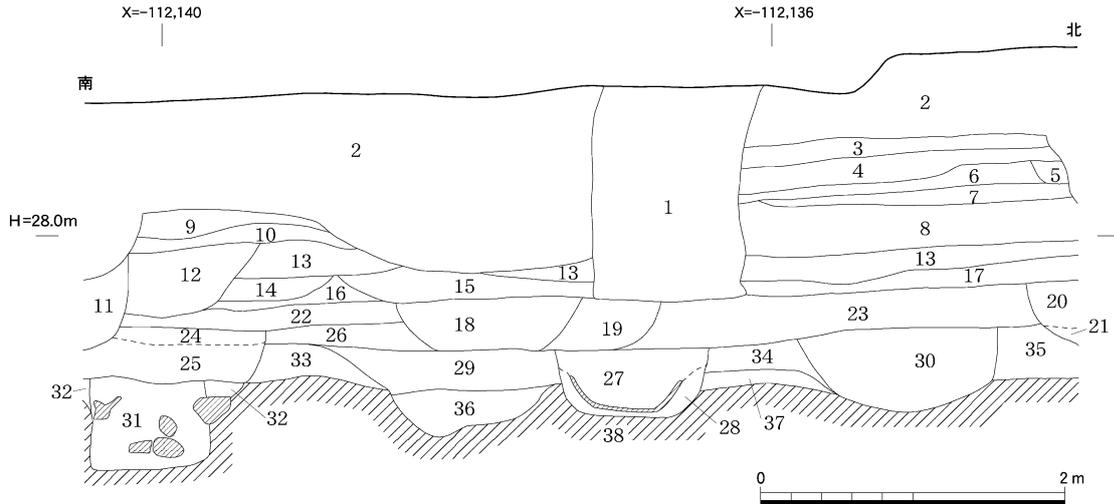
江戸時代前期の整地層の下層は約 30 cmの厚さの鎌倉時代から室町時代の整地層・包含層である黒褐色砂泥などである。面的な拡がりには断続的で、遺構が重複する状態で堆積している。また、北西部中央は鎌倉時代の大規模な土坑 200 が基盤の砂礫層にまで及ぶ。

鎌倉時代から室町時代の整地層・包含層の下層は約 20～40 cmの厚さの平安時代後期の整地層である暗オリーブ褐色砂泥・暗灰黄色砂泥などである。砂質で下部は礫を多く含む。七条大路路



- | | |
|---|--|
| 1 盛土・攪乱 | 12 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 堅く締まる (1～5cmの薄い層が重なる) 中砂～極粗砂・φ1～3cmの礫を多量・φ5cmの礫を微量含む (七条大路路面 室町時代) |
| 2 10YR2/3 黒褐色泥土 φ5～10cmの礫を少量含む 炭・焼土を多量含む (江戸時代末期か) | 13 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 非常に堅く締まる (1～3cmの薄い層が重なる) 粗砂～極粗砂・φ1～3cmの礫を多量含む (七条大路路面 鎌倉時代～室町時代) |
| 3 10YR3/1 黒褐色砂泥 焼土塊を多量含む (江戸時代末期か) | 14 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 堅く締まる (1～3cmの薄い層が重なる) 中砂～極粗砂・φ1～5cmの礫を中量含む (七条大路路面 平安時代後期～鎌倉時代) |
| 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 15 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 堅く締まる (1～3cmの薄い層が重なる) 粗砂～極粗砂・φ1～3cmの礫を中量含む (七条大路路面 平安時代中期～後期) |
| 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭を少量含む | 16 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 非常に堅く締まる 中砂～極粗砂・φ1～5cmの礫を少量含む (七条大路路面 平安時代前期) |
| 6 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭を少量含む (江戸時代後期か) | 17 10YR4/4 褐色砂礫 (粗砂～極粗砂・φ1～5cmの礫) やや締まる (地山) |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 粘質・やや締まる (土間 江戸時代中期) | |
| 8 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや締まる (土間 江戸時代中期) | |
| 9 10YR2/3 黒褐色砂泥 堅く締まる (土間 江戸時代中期) | |
| 10 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭を微量含む | |
| 11 10YR4/4 褐色泥砂 堅く締まる (1～3cmの薄い層が重なる) 中砂～粗砂・φ1～3cmの礫を多量含む (七条大路路面 室町時代～江戸時代前期か) | |

図6 北西部北壁断面図 (1:50)



- | | |
|---|--|
| <p>1 試掘</p> <p>2 盛土・攪乱</p> <p>3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ 1～3cmの礫を微量含む炭・焼土を少量含む 土器片を微量含む (江戸時代中期)</p> <p>4 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭を少量含む 瓦片を微量含む (江戸時代中期)</p> <p>5 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭を微量含む (土坑)</p> <p>6 10YR2/3 黒褐色泥砂 やや締まる (土間か 江戸時代中期)</p> <p>7 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭・焼土を少量含む (江戸時代中期)</p> <p>8 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 φ 1～3cmの礫を少量含む 炭を少量含む (江戸時代中期)</p> <p>9 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭を微量含む (江戸時代中期)</p> <p>10 10YR2/3 黒褐色砂泥 φ 1～5cmの礫を中量含む 炭・焼土を少量含む (江戸時代中期)</p> <p>11 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 粘質 φ 3～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む (土坑47 江戸時代中期か)</p> <p>12 10YR3/4 暗褐色砂泥 φ 1～10cmの礫を微量含む (土坑17 江戸時代中期)</p> <p>13 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 φ 1～3cmの礫を微量含む (江戸時代中期)</p> <p>14 10YR3/3 暗褐色砂泥 (土坑)</p> <p>15 10YR2/3 黒褐色砂泥 粘質 φ 1～5cmの礫を少量含む 炭を中量含む (第1層)</p> <p>16 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 φ 1～5cmの礫を少量含む 土器片を微量含む (第1層)</p> <p>17 10YR2/3 黒褐色砂泥 (第1層)</p> <p>18 10YR2/3 黒褐色砂泥 φ 1～10cmの礫を少量含む 炭を少量・焼土塊を微量含む (土坑114 鎌倉時代)</p> <p>19 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ 1～8cmの礫を多量含む 土器片を少量含む (土坑115 鎌倉時代)</p> <p>20 7.5Y2/2 黒褐色砂泥 φ 1～5cmの礫を微量含む 炭を少量含む (土坑295 鎌倉時代)</p> <p>21 10YR3/1 黒褐色砂泥 砂質 φ 1～8cmの礫を中量含む 土器片を少量含む (土坑295 鎌倉時代)</p> | <p>22 10YR2/2 黒褐色泥砂 φ 1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む (第2層)</p> <p>23 10YR2/2 黒褐色砂泥 φ 1～5cmの礫を少量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む (第2層)</p> <p>24 10YR3/1 黒褐色砂泥 粘質 (土坑290 鎌倉時代)</p> <p>25 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ 3～8cmの礫を多量含む (土坑290 鎌倉時代)</p> <p>26 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 砂質 φ 1～3cmの礫を少量含む 炭・焼土を微量含む (第2層)</p> <p>27 10YR2/3 黒褐色砂泥 粘質 φ 10～20cmの大礫を少量含む (土坑301 鎌倉時代)</p> <p>28 10YR3/3 暗褐色砂泥 中砂～粗砂・φ 1～3cmの礫を中量含む (土坑301掘形 鎌倉時代)</p> <p>29 7.5YR3/1 黒色砂泥に10YR6/3にぶい黄褐色粘質土のφ 1～5cmのブロックが少量混じる 炭・焼土を中量含む (土坑300 鎌倉時代)</p> <p>30 10YR2/3 黒褐色砂泥に2.5Y5/6黄褐色粘質土のφ 5～10cmのブロックが少量混じる φ 1～10cmの礫を少量含む 炭を少量含む 土器片を少量含む (土坑422)</p> <p>31 2.5Y3/1 黒褐色砂泥 粘質 極粗砂を少量・φ 20cmの大礫を少量含む (井戸420 鎌倉時代)</p> <p>32 2.5Y4.1 黄灰色泥砂 中砂～粗砂・φ 1～5cmの礫を中量含む (井戸420堀形 鎌倉時代)</p> <p>33 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 やや締まる 細砂～粗砂・φ 1～5cmの礫を中量含む (第3層)</p> <p>34 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 砂質 極細砂～中砂を多量・φ 1～3cmの礫を微量含む (第3層)</p> <p>35 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 砂質・やや締まる φ 1～5cmの礫を少量含む 土器片を微量含む (第3層)</p> <p>36 10YR2/2 黒褐色砂泥 粘質 中砂～粗砂を中量・φ 1～5cmの礫を微量含む (土坑417 平安時代後期)</p> <p>37 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 (細砂～極粗砂・φ 1～10cmの礫) (地山か)</p> <p>38 10YR4.4 褐色砂礫 (中砂～極粗砂・φ 1～10cmの礫) (地山)</p> |
|---|--|

図7 西壁断面図 (1:50)

面に比べて南側の平安時代後期の遺構面は約 40 cm低くなる。

平安時代後期の整地層の下層は、北西部北端の平安時代前期から中期の七条大路路面以外は基盤の砂礫層となる。砂礫層上面はほぼ平坦である。

(2) 遺構の概要

調査では江戸時代前期の整地層上面を第1面、江戸時代前期の整地層下面を第2面、平安時代後期の整地層上面を第3面、基盤の砂礫層上面を第4面として調査を行った。また、江戸時代前

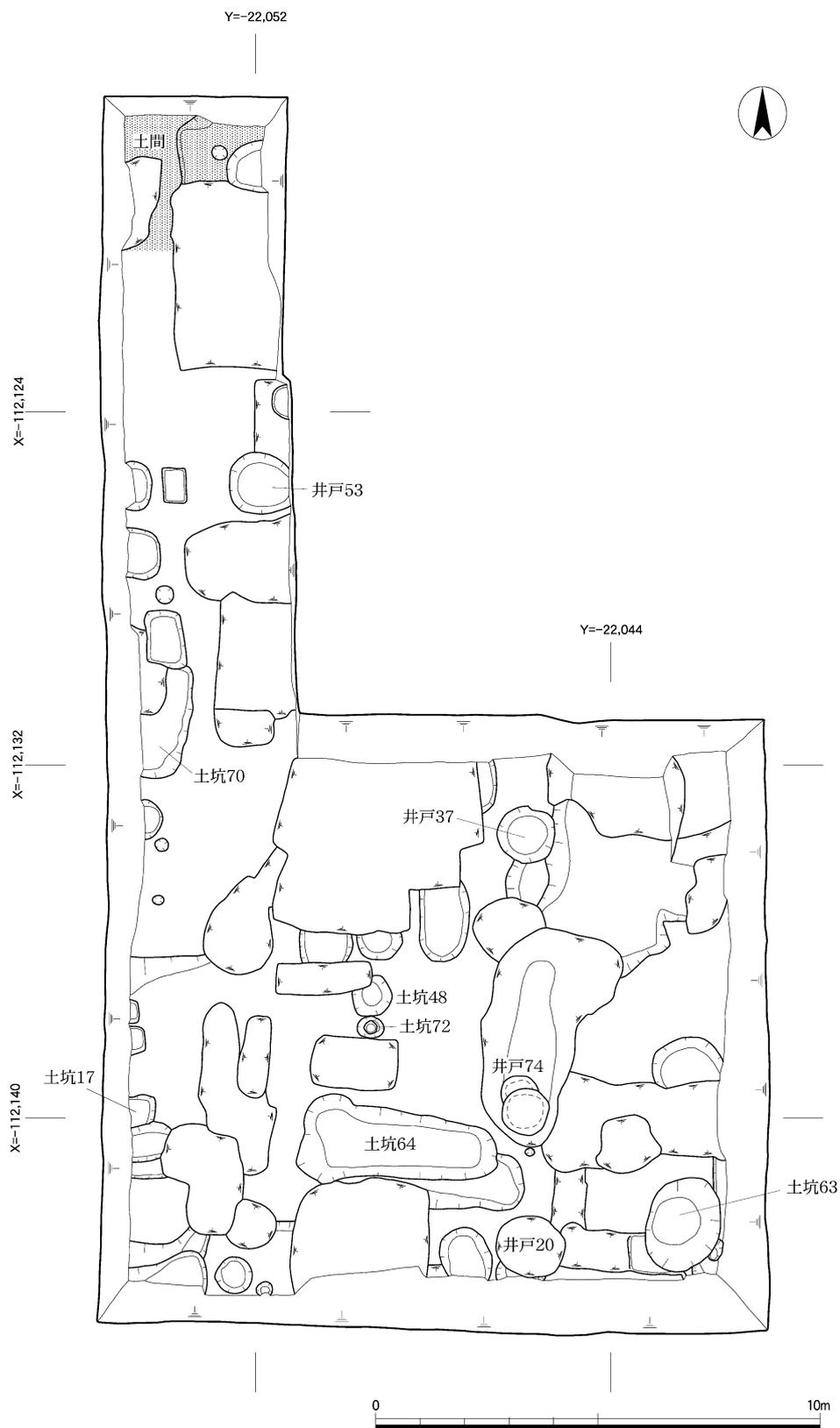


图9 第1面平面图 (1 : 150)

期の整地層を第1層、鎌倉時代から室町時代の整地層・包含層を第2層、平安時代後期の整地層を第3層として遺物を採集した。

第1面では江戸時代の遺構、第2面では主に鎌倉時代から室町時代前期の遺構、第3面では主に平安時代後期から鎌倉時代の遺構、第4面では主に平安時代前期から後期の遺構を検出した。なお、第3面の北西部については大規模な土坑200の検出面を第3-1面、掘削後の下面を第3-2面に分けている。平安京遷都前にさかのぼる時期の遺構は検出していない。

検出した遺構総数は443基である。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を検出面ごとに報告し、調査地の歴史的な変遷についてはまとめて後述する。なお、検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都I期～期の編年試案を準用する³⁾。

(3) 第1面の遺構 (図版2、図9)

土間 (図版2-2、図6) 北西部七条通寄りで検出した。七条大路路面の上に薄く土を積み上げている。3層が確認でき、それぞれの厚さは3～5cmで、上面はやや締まる。遺物はほとんど出土しなかったが、層位から江戸時代中期に属することがわかる。

井戸20 南部中央で検出した。掘形は南北約1.4m、東西約1.5mのほぼ円形で、深さは検出面から1.5m以上である。井戸枠は残存しない。埋土は黒褐色砂泥で、期以降の遺物が出土した。

井戸37 中央部で検出した。掘形は直径約1.3mの円形で、深さは検出面から1.1m以上である。井戸枠は残存しない。埋土は暗褐色砂泥で、期の遺物が出土した。

井戸53 北西部で検出した。掘形は直径約1.4mの円形で、深さは検出面から1.1m以上である。井戸枠は残存しない。埋土は黒褐色砂泥で、期の遺物が出土した。

井戸74 南部中央の攪乱底面で検出した。2基が重複しており、南側の方が新しく、北側の方は攪乱され詳細は不明である。掘形は直径約1.0mの円形で、深さは検出面から0.3m以上である。井戸枠は塼組である。埋土は黒褐色砂泥で、期以降の遺物が出土した。

土坑17 南西部西壁際で検出した。南側は攪乱され、西側は調査区外となるが、平面形は南北0.7m以上、東西0.6m以上の方形で、深さは約0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、期の遺物が出土した。

土坑48 中央部で検出した。北西側が攪乱されるが、平面形は直径約0.9mの円形で、深さは約0.1mである。埋土は灰黄褐色砂泥などで、期の土器類とともに貝殻・魚骨がまとまって出土した。

土坑63 南東部で検出した。平面形は南北約2.1m、東西約1.6mの楕円形で、深さは約1.1mである。井戸枠は残存していないが、井戸である可能性がある。埋土は黄灰色砂泥で、期の遺物が出土した。

土坑64 南部中央で検出した大型の土坑である。南側は攪乱されるが、平面形は南北約2.0m、東西約4.8mの隅丸長方形で、深さは約0.7mである。埋土は黒褐色砂泥で、XI期中段階～新段階の遺物がまとまって出土した。

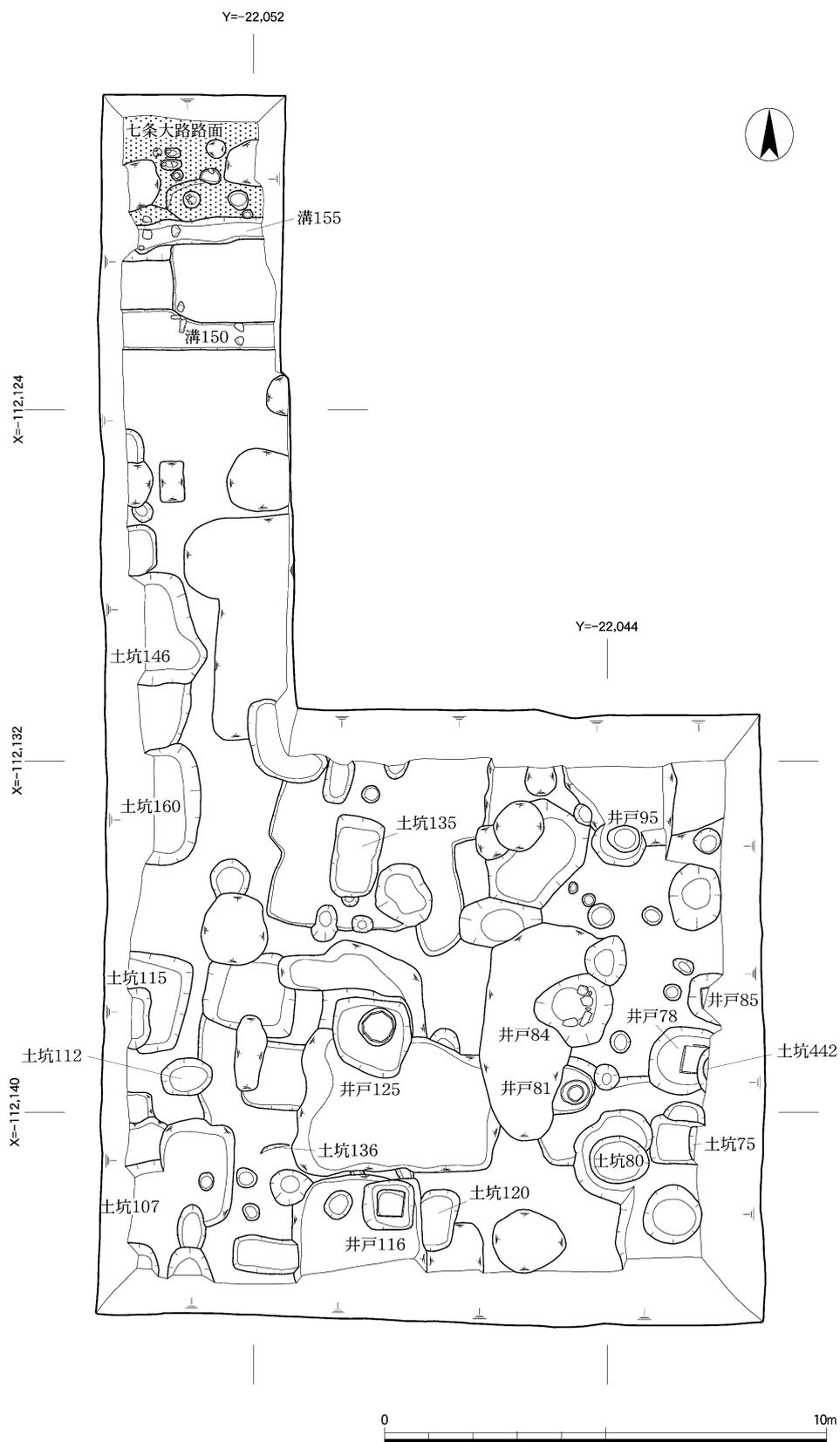


图 10 第 2 面平面图 (1 : 150)

土坑 70 中央西部西壁際で検出した。西側は調査区外となり、一部は攪乱されるが、平面形は南北約 2.8 m、東西 1.2 m 以上の隅丸長方形で、深さは約 0.4 m である。埋土は暗褐色砂泥で、XI 期中段階～新段階の遺物が出土した。

土坑 72 (図版 2-3) 中央部で検出した甕を据える土坑である。掘形は南北約 0.5 m、東西約 0.6 m のほぼ円形で、深さは約 0.1 m である。中央部に信楽産の甕を据えるが、底部のみしか残存していないことから大部分は削平されたと考えられる。掘形の埋土はにぶい黄褐色砂泥・黒褐色砂泥で、甕は 期に属する。

(4) 第 2 面の遺構 (図版 3～5、図 10～14)

七条大路路面 (図版 3-2、図 6) 調査区北西部北端で検出した東西方向の路面である。南側は溝 155 に区画され、北側は調査区外となる。路面中央となる北側がやや高くなる。約 10 cm の厚さがあり、中砂から粗砂・礫を含む褐色砂泥を 1～3 cm の厚さで重ねて積み上げる。上面は堅く締まる。遺物はほとんど出土しなかったが、層位から室町時代中期以降江戸時代前期まで存続することがわかる。路面上南側に分布する小規模な柱穴・土坑については後述する。

溝 155 (図版 3-2、図 11) 調査区北西部で検出した東西方向の溝である。七条大路路面に南接し、七条大路南築地芯推定位置より北側に位置するので七条大路南側溝と判断できる。東側は攪乱により上部が削平される。断面形は浅い U 字形で、幅は約 1.1 m、深さは約 0.4 m である。底部はほぼ平坦で、大きさ約 15 cm の石があるが、据え付けたものかは不明である。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、VI 期～VII 期の遺物が出土した。

溝 150 (図版 3-2、図 11) 調査区北西部で検出した東西方向の溝である。溝 155 と平行し、層位から溝 155 より古いことがわかる。七条大路南築地芯推定位置より南側に位置するので、築地内溝の可能性もあるが、溝 155 との間には築地の痕跡はないので、溝 155 と同じく七条大路南側溝の可能性もある。東側は攪乱により上部が削平され、西側の輪郭も不明瞭である。断面形は浅い U 字形で、幅は約 0.6 m、深さは約 0.2 m である。底部はほぼ平坦である。埋土は黒褐色砂泥で、

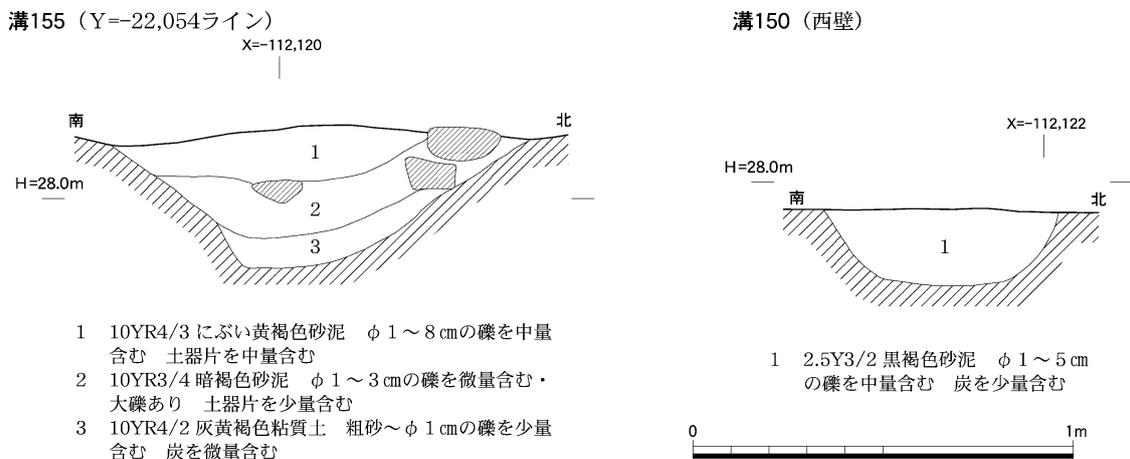
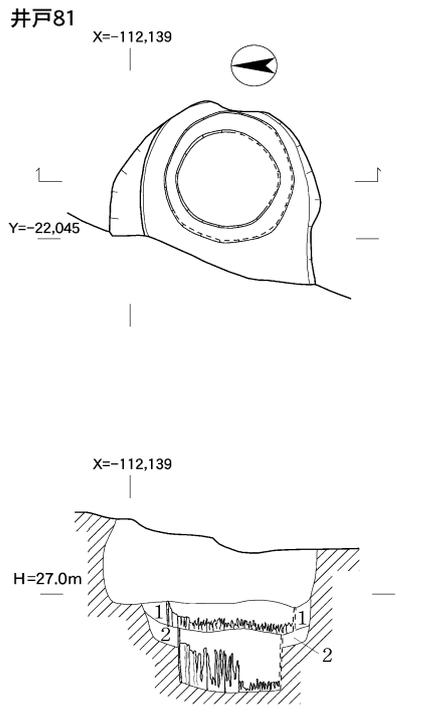
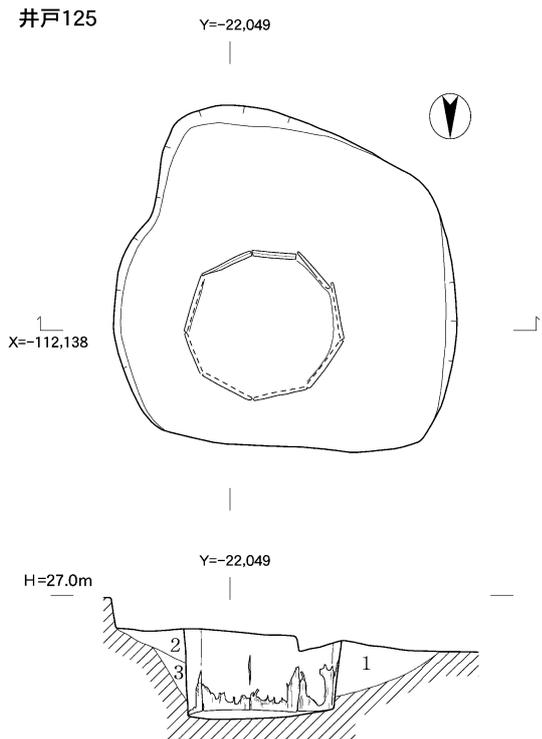


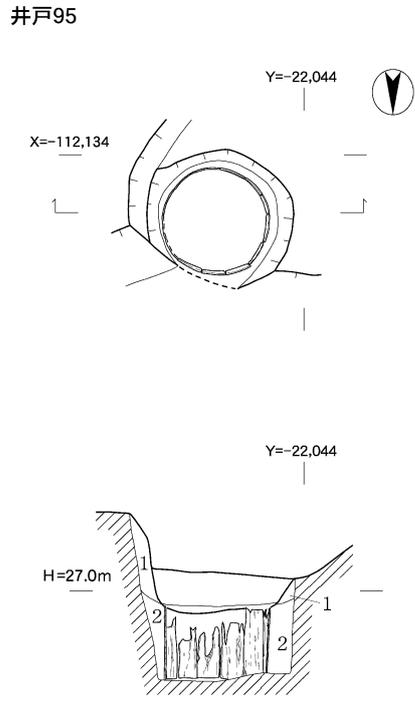
図 11 溝 155・溝 150 断面図 (1:20)



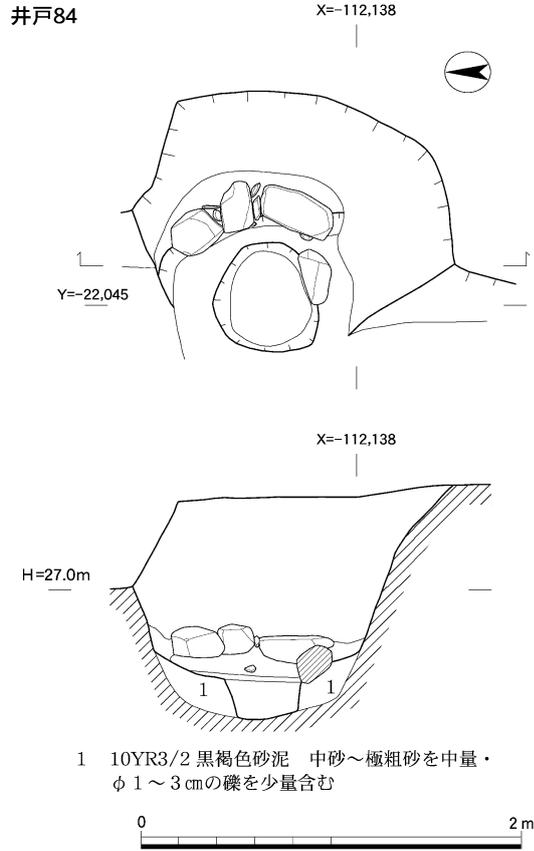
- 1 10YR2/1 黒色砂泥 φ 1 ~ 5 cmの礫を少量含む
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 中砂~極粗砂を多量含む



- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂礫 (粗砂~極粗砂・φ 1 ~ 3 cmの礫)
- 2 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 細砂~極粗砂・φ 1 ~ 3 cmの礫を中量含む
- 3 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 粗砂~極粗砂を中量・φ 1 ~ 3 cmの礫を中量含む



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ 1 ~ 3 cmの礫を中量含む
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫 (粗砂~極粗砂・φ 1 ~ 5 cmの礫) やや締まる



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 中砂~極粗砂を中量・φ 1 ~ 3 cmの礫を少量含む

図 12 井戸 81・井戸 84・井戸 95・井戸 125 実測図 (1 : 40)

VI期～VII期の遺物が出土した。

井戸 78 (図版 5 - 3、図 13) 南東部東壁際で検出した方形縦板横棧組の井戸である。東側は調査区外となるが、掘形は直径約 1.5 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 1.1 m で、底部の標高は 26.4 m である。井戸枠は内法一辺約 0.7 m で、残存高は下端から約 0.2 m である。縦板は西面で 4 ～ 5 枚、横棧木は北辺で一部が残存していたが、細部の構造は不明である。縦板・横棧木とも樹種は不明である。埋土は黒褐色砂泥などで、VI期新段階の遺物がまとまって出土した。

井戸 81 (図版 5 - 1、図 12) 南東部で検出した桶を据える井戸である。西側は攪乱されるが、掘形は直径約 1.1 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 0.9 m で、底部の標高は約 26.5 m である。井戸枠は桶を 2 段に据えている。上段の直径は約 0.7 m で、残存高は約 0.1 m、下段の直径は約 0.5 m で、残存高は約 0.3 m である。桶は上段・下段とも幅約 10 cm の板材を円形に組み合わせているが、箍の痕跡などの細部の構造は不明である。樹種は針葉樹である。埋土は黒色砂泥で、VII期の遺物が出土した。

井戸 84 (図版 4 - 3、図 12) 中央東部で検出した石組の井戸である。北西側は攪乱されるが、掘形は直径約 1.7 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 1.2 m で、底部の標高は約 26.3 m である。上部の構造は不明であるが、最下段に大きさ約 20 ～ 40 cm の石材を主に長辺を内側に向けて円形に組む。石材は砂岩・チャートである。底部中央には水溜がある。直径は約 0.6 m で、深さは約 0.2 m である。曲物などを据えたかは不明である。埋土は黒色砂泥で、VI期の遺物がまとまって出土した。

井戸 85 中央東部東壁際で検出した方形縦板横棧組の井戸である。大部分は東側調査区外となるが、掘形は直径約 1.2 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 0.8 m で、底部の標高は約 26.7 m である。井戸枠は西辺で約 0.5 m で、横棧木のみが残存する。樹種は不明である。埋土は黒褐色砂泥で、VI期の遺物がまとまって出土した。

井戸 95 (図版 5 - 2、図 12) 中央東部で検出した桶を据える井戸である。北側は攪乱されるが、掘形は直径約 0.9 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 0.9 m で、底部の標高は約 26.5 m である。井戸枠の直径は約 0.6 m で、残存高は約 0.4 m である。桶は幅約 15 cm の板材を円形に組み合わせているが、箍の痕跡などの細部の構造は不明である。樹種は針葉樹である。埋土は暗褐色泥砂で、VII期古段階～中段階の遺物が出土した。

井戸 116 (図版 5 - 4) 南部中央の攪乱底面で検出した方形縦板横棧組の井戸である。上部は削平されるが、掘形は一辺約 1.1 ～ 1.2 m の隅丸方形である。深さは検出面から約 0.8 m で、底部の標高は約 26.4 m である。井戸枠は内法一辺約 0.7 m で、残存高は下端から約 0.4 m である。縦板は東面で 3 ～ 4 枚、横棧木は一部が残存していたが、細部の構造は不明である。縦板・横棧木とも樹種は不明である。埋土は黒褐色砂泥で、V期の遺物が出土した。

井戸 125 (図版 4 - 4、図 12) 中央部で検出した 9 角形縦板組の井戸である。上部は削平されるが、掘形は南北約 1.8 m、東西約 1.8 m のほぼ方形である。深さは検出面から約 0.5 m で、底部の標高は約 26.4 m である。井戸枠は対面の内法約 0.8 m で、残存高は下端から約 0.2 m である。

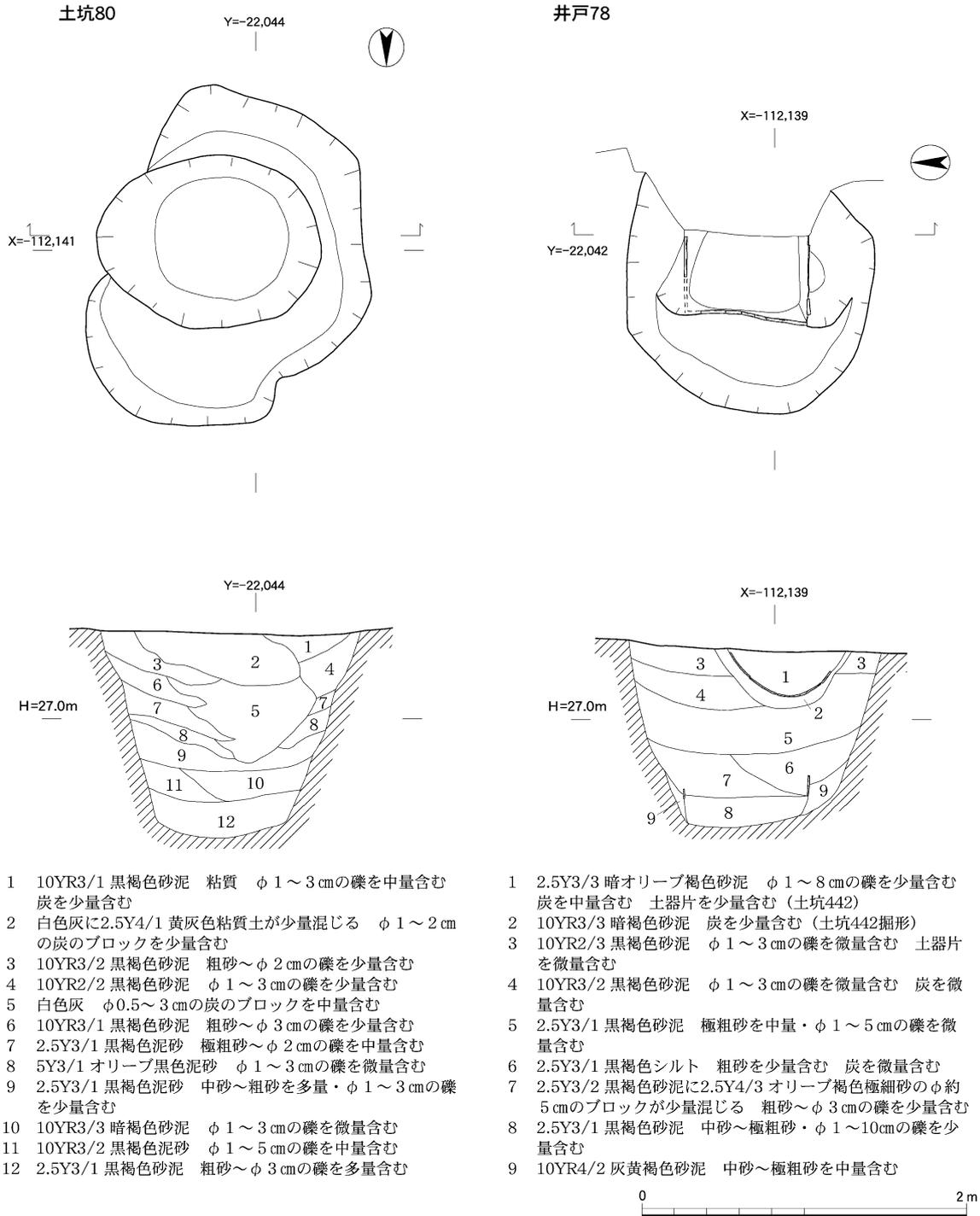


図 13 井戸 78・土坑 80 実測図 (1 : 40)

縦板は幅約 25 cmの板材を端部をわずかに重ね合わせるようにして組み合わせる。樹種はサワラである。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅶ期中段階～新段階の遺物がまとまって出土した。

土坑 75 南東部東壁際で検出した。大部分は東調査区外となるため形状は不明である。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅵ期～Ⅶ期の遺物が出土した。

土坑 80 (図版 4-1、図 13) 南東部で検出した。平面形は南北約 2.1 m、東西約 1.7 mの不整形な楕円形で、深さは約 1.3 mである。埋土には炭の小片を含む大量の石灰を含む。Ⅵ期新段

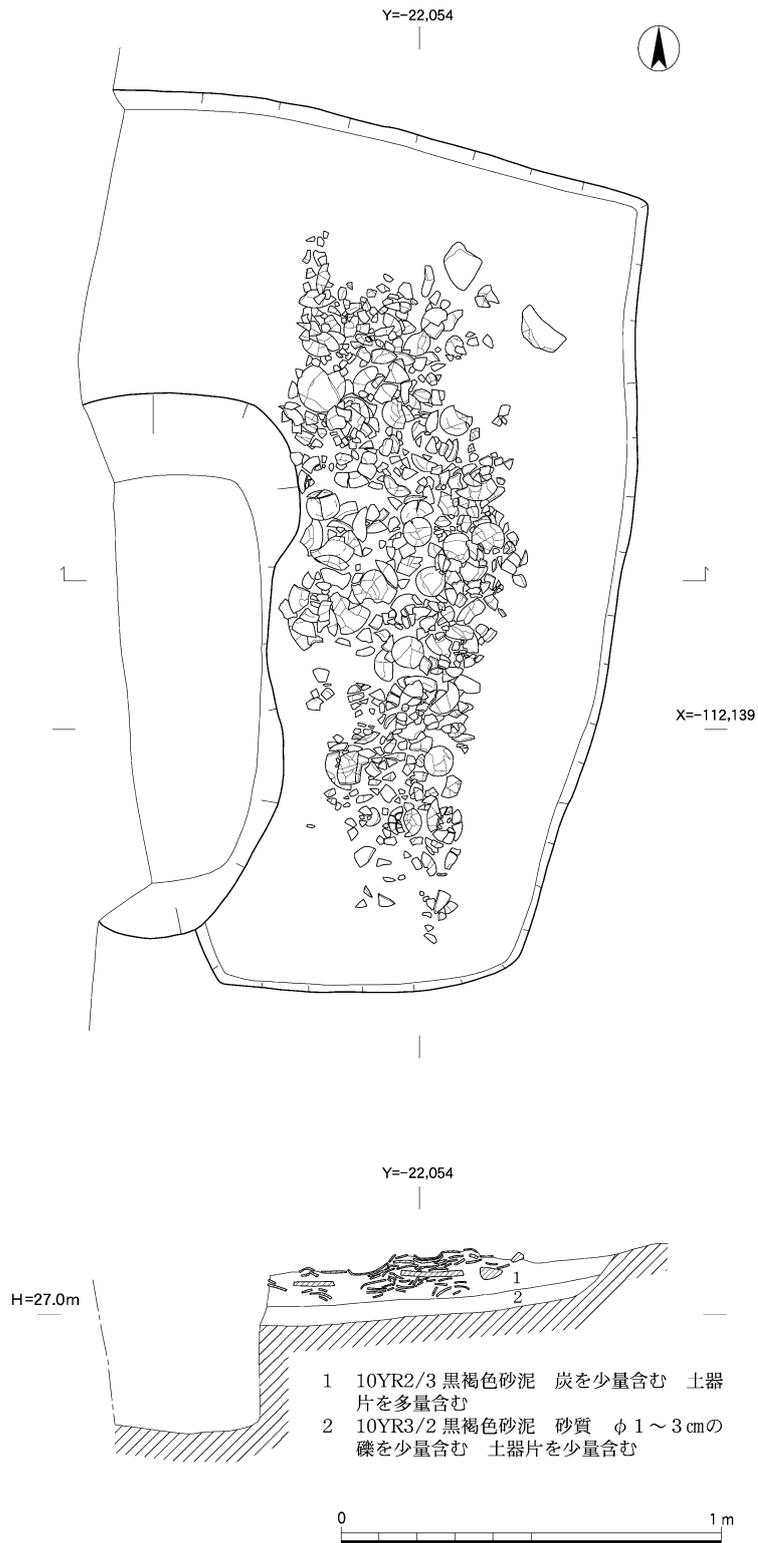


図14 土坑115実測図(1:20)

階～Ⅶ期古段階の遺物がまとまって出土した。

土坑107 南西部で検出した。東側は攪乱され、西側は調査区外となる。南北約1.2m、東西0.9m以上で、平面形は不明である。深さは約0.1mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、Ⅵ期～Ⅶ期の遺物が出土した。

土坑 112 南西部で検出した。平面形は南北約 0.9 m、東西約 1.1 m の楕円形で、深さは約 0.2 m である。埋土は黒褐色泥砂で、VI 期の遺物が出土した。

土坑 115 (図版 4-2、図 14) 南西部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 2.2 m、東西 1.5 m 以上の隅丸方形で、深さは約 0.2 m である。埋土は黒褐色砂泥で、上層から土師器皿を中心とする VI 期新段階～VII 期古段階の遺物が多量に出土した。

土坑 120 南部中央で検出した。西側は攪乱されるが、平面形は南北約 1.4 m、東西約 0.8 m の隅丸方形で、深さは約 0.3 m である。埋土は灰黄褐色砂泥で、V 期の遺物が出土した。

土坑 135 中央部で検出した。平面形は南北約 1.9 m、東西約 1.1 m の隅丸方形で、深さは約 0.3 m である。埋土は暗褐色砂泥で、XI 期の遺物が出土した。本来は第 1 面に属する遺構である。

土坑 136 南西部で検出した。大部分が削平・攪乱されるため形状は不明である。VI 期～VII 期の遺物が出土した。

土坑 146 北西部南寄り西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 2.6 m、東西 1.3 m 以上の隅丸方形で、深さは約 0.8 m である。埋土は暗褐色砂泥で、VII 期の遺物が出土した。

土坑 160 中央西部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 2.8 m、東西 1.3 m 以上の隅丸方形で、深さは約 0.7 m である。埋土は黒褐色砂泥で、VII 期新段階の遺物がまとまって出土した。

土坑 442 (図 13・26) 中央東部東壁際で検出した。井戸 78 の直上に位置する。東側は調査区外となるが、掘形は直径約 0.9 m の円形で、深さは約 0.4 m である。中央部に備前産の大型甕を据える。体部下半が残存するのみであったが、破片を接合した結果、口縁部まで復元することができたので、完形品を正立した状態で据えていたと推定できる。甕内部の埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、内容物は不明である。VII 期古段階～中段階の遺物が出土した。

柱穴群 北西部七条大路路面上および中央東部を中心に分布する。七条大路路面上の柱穴は直径約 0.2～0.4 m、深さ約 0.2～0.3 m で、一部は平坦な石を据える。南北・東西方向に並ぶものがある。

中央東部の柱穴は直径約 0.2～0.5 m、深さ約 0.1～0.2 m である。まとまりを認めることはできない。

(5) 第 3 面の遺構 (図版 6・7、図 15～17)

七条大路路面 (図版 6-3、図 6) 南側は土坑 200 に攪乱されており、鎌倉時代前半以前の南側溝は遺存しない。第 2 面と同じく路面中央となる北側がやや高くなる。約 60 cm の厚さがあり、概ね 3 層に分けることができる。中砂から極粗砂・礫を含む黄灰色泥砂・にぶい黄褐色泥砂・暗灰色泥砂を 1～5 cm の厚さで重ねて積み上げる。各面の上面は堅く締まる。第 3-1 面では路面上に小規模な柱穴・土坑が分布する。第 3-2 面では南側に向けて低くなる小さな段がある。

井戸 192 (図版 7-4、図 16) 南東部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。西側は攪乱されるが、掘形は直径約 1.7 m の円形に復元できる。深さは検出面から約 0.9 m で、底部の標高は

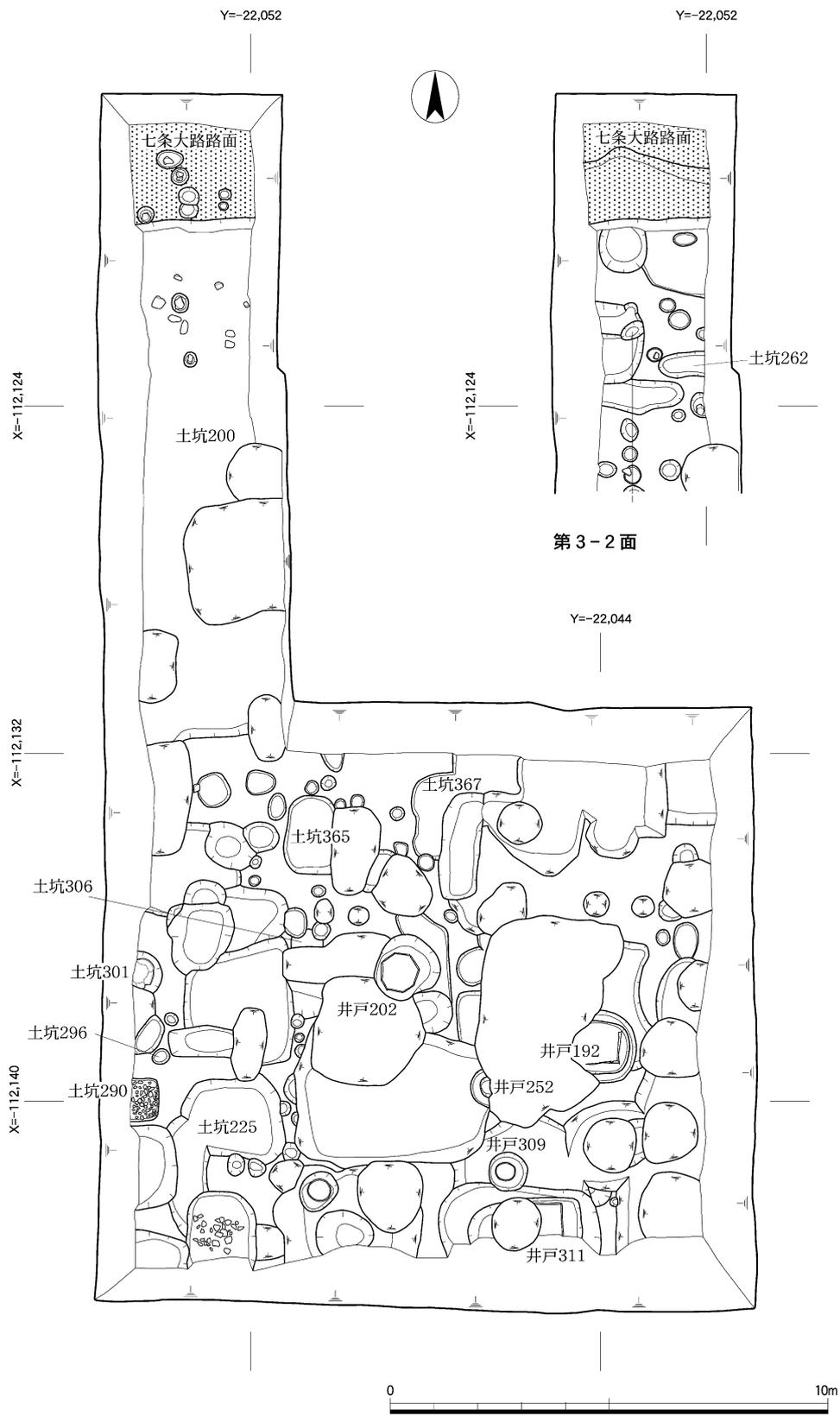


图15 第3面平面图 (1:150)

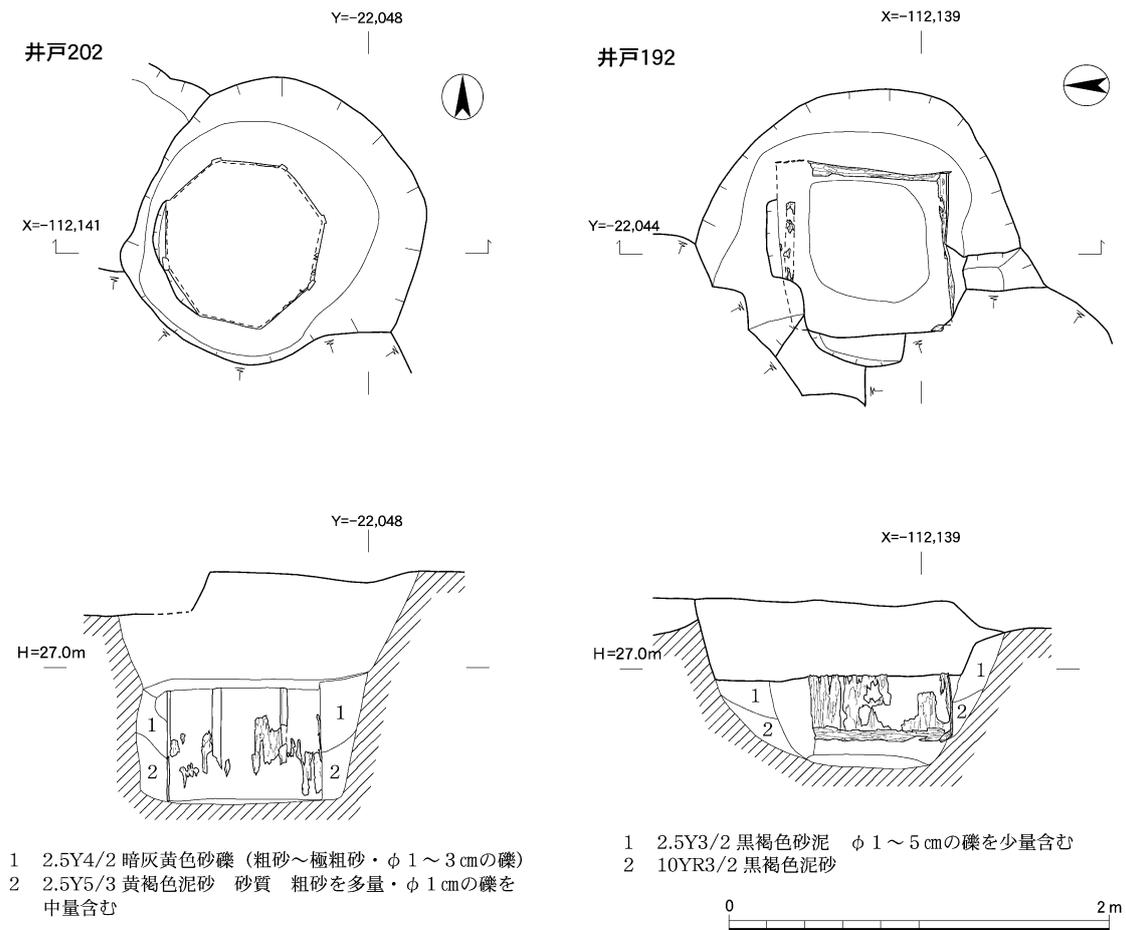


図16 井戸192・井戸202実測図(1:40)

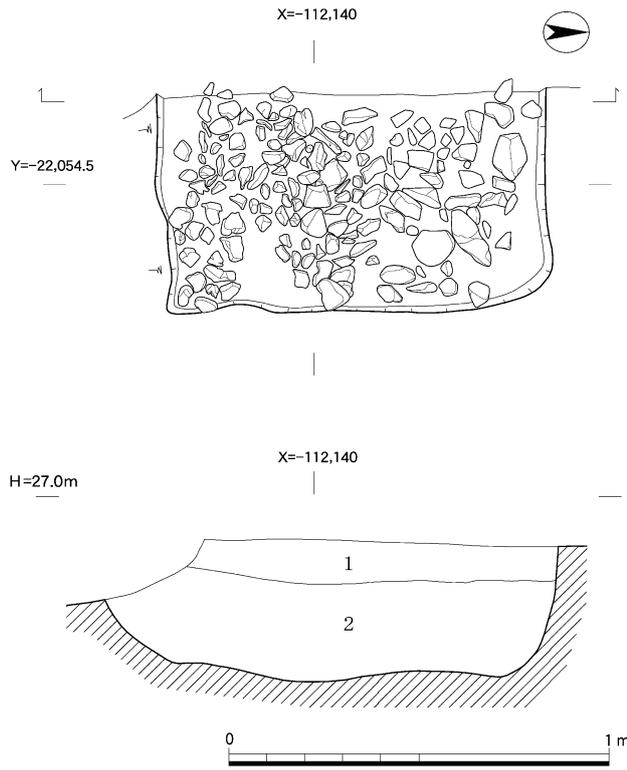
26.5 mである。井戸枠は内法一辺約 0.8 mで、残存高は下端から約 0.3 mである。縦板は東面で 4～5 枚、横柵木は北辺・東辺・南辺で一部が残存していたが、細部の構造は不明である。縦板の樹種は針葉樹である。埋土は黒褐色砂泥で、V期の遺物が出土した。

井戸 202 (図版 7-3、図 16) 中央部で検出した 8 角形縦板組の井戸である。南西側は攪乱されるが、掘形は約 1.6 mの円形に復元できる。深さは検出面から約 1.2 mで、底部の標高は約 26.3 mである。井戸枠は対面の内法約 0.8 mで、残存高は下端から約 0.5 mである。縦板は幅約 30 cmの板材を接するように立て並べて組み合わせる。接する部分の外側には幅約 5 cm・厚さ約 2 cmの細長い板を当てた痕跡がある。縦板の樹種はスギである。埋土は黒褐色砂泥で、VII期の遺物が出土した。

井戸 252 (図 21) 南部中央で検出した水溜のみがのこる井戸である。東側は攪乱され、上部は削平されるが、掘形は直径約 0.9 mの円形に復元できる。深さは検出面から約 0.3 mで、底部の標高は約 26.6 mである。底部中央には水溜がある。直径は約 0.4 mに復元でき、深さは約 0.3 mである。壁面が垂直に立ち上がっていることから曲物を据えていたと推定できる。埋土は黒褐色砂泥で、ほぼ完形の土師器大型皿 1 点を含むV期の遺物が出土した。

井戸 309 南部中央で検出した水溜のみがのこる井戸である。上部は削平されるが、掘形は直

径約 0.9 m の円形で、深さは検出面から約 0.4 m で、底部の標高は約 26.6 m である。底部中央には曲物を据えた水溜がある。直径は約 0.4 m で、残存高は約 0.2 m である。曲物の樹種は針葉樹である。埋土は黒褐色砂泥で、IV 期～V 期の遺物が出土した。



- 1 10YR3/1 黒褐色砂泥 粘質
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ 3～8 cm の礫を多量含む

図 17 土坑 290 実測図 (1 : 20)

井戸 311 南東部南壁際で検出した方形縦板横棧組の井戸である。南側は調査区外となり、西側は攪乱されるが、掘形は南北 0.8 m 以上、東西 1.1 m 以上の方形に復元できる。深さは検出面から約 0.3 m で、底部の標高は 26.3 m である。井戸枠は内法一辺 0.6 m 以上で、北辺・東辺の横棧木のみが残存する。樹種は針葉樹である。埋土は黒褐色砂泥で、VI 期～VII 期の遺物が出土した。

土坑 200 (図版 6 - 2) 北西部中央で検出した。東側・西側は調査区外となるが、南北約 12.0 m、東西 2.7 m 以上の大規模な土坑である。深さは約 0.7 m である。精査した結果、複数の土坑状の堆積が重複していることが判明した。埋土は黒褐色砂泥・暗褐色泥砂・にぶい黄褐色泥砂などで一部には炭・焼土・灰などを含む。V 期～VI 期の遺物が出土した。

土坑 225 南西部で検出した。南西側は別の土坑と接するが、平面形は南北約 1.8 m、東西約 2.3 m の隅丸方形で、深さは約 0.5 m である。埋土は黒褐色砂泥で、VI 期の遺物が出土した。

土坑 262 (図版 7 - 1) 北西部第 3 - 2 面で検出した。東側は調査区外となるが、平面形は南北約 0.6 m、東西 1.1 m 以上の溝状で、深さは約 0.2 m である。埋土は黒褐色砂泥で、土師器皿を中心とする V 期中段階～新段階の遺物がまとまって出土した。

土坑 290 (図版 7 - 2、図 17) 南西部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、平面形は南北約 1.0 m、東西 0.6 m 以上の方形で、深さは約 0.3 m である。埋土は黒褐色砂泥で、直径 3～8 cm の礫を密に含み、上部は粘質である。VII 期の遺物が出土した。

土坑 296 南西部で検出した。平面形は直径約 0.4 m の円形で、深さは約 0.1 m である。埋土は黒褐色砂泥で、V 期の遺物が出土した。

土坑 301 (図版 7 - 2、図 7・26) 中央西部西壁際で検出した。西側は調査区外となるが、掘形は直径約 1.0 m の円形で、深さは約 0.5 m である。中央部に渥美産の大型甕を据える。体部下半が残存するのみであったが、破片を接合した結果、口縁部まで復元することができたので、完

形品を正立した状態で据えていたと推定できる。甕内部の埋土は直径10～20cmの石を含む粘質の黒褐色砂泥で、内容物は不明である。Ⅵ期～Ⅶ期の遺物が出土した。

土坑306 中央部で検出した。大部分が削平・攪乱されるため形状は不明である。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅴ期～Ⅵ期の遺物が出土した。

土坑365 中央部で検出した。東側は攪乱されるが、平面形は南北約1.8m、東西1.1m以上の隅丸方形で、深さは約0.3mである。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅴ期の遺物が出土した。

土坑367 中央部で検出した。東側は攪乱されるが、平面形は南北約1.9m、東西1.0m以上の隅丸方形で、深さは約0.2mである。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅴ期古段階の遺物が出土した。

柱穴群 七条大路路面上を含む北西部・中央部を中心に分布する。北西部の柱穴は第3-1面では、直径約0.2～0.4m、深さ約0.2mで、一部は平坦な石を据える。大きさ約10～30cmの石を平坦な面を上にして据えたのみのももある。南北に並ぶ傾向が看取できる。

第3-2面では、七条大路路面状には分布しない。直径約0.3～0.5m、深さ約0.1～0.2mで、石を据えるものは少ない。西壁寄りに南北方向に並ぶ柱穴列がある。

中央部の柱穴は直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mで、一部は平坦な石を据える。まとまりを認めることはできない。

(6) 第4面の遺構 (図版8・9、図18・19)

七条大路路面 (図版8-3、図6) 第2面・第3面と同じく路面中央となる北側がやや高くなる。約30cmの厚さがあり、概ね2層に分けることができる。中砂から極粗砂・礫を含む黄灰色泥砂・黒褐色泥砂を1～5cmの厚さで重ねて積み上げる。各面の上面は堅く締まる。

七条大路路面は、平安時代前期に構築されていることが確認でき、江戸時代前期にかけて、全体では約100cmの高さに積み上げている。

井戸362 (図版9-3、図25) 北西部南端で検出した甕を据える井戸である。東側は調査区外となるが、掘形は直径約1.0mの円形に復元できる。深さは検出面から約0.6mで、底部の標高は約26.8mである。中央部に播磨産の大型甕を井戸枠として据える。底部は打ち欠かれており、口縁部の破片が出土しなかったことから、体部のみを据えたと推定できる。甕の残存高は下端から約45cmである。埋土は暗褐色砂泥で、Ⅴ期古段階の遺物が出土した。

井戸383 (図版9-4、図19・25) 中央東部で検出した甕を据える井戸である。北側は井戸95により攪乱されるが、掘形は直径約1.0mの円形に復元できる。深さは検出面から約0.6mで、底部の標高は約26.8mである。中央部に猿投産の大型甕を井戸枠として据える。底部は打ち欠かれているが、埋土から口縁部の破片が出土したので、口縁部から体部を据えたと推定できる。甕の残存高は下端から約50cmである。埋土は褐色砂泥で、Ⅲ期の遺物が出土した。

井戸400 (図19) 中央部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。南西側は攪乱されるが、掘形は直径約2.3mの円形に復元できる。深さは検出面から約0.6mで、底部の標高は26.4mである。井戸枠は内法一辺約0.6mで、残存高は下端から約0.3mである。縦板は北面の一部、横棧木は北辺・

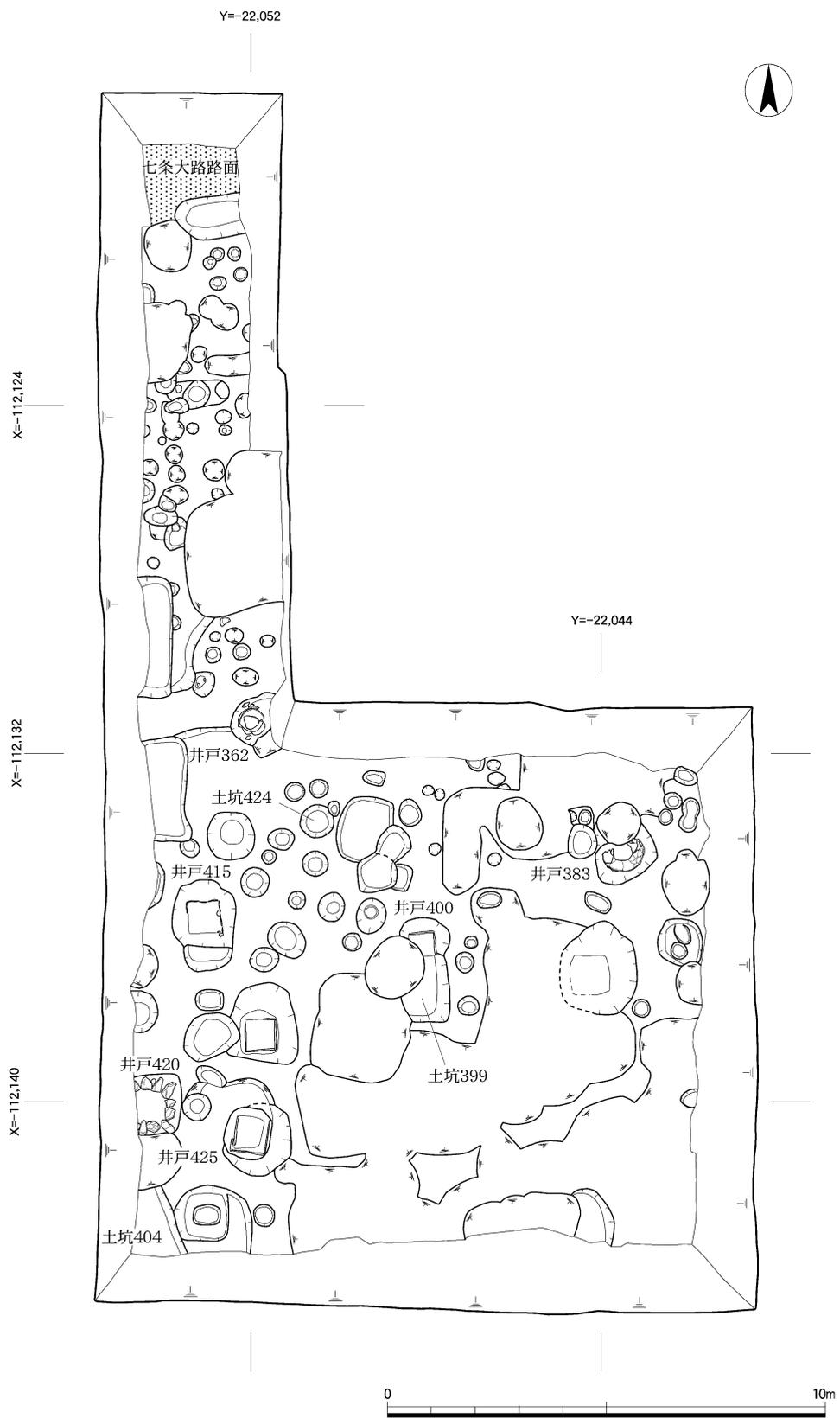
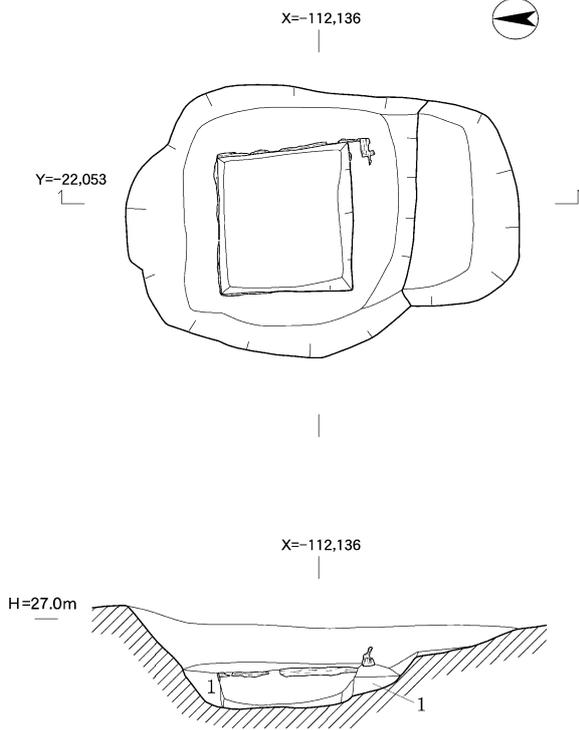


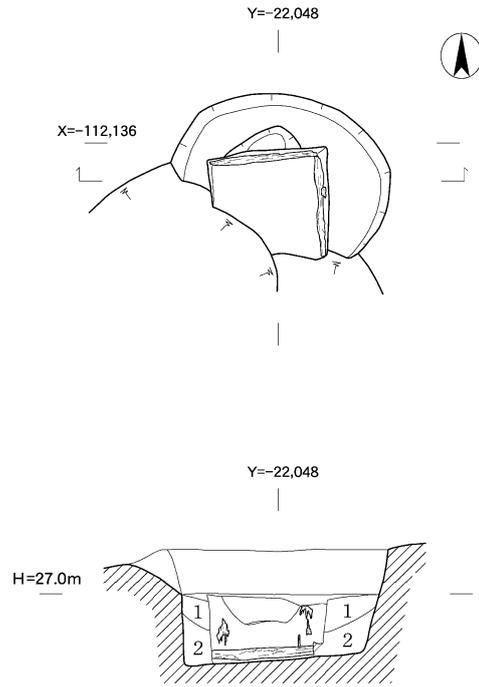
图 18 第4面平面图 (1 : 150)

井戸415



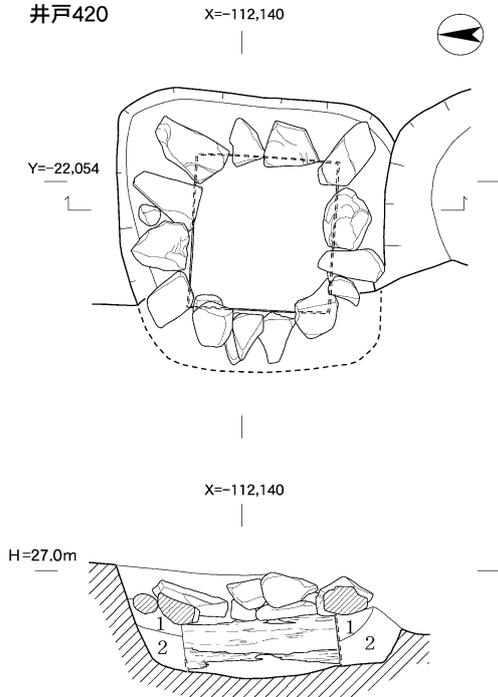
- 1 10YR3/1 黒褐色泥砂 細砂～粗砂を中量・φ 1～3 cmの礫を少量含む

井戸400



- 1 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 φ 1～3 cmの礫を少量含む
- 2 2.5Y5/3 黄褐色砂礫 (中砂～粗砂・φ 1～3 cmの礫)

井戸420



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ 1～15cmの礫を中量含む
- 2 2.5Y4/1 黄灰色泥砂 中砂～粗砂・φ 1～5 cmの礫を中量含む

井戸383

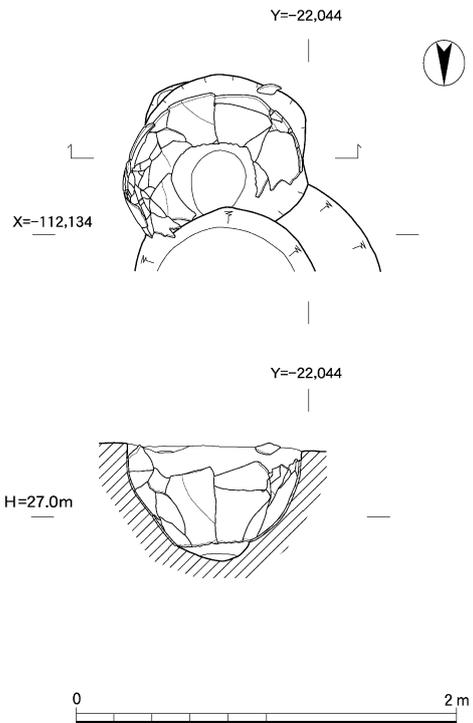


図 19 井戸 383・井戸 400・井戸 415・井戸 420 実測図 (1 : 40)

東辺が残存するが、細部の構造は不明である。縦板の樹種はヒノキである。埋土は黒褐色砂泥で、V期古段階の遺物が出土した。

井戸 415 (図版 9-1、図 19) 中央西部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。掘形は南北約 1.5 m、東西約 1.4 m の方形である。深さは検出面から約 0.5 m で、底部の標高は 26.5 m である。井戸枠は内法一辺約 0.8 m で、残存高は下端から約 0.1 m である。北辺・東辺の横棧木と南東隅柱のみが残存するが、細部の構造は不明である。横棧木・隅柱とも樹種は不明である。埋土は黒褐色砂泥で、V期～VI期の遺物が出土した。

井戸 420 (図版 9-2、図 19) 南西部西壁際で検出した方形の横板の上に石を組む井戸である。第3面土坑 290 の直下に位置する。西側は調査区外となり、南側は攪乱されるが、掘形は南北約 1.5 m、東西約 1.5 m の方形に復元できる。深さは検出面から約 0.6 m で、底部の標高は約 26.5 m である。井戸枠は横板部分で内法一辺約 0.8 m で、高さは約 0.3 m である。横板は2段に重ねるが、細部の構造は不明である。樹種は不明である。石組は大きさ約 20～50 cm の石材を主に小口面を内側に向けて隅切方形に2段以上積み上げる。石材は砂岩・チャートである。埋土は粘質の黒褐色砂泥で、VI期～VII期の遺物が出土した。第3面土坑 290 の直下に位置していたため第4面での検出となったが、本来は第3面に属する遺構である。

井戸 425 南西部で検出した方形縦板横棧組の井戸である。2基が重複しており、北側の方が新しく、南側の方は攪乱され詳細は不明である。掘形は直径約 1.5 m の円形である。深さは検出面から約 0.5 m で、底部の標高は 26.4 m である。井戸枠は内法一辺約 0.6 m で、縦板の一部と横棧木のみが残存するが、細部の構造は不明である。縦板の樹種は針葉樹である。埋土は黒褐色砂泥で、V期の遺物が出土した。

土坑 399 中央部で検出した。北西側を攪乱されるが、平面形は南北 1.7 m 以上、東西 1.1 m 以上の方形で、深さは約 0.7 m である。埋土は黒褐色砂泥で、VI期の遺物が出土した。

土坑 404 南西隅で検出した。大部分が調査区外となるため、平面形は不明で、深さは約 0.3 m である。埋土は暗褐色砂泥で、IV期～V期の遺物が出土した。

土坑 424 中央部で検出した。平面形は南北約 0.8 m、東西約 0.7 m のほぼ円形で、深さは約 0.2 m である。埋土は暗褐色砂泥で、V期の遺物が出土した。

柱穴群 北西部・中央部を中心に分布する。北西部の柱穴は、直径約 0.2～0.3 m、深さ約 0.1～0.2 m である。まとまりを認めることはできない。

中央部の柱穴は、直径約 0.2～0.4 m、深さ約 0.1～0.2 m である。まとまりを認めることはできない。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

調査では整理用コンテナに 96 箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品・石製品・金属製品・木製品・動植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、その他の種類は比較的少ない。

調査では各遺構面で遺物を採集したが、遺構が相互に重複していたため新しい時期の遺構埋土・包含層に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。時代別の出土量では平安時代の遺物が約 2 割、鎌倉時代から室町時代前期の遺物が約 5 割、江戸時代前期から中期の遺物が約 3 割を占める。平安時代前期から中期の遺物はわずかで、室町時代中期から桃山時代の遺物はほとんど認めていない。

以下では、種類ごとに出土遺物の概要を報告する。なお、出土遺物の時期の判定は、平安京・京都 I 期～期の編年案を準用する。⁴⁾

(2) 土器類

土器類には土師器・白色土器・黒色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉陶器・灰釉系陶器⁵⁾・緑釉陶器・施釉陶器・磁器・輸入陶磁器などがある。

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器・須恵器			0箱	少量
平安時代前期～中期	土師器・白色土器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器、土製品		土師器 5 点、白色土器 1 点、黒色土器 1 点、須恵器 2 点、土製品 1 点	少量	0箱
平安時代後期	土師器・白色土器・瓦器・須恵器・灰釉系陶器・輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器47点、白色土器 4 点、須恵器 2 点、灰釉系陶器 1 点、輸入陶磁器 1 点、瓦 2 点、土製品 1 点	9箱	6箱
鎌倉時代～室町時代前期	土師器・白色土器・瓦器・須恵器・焼締陶器・灰釉系陶器・施釉陶器・輸入陶磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、木製品		土師器144点、瓦器11点、須恵器 9 点、焼締陶器 2 点、灰釉系陶器 2 点、輸入陶磁器 3 点、土製品24点、石製品 1 点、金属製品14点	33箱	15箱
室町時代中期～桃山時代	土師器			0箱	少量
江戸時代	土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品		瓦 7 点、土製品15点、石製品 4 点、金属製品 4 点	10箱	22箱
合計		110箱	308点 (15箱)	52箱	43箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より14箱多くなっている。

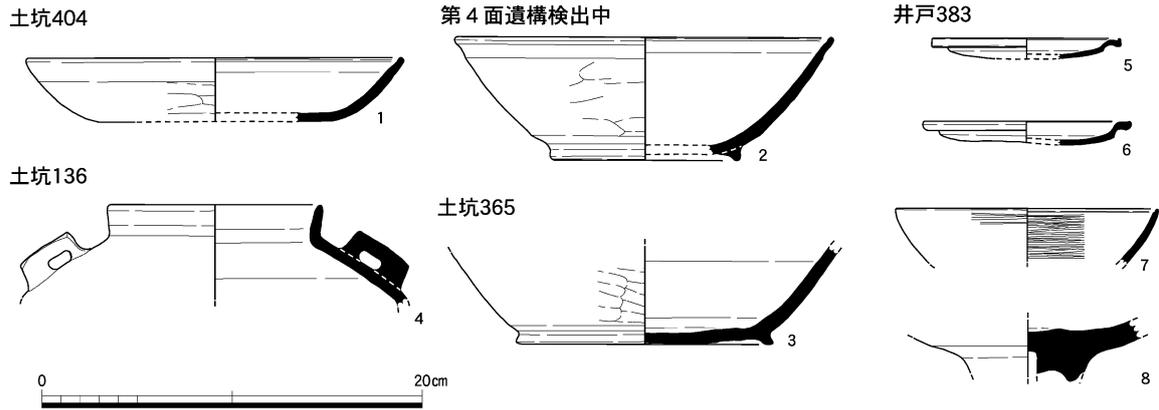


図 20 土器実測図 1 (1 : 4)

平安京遷都前の土器は古墳時代の土師器・須恵器をわずかに認めている。すべて小片で平安時代以降の遺構・包含層に混入して出土した。

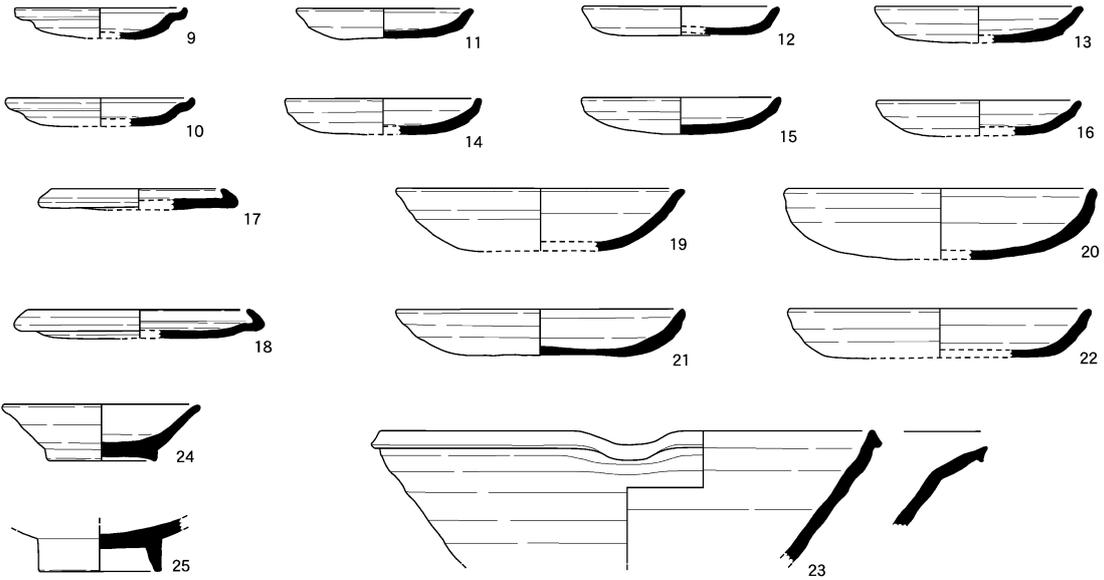
平安時代前期の土器 (図 20 1～4) 土師器杯 (1～3)・高杯・甕、黒色土器碗・甕、須恵器杯身・杯蓋・鉢・壺 (4)・甕、灰釉陶器碗・皿・壺、緑釉陶器碗・皿・壺などがある。七条大路路面構築土から出土した小片以外は新しい時期の遺構埋土・包含層に混入したものである。

1 は浅い杯である。体部・口縁部は底部から屈曲して外上方に開き、端部はわずかに肥厚する。調整は底部外面はケズリ、内面は丁寧なナデ、体部外面は横方向のケズリ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。2・3 は高台が付く杯である。体部・口縁部は内弯気味に開き、端部はわずかに肥厚する。貼り付け高台である。調整は底部外面はケズリののちナデ、内面はナデ、体部外面は横方向のケズリ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。4 は把手が付く壺である。口縁部は短く直立し、端部は丸くおさめる。調整は肩部・口縁部内外面とも横方向のナデである。把手は薄い板状の粘土塊を貼り付けたのち、方形に整形、歪な楕円形を穿孔する。

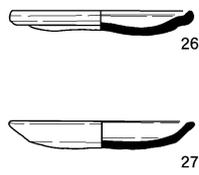
井戸 383 (図 20・25 5～8・231) 土師器皿 (5・6)・高杯・甕、白色土器高杯 (8)、黒色土器碗 (7)、須恵器杯身・壺・甕 (231)、灰釉陶器碗・皿・壺、緑釉陶器碗などが出土した。土師器皿は小型皿 (5・6)・大型皿がある。口縁部が強く屈曲し、器壁は薄い。調整は底部外面はオサエ、内面は丁寧なナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。7 は口縁部が内弯気味に開き、端部内側に浅い沈線がめぐる。調整は口縁部内外面とも横方向のミガキである。8 は柱状部と杯部の接合部分の破片で、柱状部は中空である。調整は内外面とも横方向のナデである。231 は特大型の甕である。井戸枠に使用していたため底部は欠損する。体部と口縁部は直接接合しないが、大きく肩が張る形態に復元できる。口縁部は肩部から強く屈曲して開き、端部はわずかに内弯気味となり面をつくる。調整は体部外面はほぼ垂直方向の擬格子タタキ、内面は同心円タタキののち横方向のナデですり消し、口縁部内外面は横方向のナデで、外面は沈線と鉤形の突起を貼り付けて飾る。猿投産である。Ⅲ期に属する。

井戸 362 (図 21・25 9～25・232) 土師器皿 (9～22)・甕、白色土器盤、瓦器皿、須恵器碗・鉢 (23)・甕 (232)、灰釉系陶器碗 (24)、中国製白磁碗 (25) などが出土した。土師器

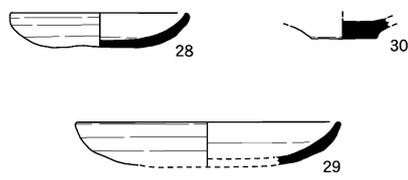
井戸362



土坑367



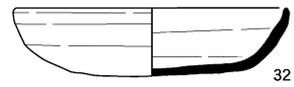
井戸425



井戸252



土坑424



土坑262

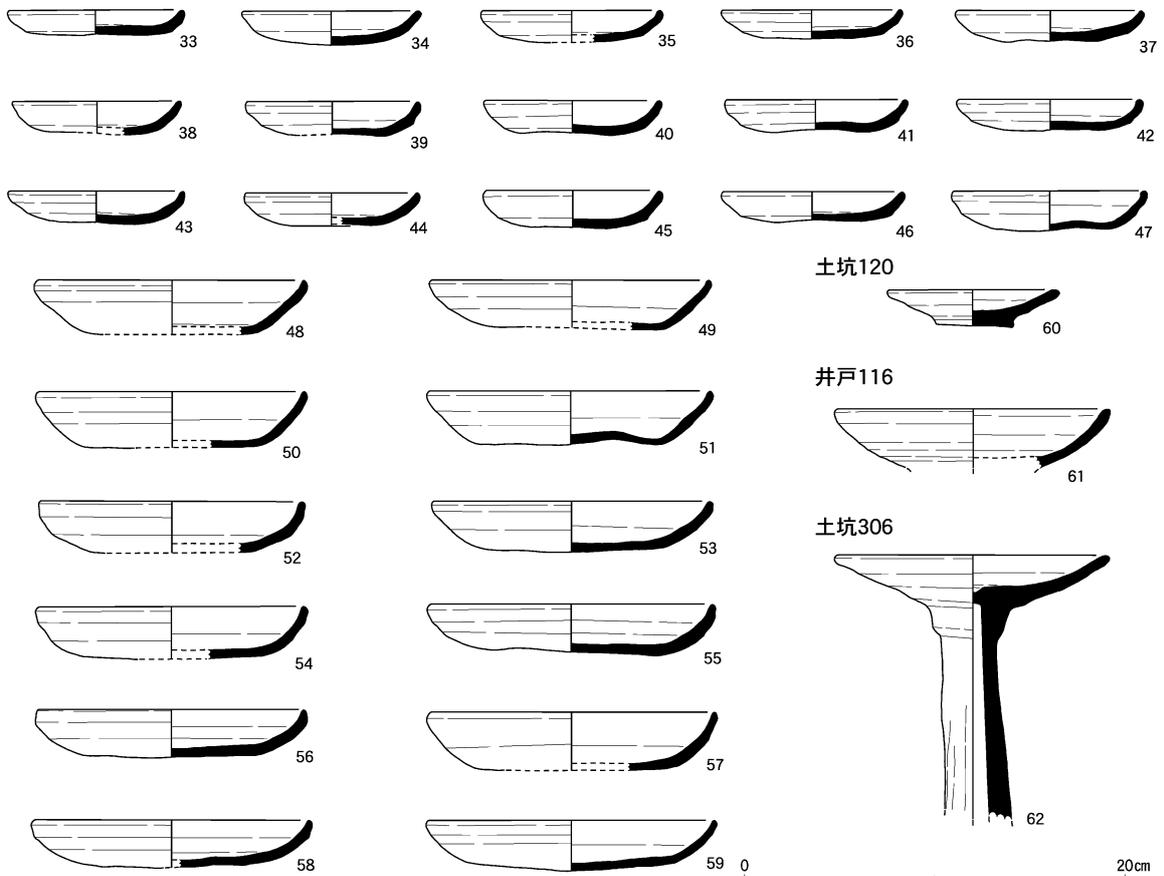


图 21 土器实测图 2 (1 : 4)

皿には受皿形の皿（17・18）・小型皿（9～16）・大型皿（19～22）がある。受皿形の皿は小型のもの（17）・中型のもの（18）がある。口縁端部を短く内側に折り曲げる。小型皿は口縁部が屈曲するもの（9・10）・内弯するもの（11～16）がある。大型皿は口縁部が外反気味のもの（19）・内弯するもの（20～22）がある。調整は底部外面はオサエまたはオサエののちナデ、内面は丁寧なナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。23は体部は外上方に開き、口縁端部は小さく屈曲して面をつくる。片口は強く突出する。調整は体部・口縁部内外面とも回転ナデである。24は分厚い底部から口縁部が屈曲して開き、端部は丸くおさめる。調整は底部外面は糸切り、内面・口縁部内外面は回転ナデである。底部内面には重ね焼きによる高台が溶着し、口縁部内面には自然釉が付着する。25は高台が高く立ち上がる。削り出し高台である。高台外面・底部内外面に施釉する。232は大型の甕である。井戸枠に使用していたため口縁部・底部は欠損する。体部はやや肩が張る倒卵形である。調整は体部外面は右下がりの格子タタキ、内面は同心円タタキで下半部は横方向のナデですり消しである。上半部外面には薄く自然釉が付着する。播磨産である。V期古段階に属する。

土坑 367（図 21 26・27）土師器皿（26・27）・甕、白色土器高杯、須恵器甕、灰釉系陶器碗、中国製青磁壺などが出土した。土師器皿には小型皿（26・27）・大型皿がある。小型皿は口縁部が屈曲するもの（26）・内弯気味のもの（27）がある。調整は底部外面はオサエまたはオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。V期古段階に属する。

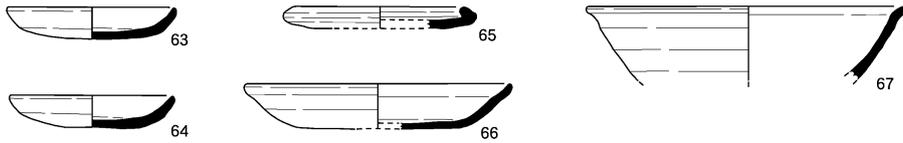
井戸 425（図 21 28～30）土師器皿（28・29）、白色土器碗・盤（30）、須恵器鉢・甕、灰釉系陶器碗などが出土した。土師器皿には小型皿（28）・大型皿（29）がある。小型皿・大型皿はともに口縁部は内弯する。調整は底部外面はオサエまたはオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。30は浅く開く。調整は底部外面は糸切り、内面・口縁部内外面は回転ナデである。V期に属する。

井戸 252（図 21 31）土師器皿（31）、瓦器碗、須恵器鉢・甕、中国製白磁碗などが出土した。土師器皿には小型皿・大型皿（31）がある。31はほぼ完形の大型皿で、口縁部は内弯する。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面は丁寧なナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。V期に属する。

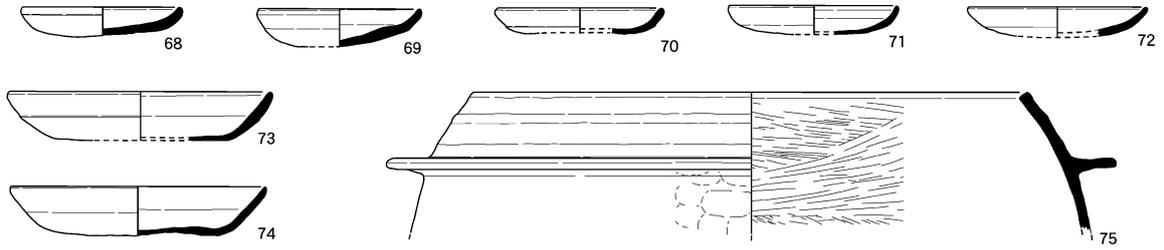
土坑 424（図 21 32）土師器皿（32）などが出土した。32は完形の大型皿で、口縁部は内弯する。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面は丁寧なナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。V期に属する。

土坑 262（図 21 33～59）土師器皿（33～59）・甕、須恵器甕、中国製白磁碗・青白磁壺などが出土した。ほとんどを土師器皿が占め、完形もしくは大きな破片に接合できるものが多い。土師器皿には小型皿（33～47）・大型皿（48～59）がある。小型皿はやや浅いもの（33）・深いもの（39・47）、大型皿は口縁部が底部から屈曲気味のもの（48～51）があるが、いずれも口縁部は内弯する。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。V期中段階～新段階に属する。

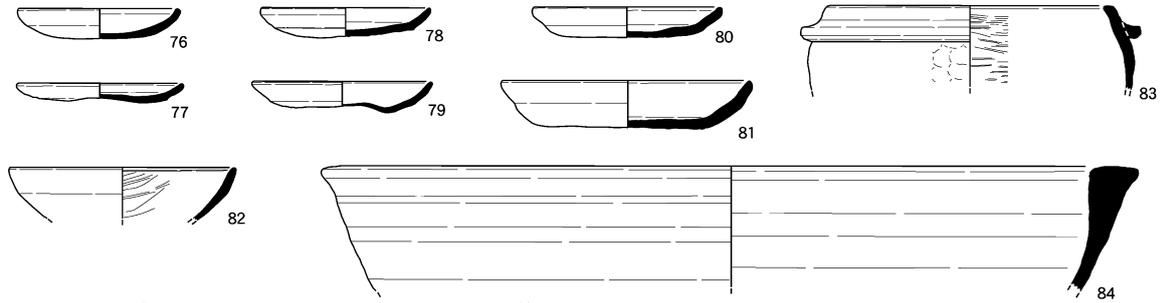
井戸415



井戸84



井戸85



井戸78

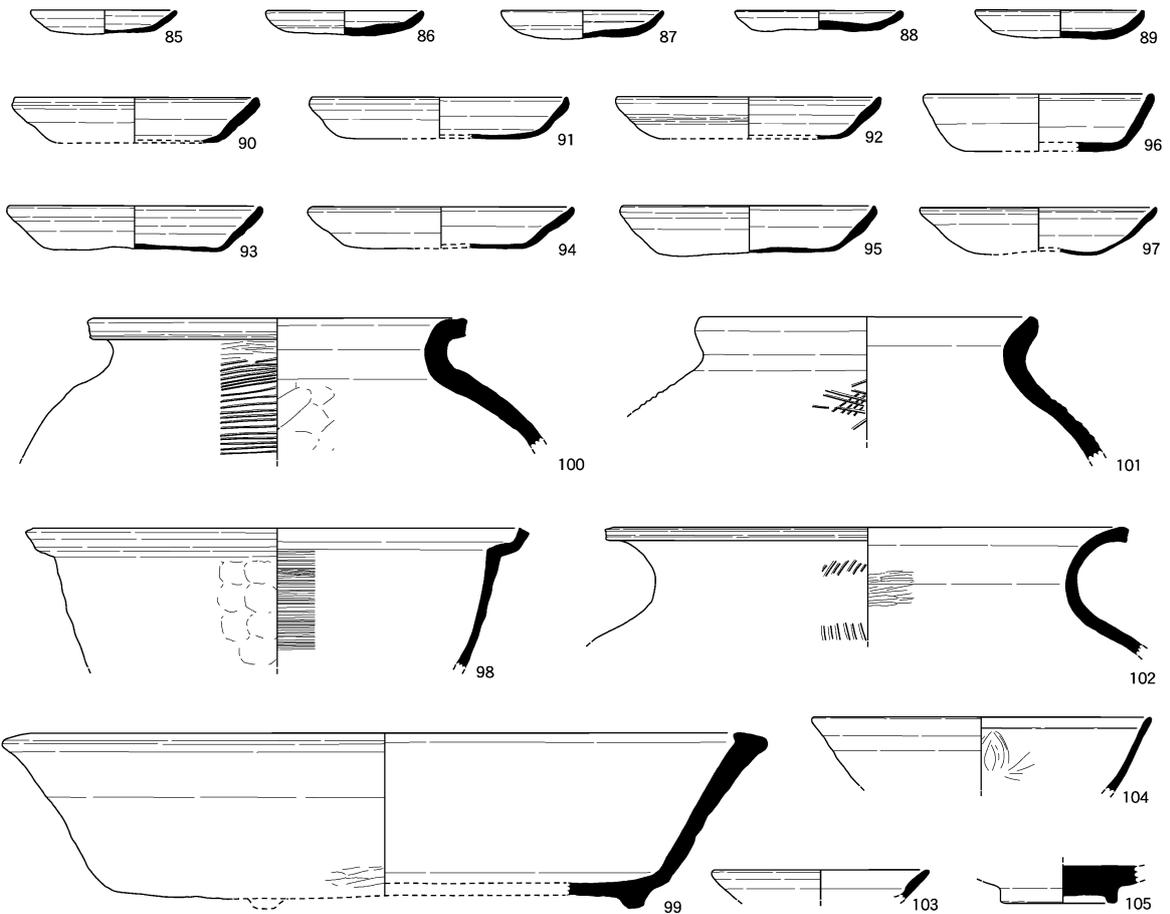


图 22 土器实测图 3 (1 : 4)

土坑 120 (図 21 60) 土師器皿、白色土器盤 (60)、瓦器釜、須恵器鉢・甕、中国製白磁碗などが出土した。土師器皿には小型皿・大型皿がある。60 は分厚い底部から口縁部が直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は底部外面は糸切り、内面・口縁部内外面は回転ナデである。V 期に属する。

井戸 116 (図 21 61) 土師器皿、白色土器碗 (61)・鉢、瓦器火鉢、灰釉系陶器碗、中国製白磁碗・青磁皿などが出土した。土師器皿には小型皿・大型皿がある。61 は口縁部は内弯し、端部はやや肥厚して丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。白色土器ではなく他地域からの搬入品の可能性がある。V 期に属する。

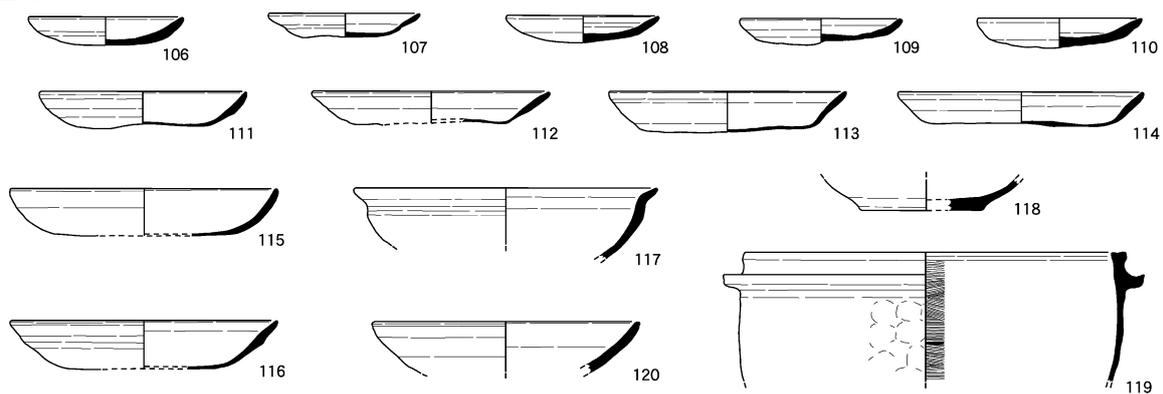
土坑 306 (図 21 62) 土師器皿、白色土器高杯 (62)、瓦器鍋・釜・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器壺・甕、中国製白磁碗・褐釉盤などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。⁶⁾赤色系土師器には小型皿・大型皿がある。白色系土師器はごく少量が出土したのみである。62 は柱状部は中空の円筒形、杯部は浅い皿形で、口縁部は丸くおさめる。調整は柱状部外面下半部は縦方向の細かい単位のケズリ、上半部はオサエ、杯部は内外面とも回転ナデである。V 期～VI 期に属する。

井戸 415 (図 22 63～67) 土師器皿 (63～66)、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器碗 (67)、中国製白磁碗・褐釉壺などが出土した。土師器皿には受皿形の皿 (65)・小型皿 (63・64)・大型皿 (66) がある。受皿形の皿は口縁端部を短く内側に折り曲げる。小型皿・大型皿はともに口縁部は内弯する。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。67 は口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。口縁端部内面に薄く自然釉が付着する。V 期～VI 期に属する。

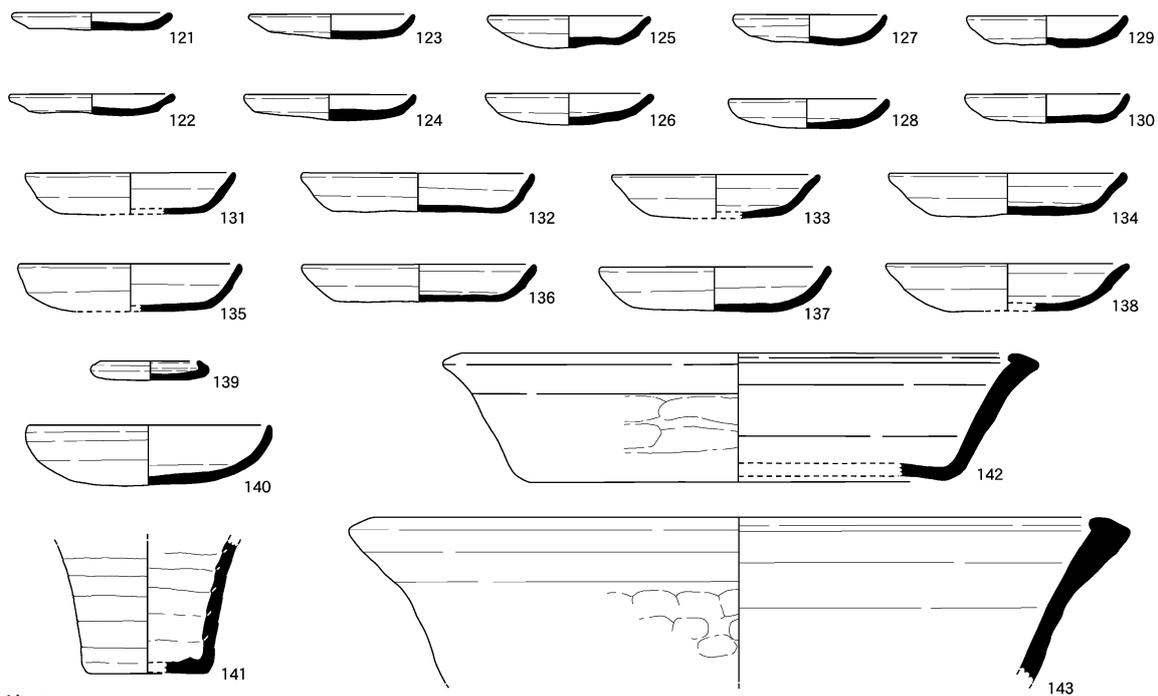
井戸 84 (図 22 68～75) 土師器皿 (68～74)・釜 (75)、瓦器碗・鍋・釜・甕、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器碗・鉢、中国製白磁碗・壺・青磁皿・褐釉壺などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (68～72)・大型皿 (73・74) がある。小型皿は浅いもの (68・70) がある。大型皿は口縁部が底部から屈曲気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器はごく少量が出土したのみである。75 は内傾する口縁部外面に鏝がめぐる。調整は体部外面はオサエ、鏝・口縁部外面は横方向のナデ、体部・口縁部内面は横方向の粗いハケである。鏝の下面の一部に煤が付着する。VI 期に属する。

井戸 85 (図 22 76～84) 土師器皿 (76～81)、瓦器碗 (82)・釜 (83)・火鉢 (84)、須恵器鉢・甕、焼締陶器甕、中国製白磁碗・壺・青磁碗などが出土した。土師器皿は赤色系土師器のみで、小型皿 (76～80)・大型皿 (81) がある。77 は極端に浅いものである。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。82 は口縁部が内弯気味に開き、端部内側に浅い沈線がめぐる。調整は口縁部外面はオサエ・横方向のナデ、内面はミガキである。楠葉産である。83 は内傾する口縁部外面に鏝がめぐる。調整は体部外面はオサエ、鏝・口縁部外面は横方向のナデ、体部・口縁部内面はナデ・横方向のナデである。84 は口縁部は内弯して立ち上がり、端部は幅広い面を

土坑107



土坑115



土坑80

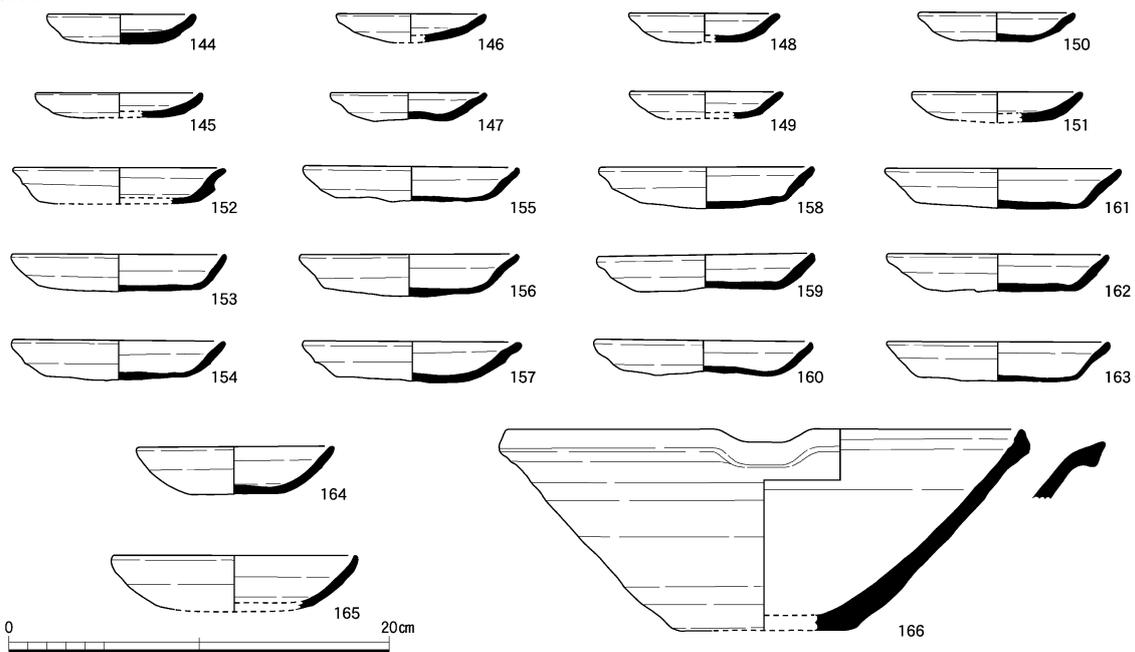


图 23 土器实测图 4 (1 : 4)

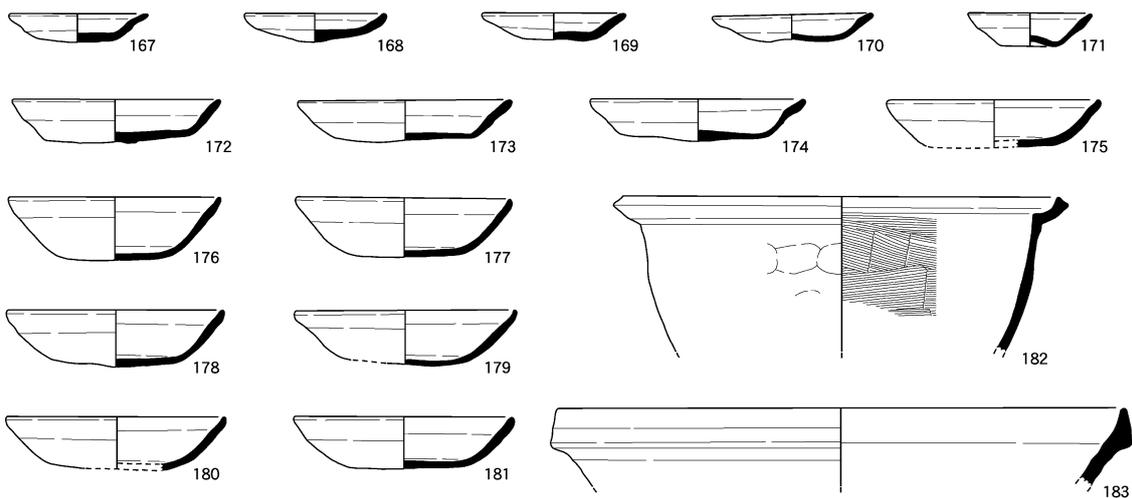
つくる。調整は口縁部内外面・端面とも横方向のナデである。VI期に属する。

井戸 78 (図 22 85～105) 土師器皿 (85～97)、瓦器椀・鍋 (98)・釜・火鉢 (99)、須恵器鉢・甕 (100～102)、焼締陶器壺・甕、灰釉系陶器椀、中国製白磁椀・壺・青磁椀 (104・105)・皿 (103)・壺などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (85～89)・大型皿 (90～97) がある。96 は口縁部が直立気味に開く深い形態である。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器はごく少量が出土したのみである。98 は口縁部が受口状になる。調整は体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面は横方向のナデである。99 は口縁部は底部から屈曲して開き、端部は幅広い面をつくる。底部外面には小さな半球形の脚が付く。調整は体部外面はオサエ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。100 は口縁部が強く弯曲し、端部に面をつくる。調整は肩部外面は横方向の平行タタキ、内面はオサエ、口縁部内外面は横方向のナデである。101 は口縁部が短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。調整は肩部外面は交差状の平行タタキ、内面はオサエ・ナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。102 は器壁が薄く、口縁部は外反して開き、端部に小さな面をつくる。調整は肩部外面は縦方向の平行タタキ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。103～105 は内外面に施釉する。104 は口縁部内面、105 は底部内面に花文を陰刻して飾る。VI期新段階に属する。

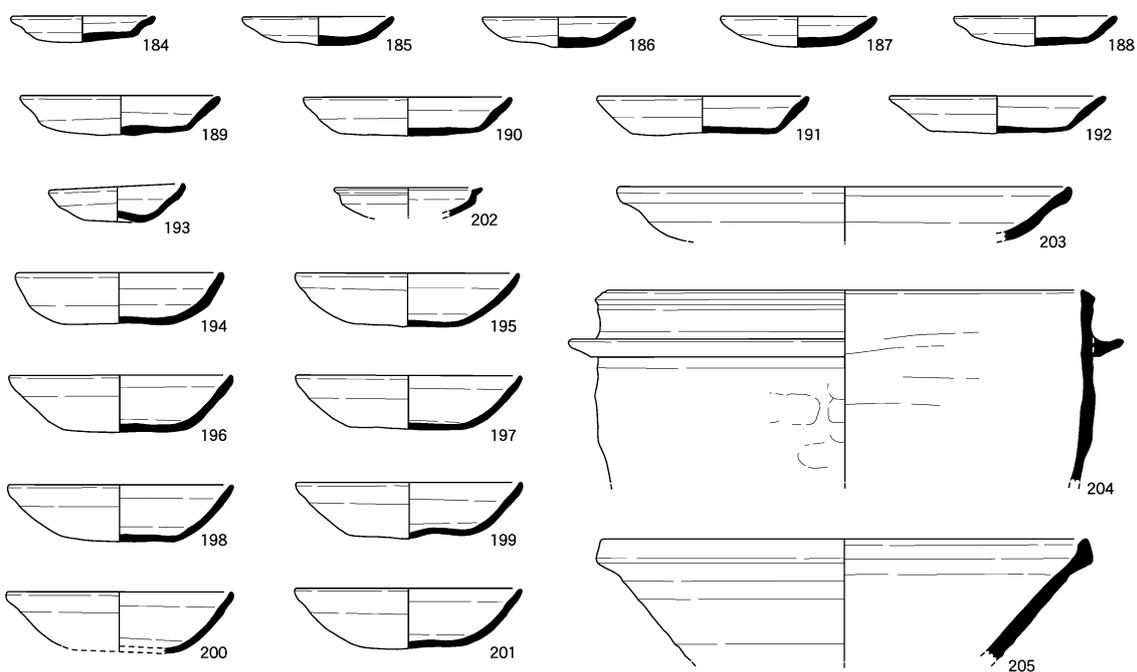
土坑 225 (図 25 233) 土師器皿、白色土器椀・高杯、瓦器椀・鍋・釜・火鉢、須恵器鉢・甕 (233)、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、中国製白磁椀・青磁椀・褐釉壺などが出土した。233 は大型の甕である。口縁部は肩部から緩やかに屈曲して外反し、端部は外下方につまみ出して面をつくる。調整は体部外面は左上がりの平行タタキ、内面は同心円タタキ、口縁部内外面は横方向のナデである。播磨産である。VI期に属する。

土坑 107 (図 23 106～120) 土師器皿 (106～116)・椀 (117・118)、瓦器鍋 (119)・釜・火鉢、須恵器鉢・甕、焼締陶器鉢・壺・甕、灰釉系陶器椀 (120)、施釉陶器椀・皿、中国製白磁椀・青磁椀・褐釉壺などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (106～110)・大型皿 (111～114) がある。小型皿は浅い。大型皿は口縁部が内弯気味のもの (111)・外反するもの (112・113) がある。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には小型皿・大型皿 (115・116) がある。大型皿は口縁部が内弯する。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。117 は口縁部は体部から屈曲して開く。調整は体部外面はオサエ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。体部外面に粘土紐の継ぎ目が残る。118 は小破片であるが、底部外面に糸切り痕が残る。調整は体部内面・体部内外面とも回転ナデである。他地域からの搬入品である。119 は口縁部外面に鏝がめぐる。調整は体部外面はオサエ、内面は横方向の細かいハケ、鏝・口縁部内外面は横方向のナデである。120 は口縁部は内弯し、端部は丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。釉薬はほとんど付着せず、灰黄褐色を呈する。施釉陶器は灰釉を施す。瀬戸産である。VI期～VII期に属する。

井戸95



井戸125



土坑160

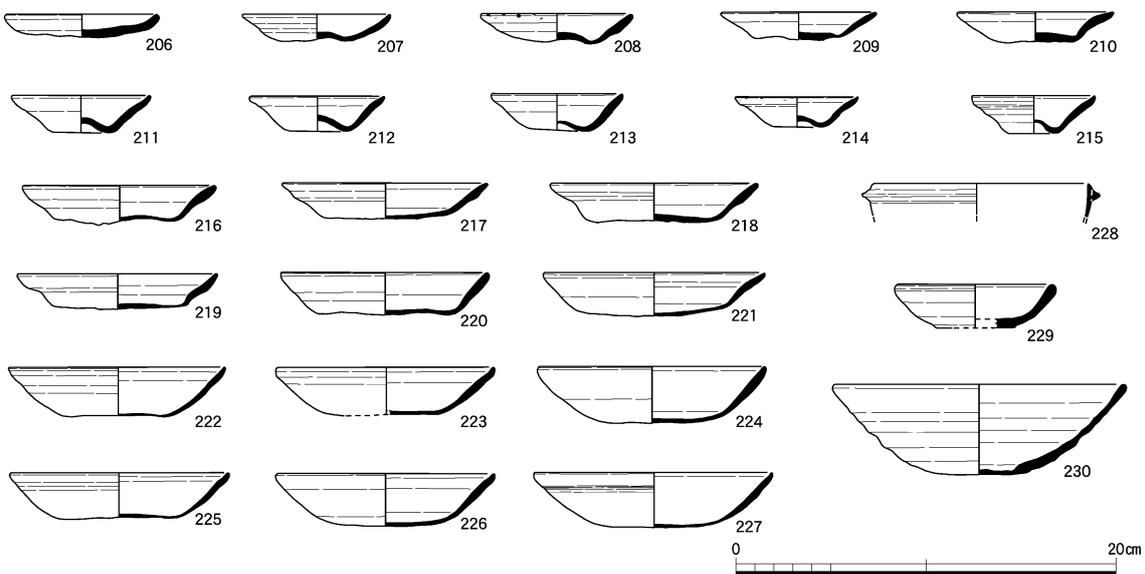


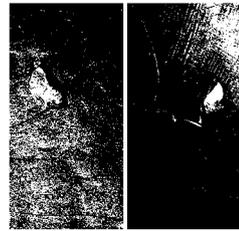
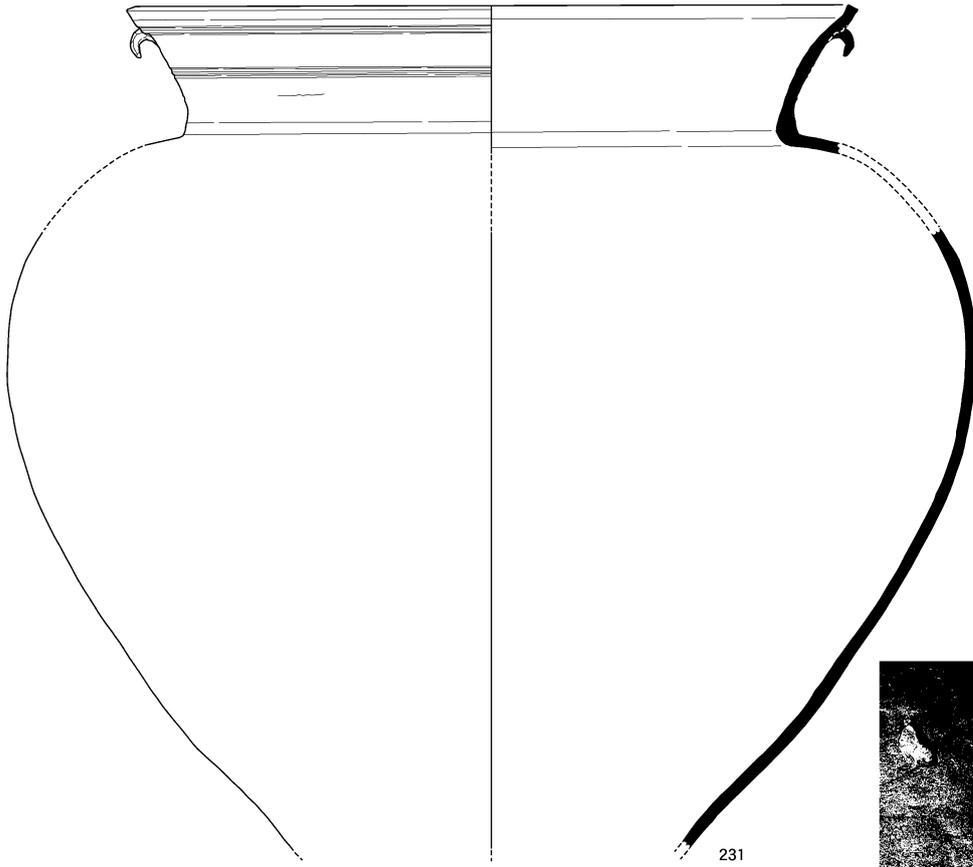
图 24 土器实测图 5 (1 : 4)

土坑 115 (図版 10、図 23 121～143) 土師器皿 (121～140)・鉢 (141)、白色土器椀・盤、瓦器皿・椀・鍋・釜・火鉢 (142・143)、須恵器鉢・甕、焼締陶器鉢・壺・甕、中国製白磁椀・皿・壺・青磁椀・皿・褐釉壺などが出土した。ほとんどを土師器皿が占め、完形もしくは大きな破片に接合できるものが多い。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器があり、赤色系土師器が多くを占める。赤色系土師器には小型皿 (121～130)・大型皿 (131～138) がある。小型皿は浅いもの (121・122)・口縁部が内弯気味で深いもの (129・130) がある。大型皿は口縁部が外反するもの (133・134) がある。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には受皿形の皿 (139)・小型皿・大型皿 (140) がある。139 は小型で、口縁端部を短く内側に折り曲げる。140 は口縁部が内弯する。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。141 は平底で、体部は直立気味に外反して開く。調整は底部外面は丁寧なナデ、内面・体部内外面はナデで、内外面に粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。142・143 は口縁部は底部から屈曲して開き、端部は幅広い面をつくる。調整は体部外面はオサエののちナデ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。Ⅵ期新段階～Ⅶ期古段階に属する。

土坑 80 (図 23 144～166) 土師器皿 (144～165)・鉢、瓦器椀・鍋・釜・火鉢、須恵器鉢 (166)・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、施釉陶器椀、中国製白磁椀・壺・青磁椀・水注・褐釉鉢などが出土した。多くを土師器皿が占め、完形もしくは大きな破片に接合できるものが多い。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器があり、赤色系土師器が多くを占める。赤色系土師器には小型皿 (144～151)・大型皿 (152～163) がある。小型皿は口径が小さくなり、口縁部が外反するもの (147～150) がある。大型皿は口縁部が外反するものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には小型皿・大型皿 (164・165) がある。大型皿は口縁部が内弯する。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。166 は平底で、体部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。片口は小さく突出する。調整は底部外面はナデ、体部・口縁部内外面は回転ナデである。内面下半部は使用痕により平滑になる。播磨産である。Ⅵ期新段階～Ⅶ期古段階に属する。

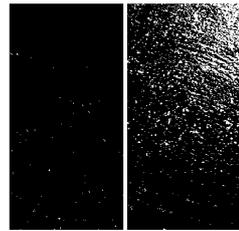
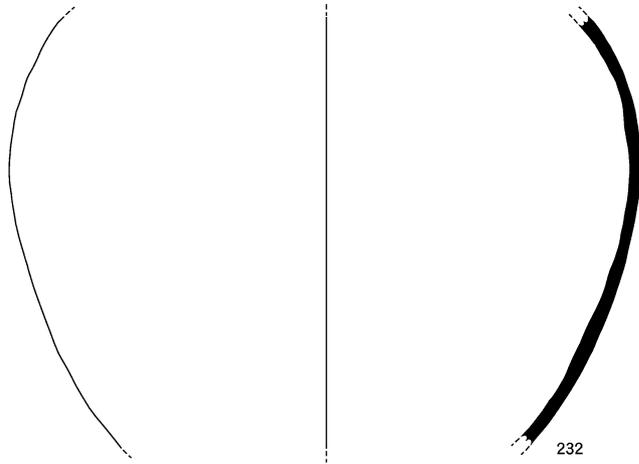
井戸 95 (図 24 167～183) 土師器皿 (167～181)、瓦器椀・鍋 (182)・釜・火鉢・甕、須恵器鉢 (183)・甕、焼締陶器甕、灰釉系陶器椀、施釉陶器おろし鉢、中国製褐釉盤などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (167～170)・大型皿 (172～174) がある。小型皿は浅く、口縁部は外反するものが多い。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には小型皿 (171)・大型皿 (175～181) がある。171 は底部中央を少し押し上げる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。大型皿は浅いもの (175)・深いもの (176～181) がある。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。182 は口縁部が受口状になる。調整は体部外面はオサエ、内面は横方向のハケ、口縁部内外面は横方向のナデである。183 は体部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は

井戸383



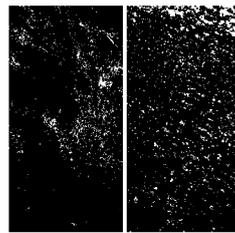
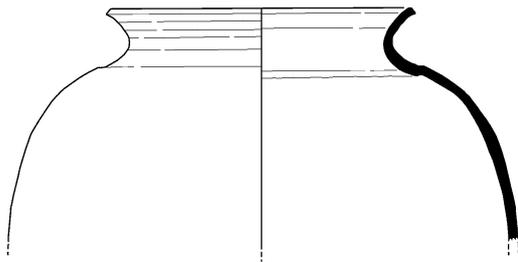
内面調整 外面調整

井戸362



内面調整 外面調整

土坑225



内面調整 外面調整

233

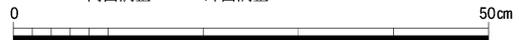


図 25 土器実測図6 (1 : 8)

内外面とも回転ナデである。播磨産である。Ⅶ期古段階～中段階に属する。

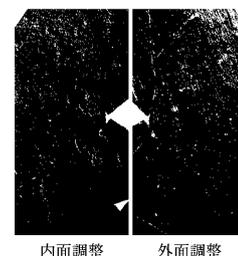
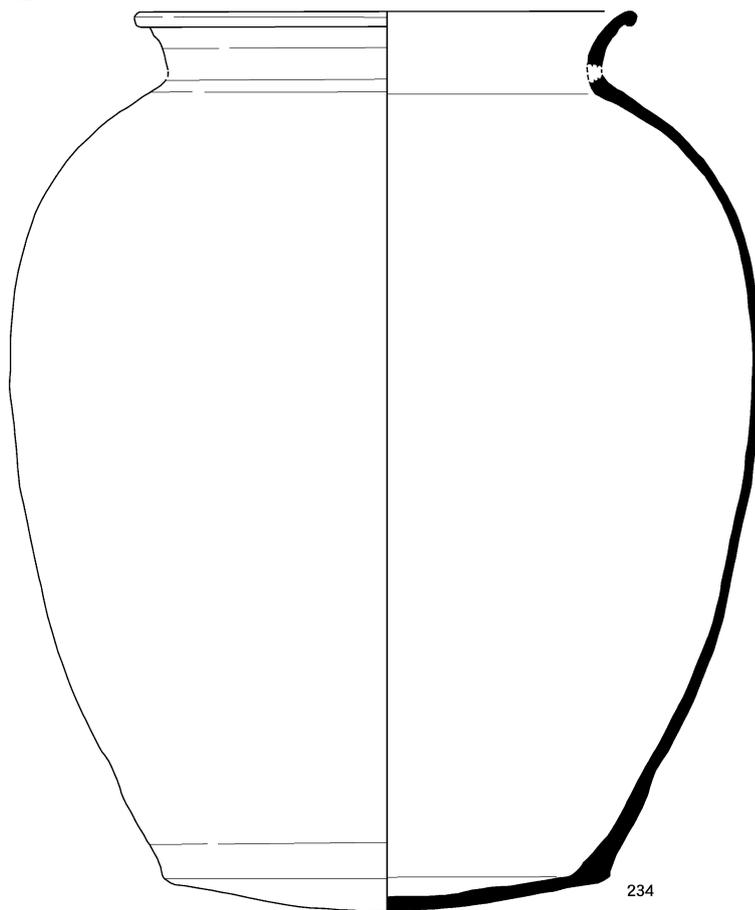
井戸 125 (図版 10、図 24 184～205) 土師器皿 (184～201)・椀 (202・203)、瓦器椀・鍋 (204)・釜・火鉢、須恵器鉢 (205)・甕、焼締陶器鉢・甕、灰釉系陶器椀・鉢、中国製白磁椀・鉢・青磁椀・鉢などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には小型皿 (184～188)・大型皿 (189～192) がある。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には受皿形の皿・小型皿 (193)・大型皿 (194～201) がある。193 は底部中央を少し押し上げる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。大型皿は器壁が薄いものがある (197・198)。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。202 は小型で口縁部は体部から屈曲して開く。調整は体部外面はナデ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。203 は皿状の器形で、口縁部は屈曲する。調整は体部外面はオサエ・ナデ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。204 は口縁部外面に罫がめぐり、調整は体部外面はオサエ、罫・口縁部外面は横方向のナデ、体部・口縁部内面は横方向の板ナデである。205 は体部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面とも回転ナデである。播磨産である。Ⅶ期中段階～新段階に属する。

土坑 160 (図 24 206～230) 土師器皿 (206～227)・釜 (228)・鉢、瓦器椀・鍋・釜・火鉢・甕、須恵器椀 (229・230)・鉢・甕、焼締陶器挿鉢・壺・甕、灰釉系陶器椀、中国製白磁椀・壺・青磁椀・褐釉壺などが出土した。土師器皿には赤色系土師器と白色系土師器がある。赤色系土師器には受皿形の皿・小型皿 (206～210)・大型皿 (216～221) がある。小型皿は歪みが目立つようになる。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。白色系土師器には受皿形の皿・小型皿 (211～215)・大型皿 (222～227) がある。小型皿は底部中央を強く押し上げるものが多くを占める。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。大型皿は器壁が薄いものが多くを占める。調整は底部外面はオサエののちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。228 は小型で口縁部外面に罫がめぐり、調整は内外面とも横方向のナデである。須恵器椀には小型 (229)・中型 (230) がある。ともに平底で、体部は内弯して開き、口縁端部は丸くおさめる。調整は底部外面は糸切り、体部・口縁部内外面は回転ナデである。Ⅶ期新段階に属する。

土坑 442 (図 26 234) 土師器皿、瓦器椀・鍋・釜、須恵器鉢、焼締陶器甕 (234)、施釉陶器おろし鉢、中国製青磁椀などが出土した。234 は土坑中央に据えた大型の甕である。底部はやや凸となり、体部は屈曲して緩やかに立ち上がる。口縁部は肩部から屈曲して外反し、端部は丸く折り曲げて玉縁状となる。調整は底部内外面はナデ、体部外面は板状工具による縦方向から左上がりのナデ、内面は板状工具による横方向のナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。灰色を呈する。備前産である。Ⅶ期古段階～中段階に属する。

土坑 301 (図 26 235) 土師器皿、瓦器椀、須恵器甕、焼締陶器甕 (235)、中国製白磁椀・壺などが出土した。235 は土坑中央に据えた大型の甕である。底部は小さい平底で、体部は屈曲

土坑442



土坑301

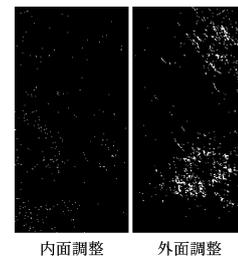
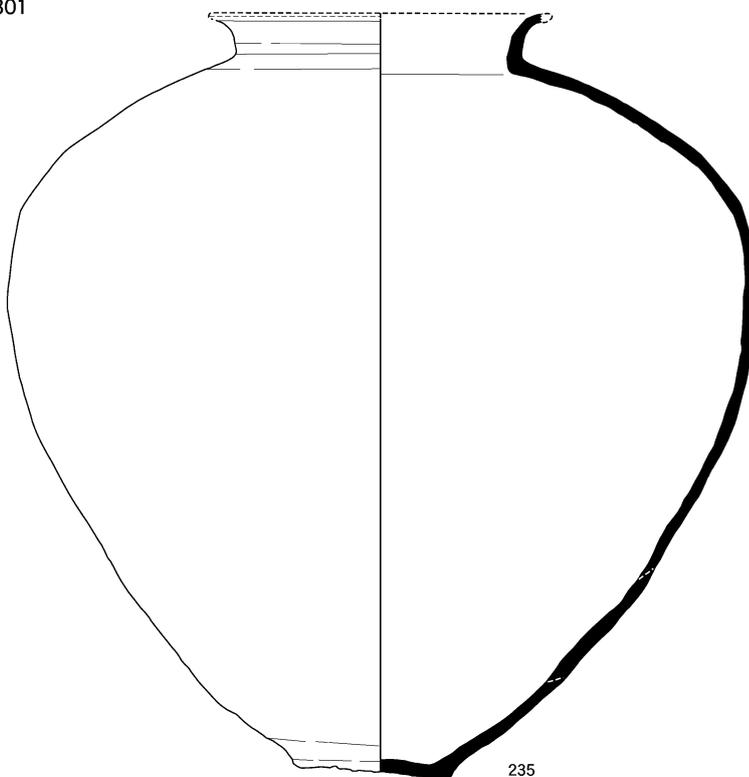


图 26 土器実測図 7 (1 : 8)

して外上方に立ち上がり、大きく肩部が張る。口縁部は屈曲して、短く外反する。調整は底部外面は未調整で凸凹があり、内面はナデ、体部外面は縦方向から左上がりのナデと乱雑な押印状のタタキ、内面はオサエののち横方向・右上がりのナデ、口縁部内外面は横方向のナデである。肩部外面には自然釉が付着する。褐灰色を呈する。渥美産である。Ⅵ期～Ⅶ期に属する。

江戸時代の土器・陶磁器 土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器がある。施釉陶器・磁器が多くを占める。

土師器には皿・椀・つぼつぼ・焙烙・釜・灯明皿・灯火具・火鉢・壺・蓋などがある。皿は少なく、焙烙・火鉢・壺が多い。

瓦器には灯火具・火鉢などがある。

焼締陶器には盤・播鉢・壺・甕などがある。播鉢は信楽産、壺・甕は備前産が多い。

施釉陶器には椀・皿・鉢・播鉢・土瓶・鍋・蓋・灯明皿・灯火具・油差し・火入れ・火鉢・壺・甕などがある。江戸時代前期は瀬戸・美濃産、唐津産が多く、江戸時代中期以降になると京都産が増加する。

磁器には染付椀・皿・鉢・蓋・仏飯器・合子・壺・煙管、青磁染付椀・鉢・蓋、青磁椀・皿・香炉、白磁椀・皿・壺、色絵椀・鉢・仏飯器・水滴などがある。大部分は肥前産であるが、江戸時代前期には漳州窯系の染付皿がある。

(3) 瓦類

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・軒棧瓦・棧瓦・菊丸瓦・その他の道具瓦がある。江戸時代の瓦が大部分を占め、室町時代以前の瓦は少ない。江戸時代の瓦は焼成段階で燻すため、表面は黒灰色を呈する。

軒丸瓦(図版 11、図 27 236・237) 236 は間弁を配する単弁六弁蓮華文で、中房は押圧が弱いため蓮子は不明である。調整は剥離している部分が多く不明瞭であるが、瓦当裏面はナデかオサエ、外周はナデである。土坑 120 から出土した。Ⅴ期に属する。

237 は複弁八弁蓮華文で、中房は大きく 1 + 6 の蓮子と周囲に放射状の細かい刻みを配する。瓦当面に細かい布目が付く。調整は瓦当裏面がオサエ・ナデ、外周はナデである。土坑 200 から出土した。Ⅴ期～Ⅵ期に属する。

軒棧瓦(図 27 238) 簡略化した唐草文で、中心に花文を飾る。調整は瓦当裏面は横方向のナデ、凹面は横方向・縦方向の丁寧なナデ、凸面は粗いナデである。土坑 17 から出土した。Ⅴ期に属する。

菊丸瓦(図版 11、図 27 239～243) 菊丸瓦は小型円形の瓦当上部に細長い体部を接合する。239 は間弁を配する八弁花文で、弁端は尖り気味である。周縁内側を面取りする。調整は瓦当裏面は丁寧なナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。土坑 64 から出土した。Ⅺ期に属する。

240 は十六弁花文である。瓦当面に細かい布目が付く。接合面にはヘラで縦方向に粗い沈線を施す。調整は瓦当裏面はオサエ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。攪乱から出土した。

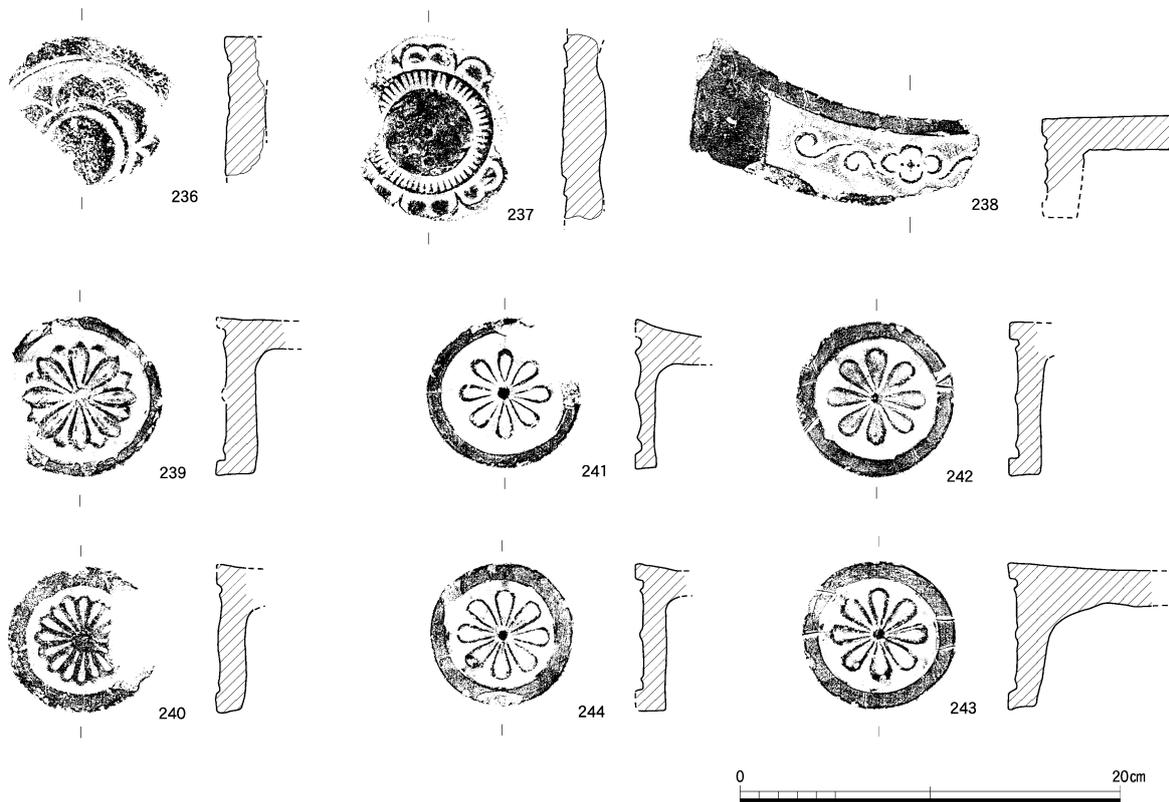


図 27 瓦拓影・実測図（1：4）

江戸時代に属する。

241～244は同文の8弁花文である。241は周縁内側を幅広く面取りする。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。

242は周縁内側を面取りする。接合面にはヘラで縦方向に粗い沈線を施す。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデである。

243は周縁内側をわずかに面取りする。調整は瓦当裏面はオサエ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデ、凹面はナデで一部に布目が残る。241～243は土坑64から出土した。XI期に属する。

244は周縁内側を面取りする。調整は瓦当裏面はナデ・円周方向のナデ、外周は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデである。攪乱から出土した。江戸時代に属する。

（4）土製品

土製品には土馬・円塔・鑄型・フイゴ羽口・坩堝・取瓶・埴・焼塩壺・土人形・土鈴・泥面子・おはじき・窯道具などがある。

土馬（図 28 245）胴体部分の破片である。断面はV字形で下方に四肢が伸びる。手づくね成形で、粘土塊から四肢を引き出し、折り曲げる。井戸116から出土した。V期の遺構であるが、平安時代前期のものが混入した可能性が高い。

円塔（図 28 246）ほぼ完形である。うすい円盤状部に半球状部が載る。外型成形で、円盤状

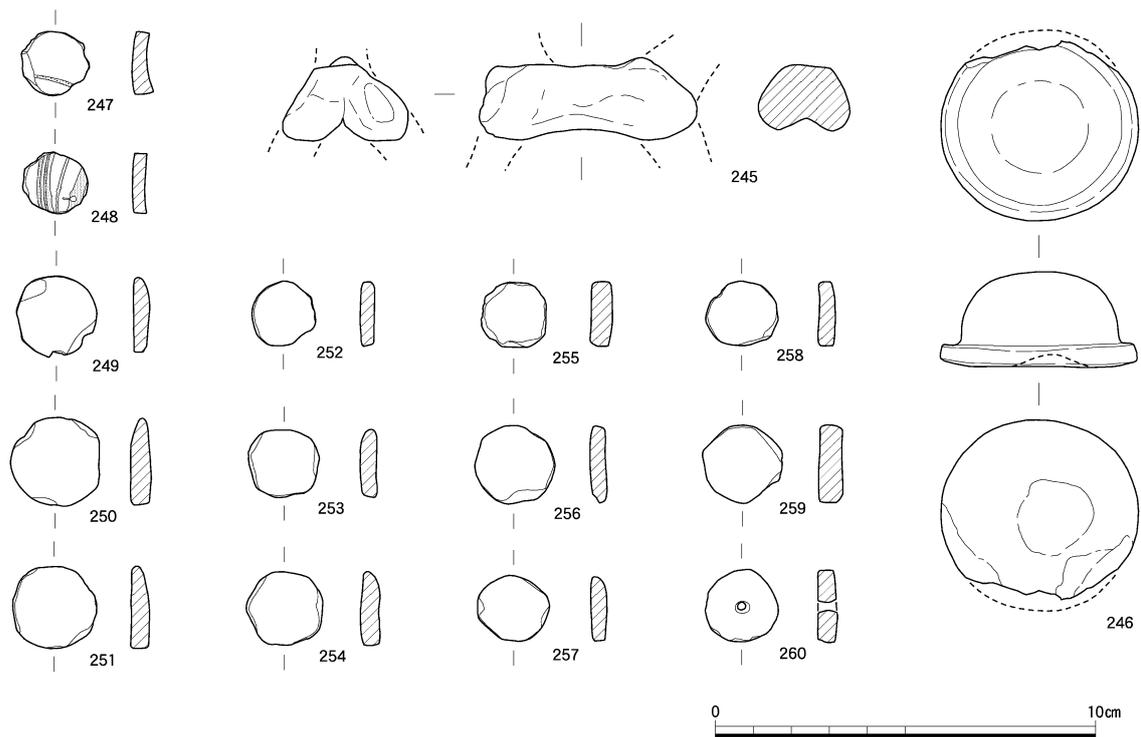


図 28 土製品実測図 1 (1 : 2)

部下面の一部を除き、うすく緑釉を施す。第 2 面遺構検出中に出土した。鎌倉時代に属するか。

おはじき (図 28 247 ~ 260) 磁器・土師器の椀・皿の破片を丸く打ち欠いて円形に加工する。247・248 は磁器染付椀体部、249 ~ 252 は白色系土師器皿、253 ~ 260 は赤色系土師器皿の破片を用いており、249 ~ 251・253・254 は口縁端部の破片である。260 は中央に両面から穿孔する。すべて土坑 135 からまとめて出土した。XI 期に属する。

鋳型 (図版 11、図 29 261 ~ 271) 268 のみが完形で、他はいずれも破片である。スサとして粉殻・細かく刻んだ藁を含む粗土に細かい雲母を含む真土をうすく塗る。外面は橙色・にぶい橙色・灰白色、内面は灰色から黒灰色を呈する。

261 ~ 266 は小破片のため全容は不明である。266 は比較的粗い雲母を真土の表面に撒いている可能性がある。262・262・266 は土坑 115 から出土した。VI 期 ~ VII 期に属する。263・264 は土坑 70 から出土した。XI 期の遺構であるが、混入した可能性がある。265 は土坑 75 から出土した。VI 期 ~ VII 期に属する。

267 は湯口部分の破片である。鱗状などの細かい文様を施す。外面の調整はオサエののちナデである。第 2 層から出土した。鎌倉時代に属する。

268 は刀金具の鋳型である。比較的粗い雲母を真土の表面に撒いている可能性がある。外面の調整はナデで平滑に仕上げる。土坑 112 から出土した。VI 期に属する。

269 は半球形製品の鋳型である。中心よりの真土は剥離する。外面の調整はナデである。土坑 290 から出土した。VII 期に属する。

270・271 は鏡の鋳型である。270 はナデののち片面にカゴメ状の刻みをいれ、もう一面には

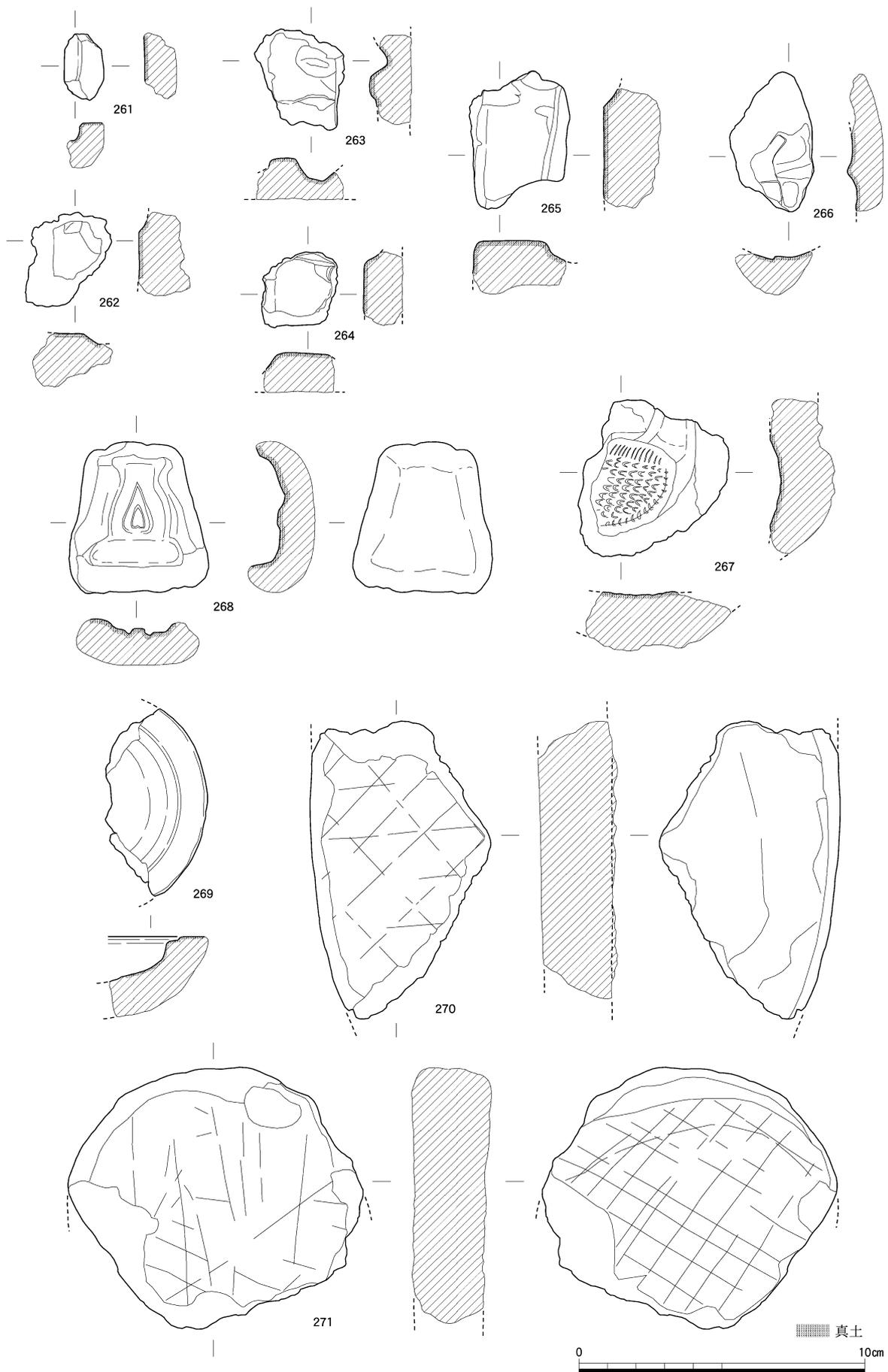


图 29 土製品実測図 2 (1 : 2)

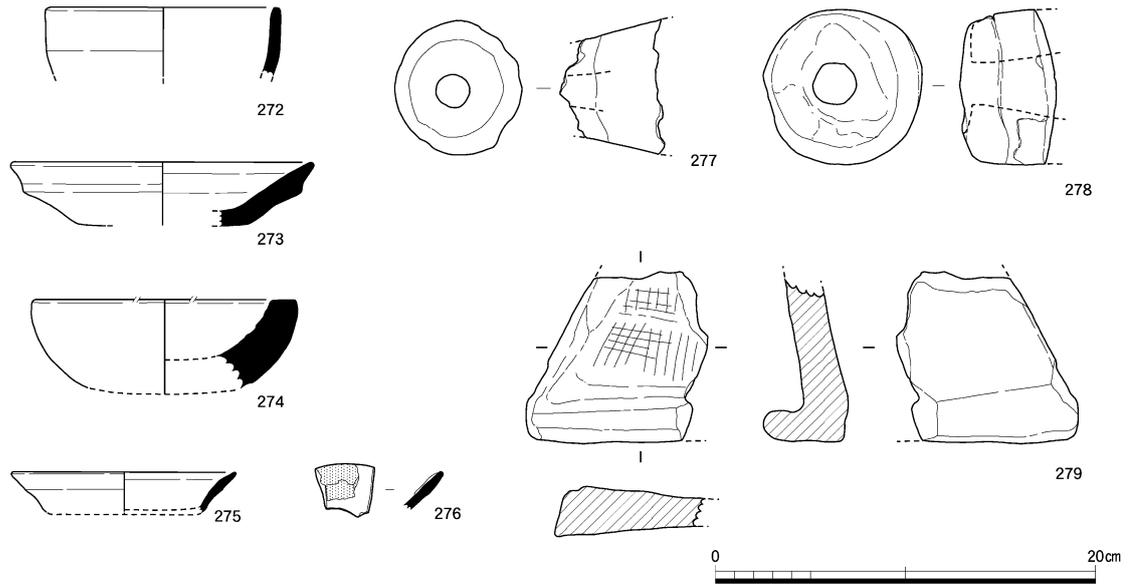


図30 土製品実測図3 (1:4)

部分的に粗土を塗る。271 はナデののち片面に粗い格子状、もう一面に交差線状の刻みを入れる。いずれも真土はない。270 は第3層から出土した。平安時代後期に属する。271 は第1面遺構検出中に出土した。江戸時代以前に属する。

小型丸椀 (図30 272) 口縁部の破片である。口縁部はほぼ直立し、端部は小さな面をつくる。類例から半球形の形態であると考えられる。調整は口縁部外面はナデ、内面は使用痕により極めて平滑になる。にぶい褐色を呈する。土坑 399 から出土した。VI期に属する。

皿状土製品 (図30 273) 用途不明品の破片で、天地不明である。口縁部は底部から屈曲して浅く開き、端部は外上方につまみ出す。器壁は非常に分厚い。調整は底部・口縁部外面はオサエののちナデ、内面・口縁部内外面は横方向のナデである。にぶい橙色を呈する。土坑 136 から出土した。VI期～VII期に属する。

埴塼 すべて破片である。内面には金属滓が付着し、外面は被熱により溶融する。江戸時代中期以降に属する。

取瓶 (図30 274～276) 274 は口縁部の破片である。浅い半球形で器壁は分厚い。スサの粉殻を多量に含む。外面は被熱により焼け締まって橙色から灰色を呈し、内面には金属滓が付着する。土坑 296 から出土した。V期に属する。

275・276 は土師器皿を転用したものである。被熱により灰色に変色して焼け締まり、内面には金属滓が付着する。276 は土坑 115 から出土した。VI期～VII期に属する。275 は土坑 48 から出土した。期の遺構であるが、VII期の特徴を備えている土師器皿なので、混入した可能性がある。

輪羽口 (図30 277・278) 先端がすぼまる円柱形で、被熱により橙色に変色する。277 は端部が欠損、278 は端部に金属滓が付着する。277 は第3面遺構検出中に出土した。鎌倉時代に属する。278 は攪乱から出土した。江戸時代に属する可能性が高い。

板状土製品 (図30 279) 用途不明品の破片である。一端を折り曲げる不整形な板状である。

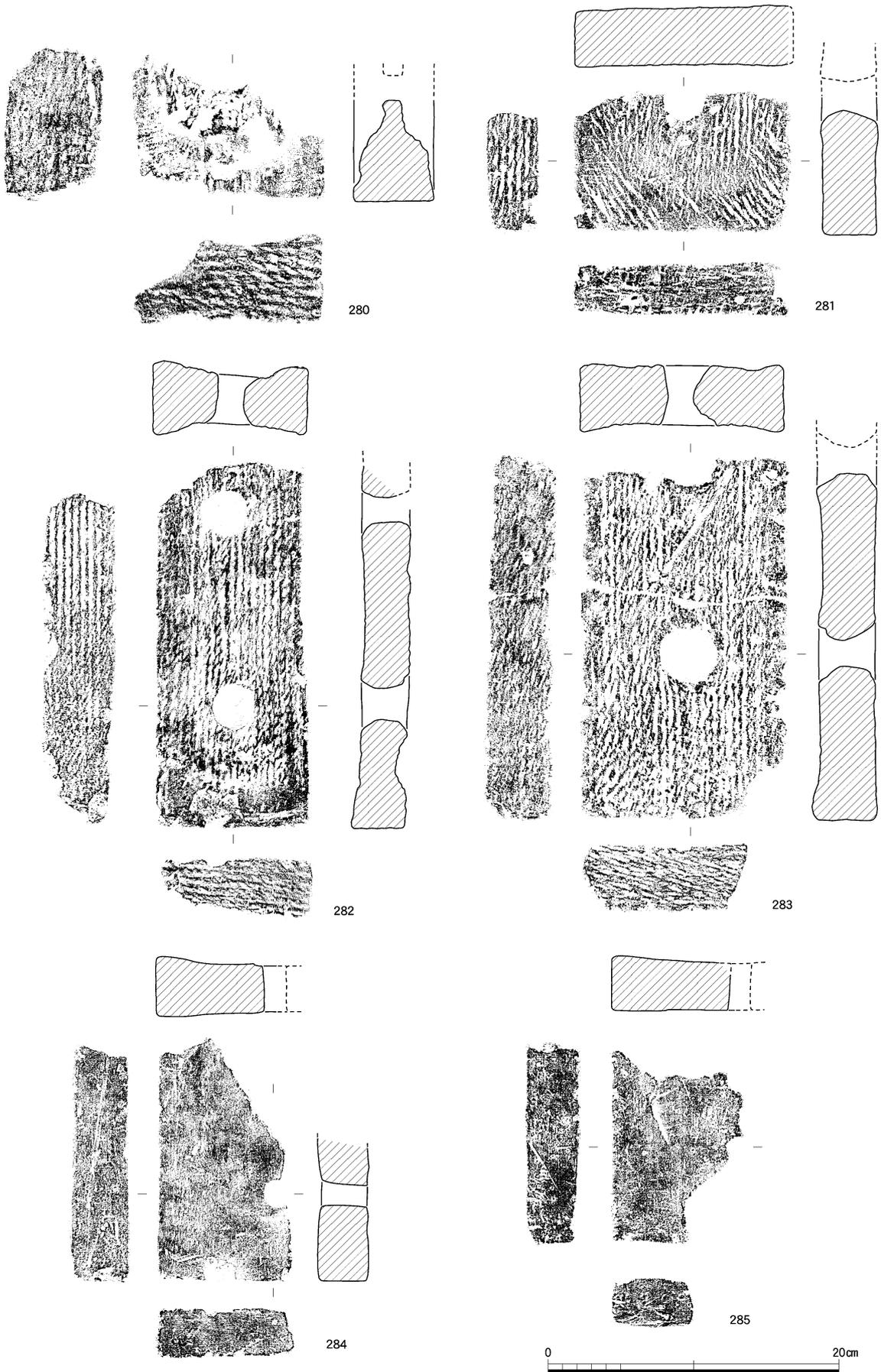


图 31 土製品拓影・実測図 4 (1 : 4)

調整はナデで、一方の面に粗いハケがある。表面は被熱により橙色を呈する。井戸 309 から出土した。IV期～V期に属する。

埴（図版 11、図 31 280～285） 方形有孔埴（280～285）・敷埴・井戸埴がある。

方形有孔埴はすべて破片である。280 は中央部が大きく窪み、穿孔が 1 箇所に残る。調整は縄タタキののち、部分的にナデである。第 2 層から出土した。鎌倉時代に属する。

281 は平坦で、穿孔が 1 箇所に残る。調整は縄タタキである。土坑 63 から出土した。期の遺構であるが、混入した可能性がある。

282 は中央部が少し窪み、幅が狭く細長い。穿孔が 2 箇所に残る。調整は縄タタキののち、周縁部をナデである。土坑 200 から出土した。V期～VI期に属する。

283 は中央部が少し窪む。穿孔が 2 箇所に残る。調整は縄タタキののち、部分的にナデである。井戸 95 から出土した。VII期に属する。

284・285 はほぼ平坦で、中央部がわずかに窪む。ともに穿孔が 1 箇所に残る。調整は全面ナデである。284 は井戸 53 から出土した。期の遺構であるが、混入した可能性がある。285 は土坑 200 から出土した。V期～VI期に属する。

敷埴はすべて破片である。方形で反りはない。井戸埴は円筒形に積み上げて井戸枠とする。側面に小さな穴がある

（5）石製品

石製品には石鍋・砥石・おはじき・玉石・軽石・方形石製品・加工した結晶片岩・花崗岩の破片などがある。

おはじき（図 32 286・287） ほぼ完形である。扁平な石材を丸く打ち欠いて円形に加工する。

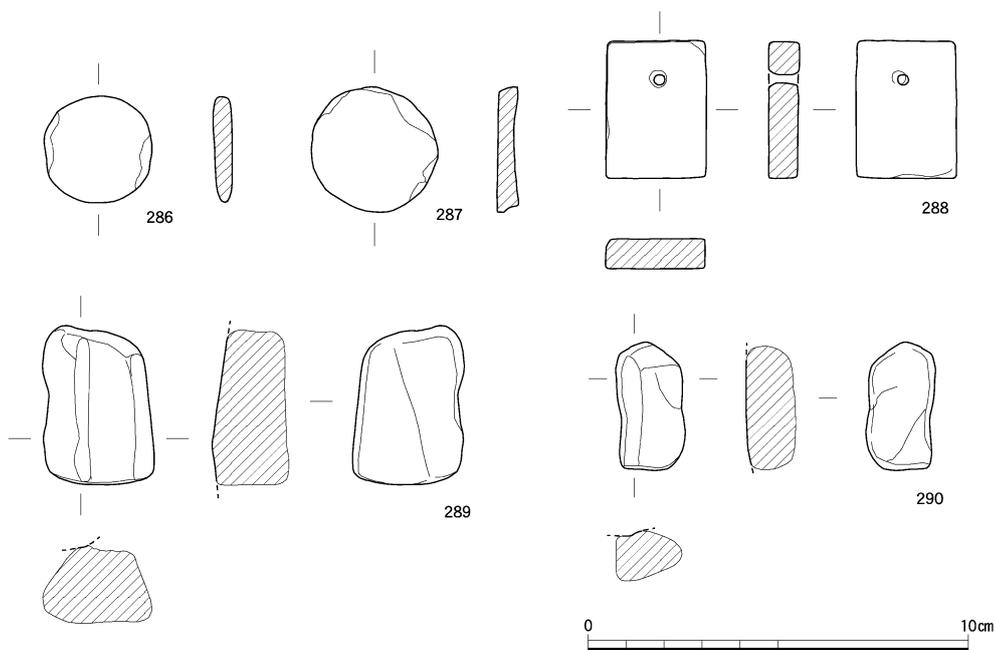


図 32 石製品実測図（1：2）

ともに石材は粘板岩である。286 は周縁を丸く仕上げる。攪乱から出土した。江戸時代以前に属する。287 は片面が剥離し、周縁は面をもつ。土坑 135 から出土した。XI 期に属する。

方形石製品(図版 12、図 32 288) 完形である。方形で反りはなく、1箇所⁷⁾に片面から穿孔する。石材は滑石である。表面の研磨は丁寧で加工痕は不明瞭であるが、長側面の一方に切断痕らしき凹凸が残る。土坑 200 から出土した。V 期～VI 期に属する。

砥石(図版 12、図 32 289・290) ともに破片である。不整形な方柱形で、小口側が折損する。石材はきめの細かい砂岩である。長軸方向に複数の緩やかな曲面の研磨面がある。表面はにぶい橙色から灰白色を呈し、被熱した可能性がある。土坑 70 から出土した。XI 期に属する。

これらの他にも平坦な砥石が出土している。石材は粘板岩である。鎌倉時代・江戸時代に属する。石鍋 破片が数点出土した。石材は滑石である。鎌倉時代から室町時代に属する。

(6) 金属製品

金属製品には銅製品と鉄製品がある。また、金属塊や鉄滓・銅滓が少量出土した。

銅製品には銅銭・銅鋌・銅火箸・銅針金・煙管・蓋・耳搔き・簪・筒状銅製品・棒状銅製品・板状銅製品などがある。

銅銭(図 33 291～301) 291 は開元通寶、292 は咸平元寶、293 は祥符通寶、294 は天禧通寶、295 は嘉祐通寶、296 は熙寧元寶、297・298 は元祐通寶、299 は政和通寶の銭銘が判読できる。300・301 の銭銘は不明である。開元通寶は唐銭、他は北宋銭であるが、大部分は径が小さく、薄い形状から模鑄銭と推定できる。

291・297 は溝 150 から出土した。VI 期～VII 期に属する。292 は土坑 306 から出土した。V 期～VI 期に属する。293 は第 2 面遺構検出中に出土した。鎌倉時代に属するか。294・296 は土坑 200 から出土した。V 期～VI 期に属する。295 は土坑 146 から出土した。VII 期に属する。298 は第 2 層から出土した。鎌倉時代に属する。299 は第 1 層、300・301 は土坑 135 から出土した。江戸時代以前に属する。

これらの他に江戸時代の遺構・包含層から寛永通寶が出土している。

金属塊(図版 12、図 33 302・303) 302 は板状で、短辺の一方はちぎれたような形状を取る。叩き伸ばして板状に加工しており、片面に平行線状の加工痕が残り、波打ち状に少し屈曲する。重量は 40.922 g である。

303 は厚い板状で、表面にはやや凹凸がある。長辺・短辺のそれぞれ一方に厚みの 2 分の 1 から 3 分の 1 まで切れ目を入れ、折取って切断する。切断は短辺側が先行する。重量は 97.199 g である。

成分を分析したところ 302・303 とも大部分は銅であるが、亜鉛が無視できない量含まれていることが判明した。⁷⁾ 金属製品の素材と考えている。ともに第 3 面遺構検出中に出土した。鎌倉時代に属する。

銅滓(図版 12 309) 連珠状に気泡でふくれる。重量は 2.881 g である。成分を分析したとこ

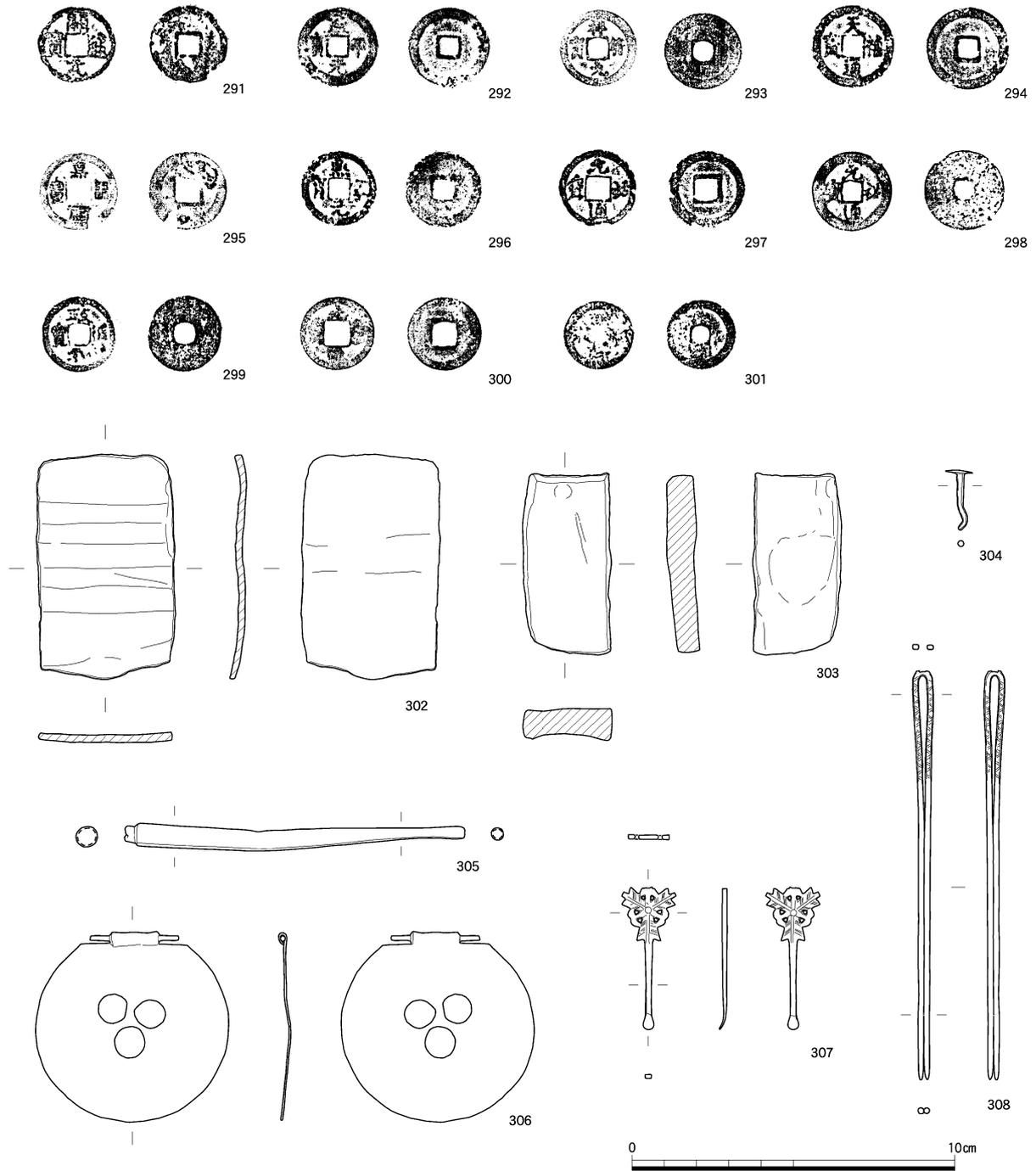


図33 金属製品実測図（1：2）

ろほとんどが銅であることが判明した。鑄造作業にともなうものと推定できる。第2層から出土した。鎌倉時代に属する。

銅鉾（図版12、図33 304） 完形である。小型で屈曲するが、先端は尖り、頭部には円盤形の笠部が付くが、成形・接合技法は不明である。第2面遺構検出中に出土した。鎌倉時代に属するか。

煙管（図33 305） 完形の吸口である。ほかに雁首の破片も出土している。銅板を円筒形に加工して、成形する。一端にはラオをつなげる段をつくる。第1面遺構検出中に出土した。江戸時代に属する。

蓋（図版 12、図 33 306） 完形である。薄い円盤形で縁部はわずかに屈曲する。中央部 3 箇所
所に円形の穿孔があり、一端に蝶番をつくる。蝶番は端部を巻き込んで成形し、細い棒状の軸を
通す。第 1 面遺構検出中に出土した。江戸時代に属する。

耳搔き（図版 12、図 33 307） 完形である。短い棒状で、先端に小さな匙形につくる。基部
は銅板を鑿で裁断・穿孔して成型したのち、三ツ矢模様を毛彫りする。土坑 17 から出土した。
期に属する。

簪（図版 12、図 33 308） 完形である。細長い棒を折り曲げて成形する。先端は両端とも尖る。
基部はジグザグ状に細かい文様を毛彫りする。土坑 17 から出土した。期に属する。

図示していないが、この他の銅製品はいずれも江戸時代に属する。

鉄製品には刀子・鉄釘・鉄釣針・鉄火箸・板状鉄製品などがある。錆による損傷が著しく、原
形がわかるものはほとんどない。

板状鉄製品と鉄釘の一部は鎌倉時代に属する。その他の鉄製品と鉄釘の多くは江戸時代に属する。

（7）木製品

木製品には井戸部材・柱根などがある。

井戸部材 縦板・横棧木・隅柱・桶部材、水溜の曲物がある。いずれも遺存状態は悪く、樹種
が判明したものは多くないが、スギ・ヒノキ・サワラなどの針葉樹を使用している。各遺構の項
で部材の樹種は記述した。

柱根 方柱形の木材片が 1 点出土している。樹種は針葉樹である。

（8）その他の出土遺物

動物遺体 貝殻・魚骨・鳥骨がある。土坑 48 からヤマトシジミ・ハマグリ・アカガイ・アワビ
などの貝殻、タラなどの魚骨がまとまって出土した。⁸⁾ 期に属する。

鳥骨は 1 点のみである。同定は行っていない。

植物遺体 少量の種子を採集した。判明したものはすべてモモである。

焼土・焼壁 少量が出土した。明橙色を中心とする色調を呈する。大部分は 1 cm 以下の細粒で
あるが、スサとして用いられた植物体の痕跡が残るものがある。壁土・屋根の葺土のほか炉の一
部であった可能性がある。鎌倉時代・江戸時代の遺構・包含層から出土した。

炭片 大部分は細片である。樹種は不明である。

灰 土坑 80 から石灰がまとまって出土した。詳細はまとめて後述する。また、土坑 200 など
からも灰のブロックが出土したが、観察の結果、これらは草木灰であった。

これらの他に漆喰片・ガラス片がわずかに出土した。江戸時代に属する。

5. ま と め

(1) 遺構の変遷 (図 34・35)

今回の調査では次のような調査地の歴史的変遷を明らかにすることができた。

調査で検出した最も古い遺構は、平安時代前期 (図 34 I 期～Ⅲ期) の七条大路路面である。調査地は平安京左京八条三坊九町北西角近くにあっており、路面は平安京条坊復元モデルの推定位置で検出した。1990 年に実施した七条大路と烏丸小路の交差点南東側の調査で平安時代前期の七条大路が検出されており、⁹⁾ 烏丸小路西側でも平安京造営にあたって七条大路が構築されていたことが確認できた。

七条大路路面は路面中央側となる北側が高くなるように傾斜をつけ、礫を含む砂質土を重ねて積み上げており、表面はよく締まっている。平安時代前期以降も同じ位置で 1～5 cm 単位の厚さで嵩上げを繰り返しながら路面が構築されており、全体では平安時代前期から江戸時代前期までの間に約 100 cm の高さになる。七条大路は平安京内の街路としてだけでなく京外への交通路として重要な位置を占めていた道路であり、江戸時代前期まで道幅を狭めることなく維持・整備されたことが明らかとなった。

一方、九町東部中央で実施した 1 次調査では、平安時代前期から中期の池跡を検出したことから邸宅の存在が推定できるが、今回の調査では平安時代前期の確実な遺構は七条大路路面以外には検出していない。七条大路南築地推定位置は鎌倉時代の土坑 200 により攪乱されており、築地などの施設の存在を確かめることもできなかった。

平安時代中期 (図 34 I 期～Ⅲ期) の遺構には井戸 383 やいくつかの土坑がある。井戸 383 は須恵器の特大型の甕の底部を打ち欠いて井戸枠として据えており、底部の標高から湧水の水位が浅かったことがわかる。

平安時代後期 (図 34 IV 期・V 期) になると調査地全体に整地による嵩上げが行われ、検出遺構数、出土遺物量とも急激に増加する。井戸には甕を据えた井戸 (井戸 362) のほかに方形縦板組の井戸 (井戸 116・井戸 400・井戸 410・井戸 415・井戸 425) が多く見られるようになる。井戸は七条大路路面より約 15 m 以南に大多数が分布している。近接して土器類などを廃棄した大規模な土坑も多い。柱穴などから個々の建物の復元はできていないが、七条大路に面して小規模な掘立柱建物が建ち並び、建物の奥側には井戸や廃棄物を処理した土坑などが配された状況が復元できる。また、これらの位置は室町小路推定路面より約 15 m 以東にもあっており、室町小路に面した家並みとの関係もうかがえる。井戸の数が多いことはこれが要因の一つかも知れない。

鎌倉時代 (図 34 VI 期・図 35 VII 期) は調査地が最も活況を呈する時期である。VI 期には七条大路南端を攪乱して、複数の土坑が重複する大規模な土坑 200 が穿たれるが、VII 期にはこれが埋没した上面に七条大路南側溝である溝 155 あるいは溝 150 がつくられる。井戸は方形縦板組の井戸 (井戸 78・井戸 311) のほかに桶を据えた井戸 (井戸 81・井戸 95)、石組を用いる井戸 (井

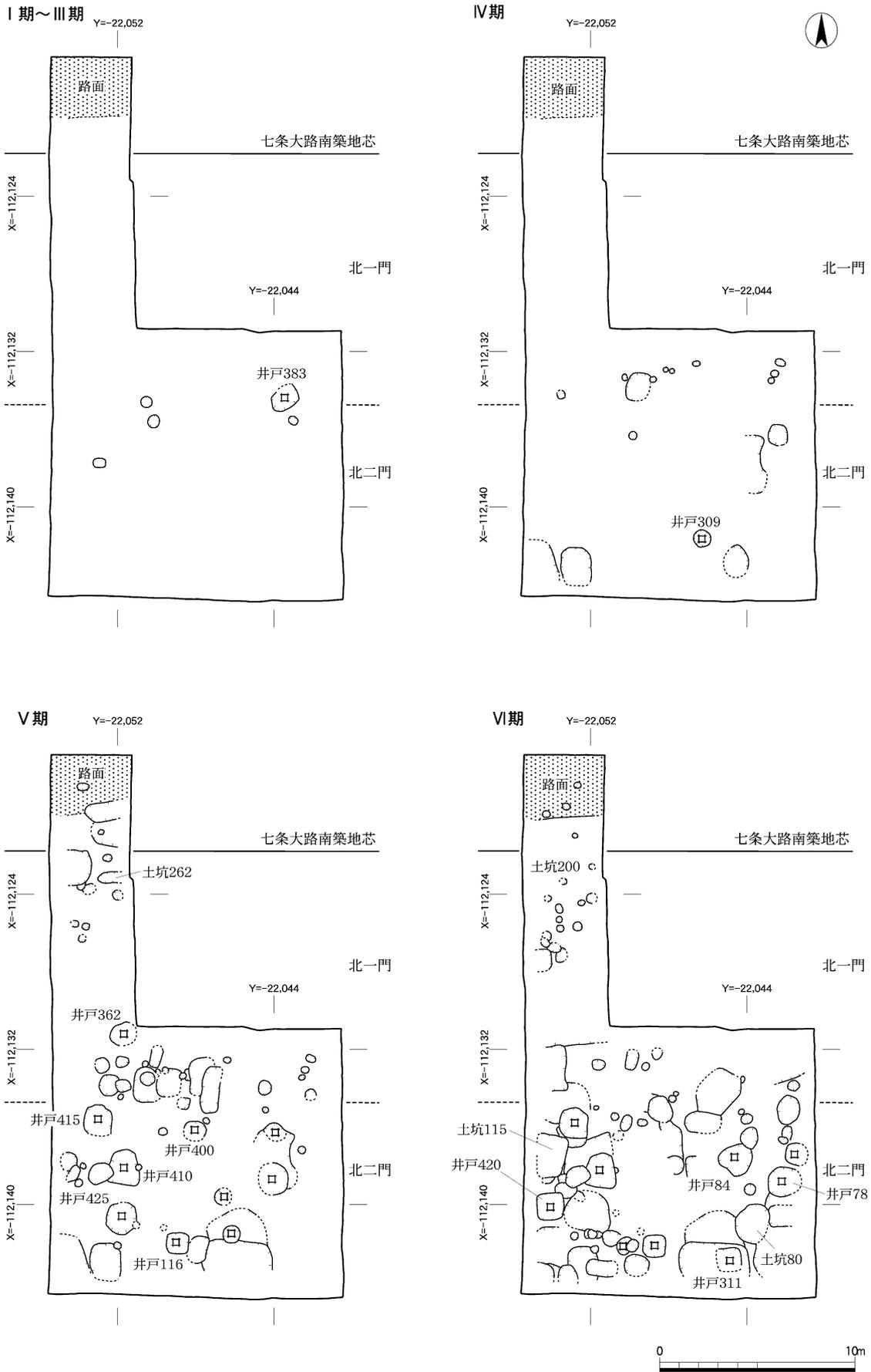


図34 遺構変遷図1 (平安時代から鎌倉時代前半)

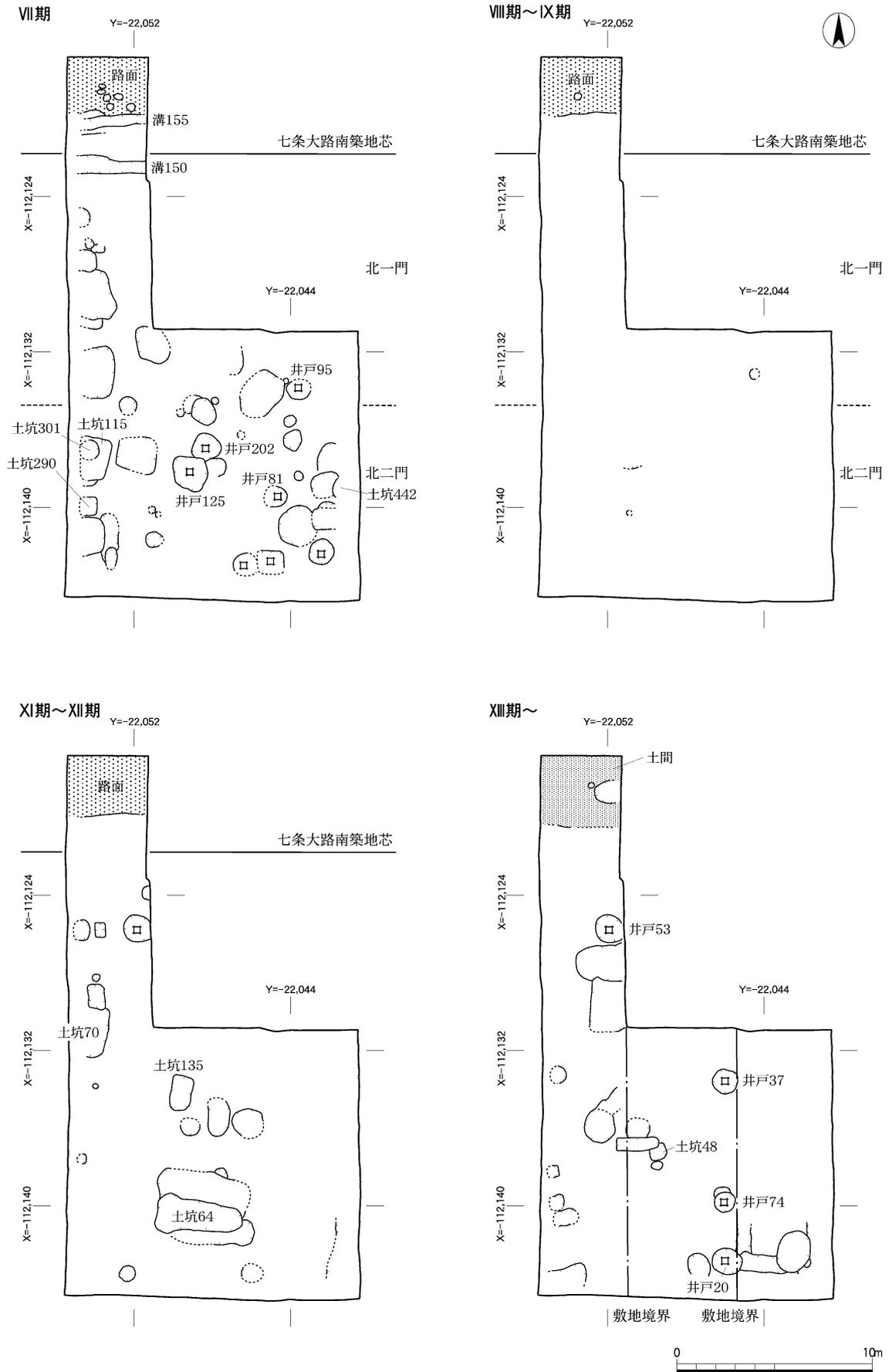


図 35 遺構変遷図 2 (鎌倉時代後半から江戸時代)

戸 84・井戸 420) などがあり、Ⅶ期には縦板を多角形に組む井戸 (井戸 125・井戸 202) も現れる。Ⅶ期の土坑 301・土坑 422 は焼締陶器の大型の甕を据え付けている。内容物は不明であるが貯蔵に用いた施設と推定できる。土坑 290 は握りこぶし大の石を詰めた土坑で、排水処理施設の可能性がある。Ⅵ期の井戸 420 直上に作られており、井戸を転用したことが考えられる。これらの遺構の周囲には石灰が出土した土坑 80 をはじめ土器類などを廃棄した土坑も多い。鎌倉時代も遺構の分布は平安時代後期と同様の状況にあり、柱穴などから個々の建物の復元はできていないが、七条大路・室町小路に面して小規模な建物が建ち並び、奥側を井戸、物資の貯蔵、廃棄物の処理に使用した状況が復元できる。

出土遺物の中には製品の素材と考えられる金属塊、埴埴・取瓶・鋳型などが多く含まれており、特に素材と考えられる金属塊は周辺では初めての出土であり特筆できる遺物である。調査地でも鋳造生産をはじめとする手工業が活発に行われていたことが推定できる。遺跡の活況は室町時代前期まで続く。

室町時代前期以降 (図 35 Ⅷ期～Ⅸ期) になると七条大路面以外の遺構はほとんど認められない。また、戦国時代 (Ⅹ期) の遺構はない。遺物も極少量しか出土していない。この頃には居住の痕跡は全くなり、空闲地もしくは耕作地としての利用が行われていたと推定できる。

なお、調査では東本願寺前古墓群に関わる埋葬施設・遺物を検出することはなかった。調査地が七条大路に面して交通が活発な場所にあたり、また、居住域・商工業活動域として高度な土地利用が行われたことが原因と考えている。遺跡として拡がりをもつ東本願寺前古墓群の具体的な墓域を復元する手掛かりとなった。

江戸時代前期になると、再び、調査地全体に整地による嵩上げが行われる。土坑 64・土坑 70・土坑 135 などの大小の土坑がみられるようになり、出土遺物量が増加する。東本願寺の造営など周辺の開発が影響を及ぼしたと推定できる。

江戸時代中期には、平安時代前期以降江戸時代前期まで維持されていた七条大路面の上面に整地が行われ、土間が作られる。この時期に七条大路南側の路面が現在の位置にまで狭められたことが明らかとなった。調査区断面の観察により土間やこれにともなう整地層は七条通寄りに拡がることから、七条大路に面して建物が建てられたことがわかる。土坑は南部を中心に分布する。土坑 48 から出土した魚介類の食物残渣は当時の食生活の一端を示している。また、調査前の敷地境界と井戸の位置を見ると、井戸 53、井戸 37・井戸 74・井戸 20 はいずれも敷地境界に西接して南北に並ぶ。このような遺構の分布状況から、七条通に面する南北方向に細長い敷地の北側に建物が建ち並び、東側を通庭とし、南側は廃棄物の処理などに利用した状況が復元できる。また、幾度かの火災を経ながら、敷地境界が江戸時代中期以降、現代まで踏襲されていたことも明らかとなった。

(2) 土坑 80 出土の石灰について (図 35 ~ 38)

第2面で検出した土坑 80 からは、真っ白な灰がまとまって出土した (図版 4-1、図 13)。灰は土坑埋土上半部中央にかたまっており、他の埋土が混じる部分もあるが、堆積状況から一括して埋没したものと判断できる。類例のない遺物であるのでサンプルを採集し、分析をすすめた。

灰は白色で非常にきめが細かく、中には大きさ数mm角程度の炭片を含んでいる (図 35・36)。灰の部分を分析したところ、草木灰ではなく炭酸カルシウムを成分とする石灰であることが判明した。前近代における石灰の原料は貝殻・石灰岩があり、いずれも材料を高温で焼いて製作する。炭片はこの作業にともない混入した可能性が考えられる。

原料を特定するために石灰を顕微鏡で観察したところ、粒子が均質で非常にきめが細かいことを確認できた (図 37・38)。貝殻の微細片を認めることはできず、また、石灰岩から生成した石灰との比較観察では同質の構造を確認できたので、出土した石灰は石灰岩を原料とすることが判明した。

前近代における石灰の利用法としては、白壁の上塗り材・白色顔料としての胡粉・金属器生産での触媒などがある。壁材・顔料は貝殻を原料とすることが多いようである。一方、金属生産については、今回の調査でも坩堝・取瓶・鋳型や銅滓などが出土したことを合わせると、周辺で活



図 36 石灰サンプルブロック

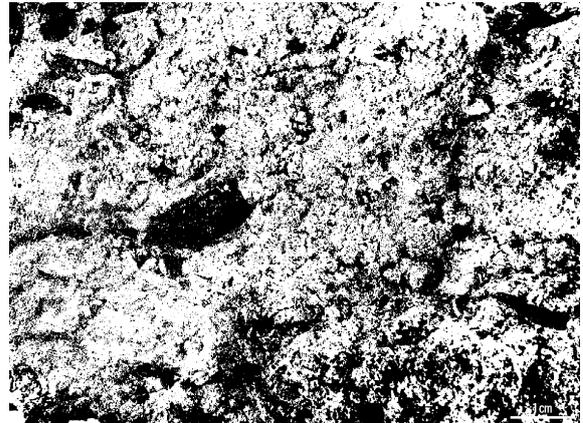


図 37 石灰サンプルブロック細部

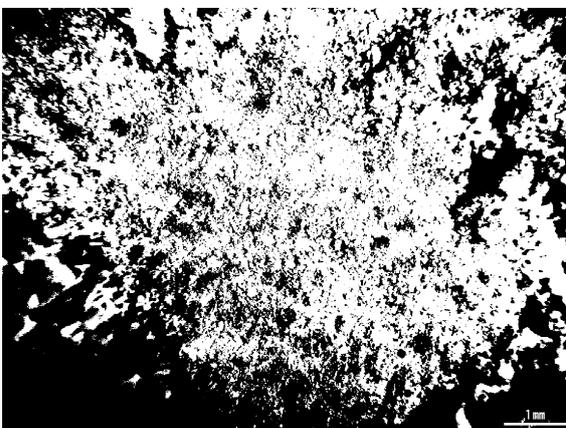


図 38 石灰顕微鏡写真 1

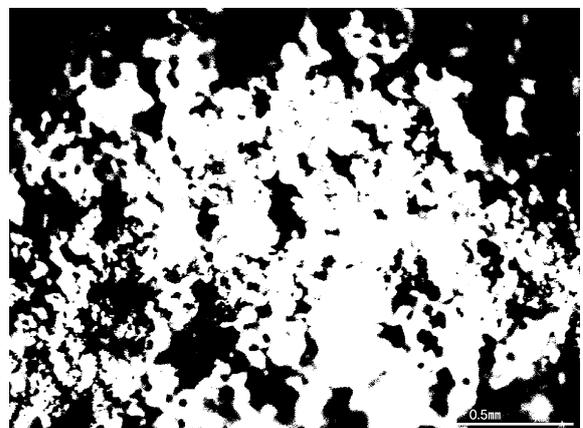


図 39 石灰顕微鏡写真 2

発に行われていた銅製品生産との関連が推定できる。「正倉院文書」の中の石山寺での鏡製作についての見積書である「東大寺鑄鏡用度注文案」には、材料の金属や仕上げの砥石などのあとに「荒炭十二石、和炭六石、石灰一斤、(後略)」の記載があり銅鏡製造に石灰を使用したことがわかる。前近代の金属生産における石灰の使用法については不明なことが多く、銅の媒溶剤あるいは型土の原料などが推測されている¹⁰⁾。また、北九州市の室町遺跡では、媒溶剤としての使用について考察されている¹¹⁾。調査で出土した石灰は、鎌倉時代の金属生産の復元研究への貴重な資料である。

平安京左京八条三坊周辺は、平安京城の中でも最も頻繁に調査を実施している地域の一つである。今回の調査により、これまでの調査成果を裏付け、補強することに加えて、いくつもの新たな知見を得ることができたことは、大きな成果といえるだろう。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局、2007年。
- 2) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968～1976年。『京都市の地名』平凡社、1979年。『平安京提要』角川書店、1994年など。
- 3) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所、1996年。
- 4) 註3)に同じ。

750頃	840頃	930頃	1010頃	1080～90頃	1180頃	1270頃	1360頃	1440頃	1500頃	1580～90頃	1660頃	1740年代頃	1820年代頃
I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII	XIV
古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新	古 中 新

- 5) 灰釉陶器の製作技法の系列にあり、一方で無釉化がすすんだものを「灰釉系陶器」と呼称する。
- 6) 従来の土師器の系譜につながる橙褐色の胎土の土師器を「赤色系土師器」、VI期以降に増加する白色の精良な胎土の土師器を「白色系土師器」とする。
- 7) 北野信彦氏(東京文化財研究所)にご教示いただいた。
- 8) 丸山真史氏(京都大学)にご教示いただいた。
- 9) 「平安京左京八条三坊1」・「平安京左京八条三坊2」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1994年。
- 10) 小林行雄『古代の技術』塙書房、1962年。
- 11) 『室町遺跡 - 小倉鑄物師に関する遺跡の調査 -』(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室、1990年。

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうさんぼうきゅうちょうあと							
書名	平安京左京八条三坊九町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-6							
編著者名	山本雅和							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 ひがしほんがんにまえこぼぐん 東本願寺前古墓群	きょうとししちぎょうく 京都市下京区 しちじょうどおりからすまにしいる 七条通烏丸西入 ひがしきかいちょう 東境町171、173、 173-1、173-2、 175	26100	1 719	34度 59分 20秒	135度 45分 31秒	2010年5月 10日～2010 年7月9日	264m ²	ビル建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代		土器類		平安時代前期から 江戸時代前期にわ たる七条大路路面 を確認した。		
東本願寺前古墓群	墓跡	平安時代前期 ～中期	七条大路路面、 井戸	土器類、土製品				
		平安時代後期	七条大路路面、 井戸、土坑、柱穴	土器類、瓦類、土製品、 石製品、金属製品、木 製品				
		鎌倉時代～ 室町時代前期	七条大路路面、溝、 井戸、土坑、柱穴	土器類、瓦類、土製品、 石製品、金属製品、木 製品				
		室町時代中期 ～桃山時代	七条大路路面	土器類				
		江戸時代	七条大路路面、 土間、井戸、土坑	土器類、瓦類、土製品、 石製品、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-6

平安京左京八条三坊九町跡

発行日 2010年9月30日

編集

発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961